兵庫の港

兵庫の築港は清盛の私財によつて一旦は完成され、沖へ三十六町ばかりも突出した築堤の上に程なく人家なども建てられるやうになり、夜間出入する船舶のために、和田松原には燈臺まで建てられたけれども、その工事はまだ完全でなかつたと見えて、間もなく防波堤は再び大破したので、治承四年二月官符を諸國に下して、畿内、山陽南海の諸國には田一町、畠二町毎に一人の人夫を宛て、東海西海の二道には、調庸を運上する船舶に對し、その船夫に三日間の勞役を課して、築港の工事を完成しようとした。けれどもこの年の五月に以仁王の兵を擧げたのが導火線となつて、諸國の源氏が並び起り、その翌年には清盛も暴かに病死したので、築港の工事は再び頓挫したものと見えて、その後十六年を經過した建久七年に、東大寺の名僧重源の奏請により、再び諸國に課して築港の事業を繼續させた。

宋との交通

こんな風に清盛は、早くから海上の經營に力を注いで、瀬戸内海を自己の勢力範圍に收め、後には長門を管國として、下ノ關の要衝を握り、更に家人平家貞を九州に置いて西國の監視に宛て、自身は福原の都に安坐して、海外の貿易船を博多から兵庫まで引寄せようとした。この計畫はある程度までは成功して、清盛の在世中に、もう支那や朝鮮の船が兵庫へ入るやうになつた。高倉天皇の嘉應二年には後白河法皇が清盛の福原の邸へ行幸になつて、宋人を御覽になつたことがあり、それから一年おいて、承安二年には、宋の明州の刺史から使が來て、法皇及び清盛に品物を贈つて來た。その時の目錄に「日本國王に賜ふ物色、日本國太政太臣に送る物色」とあつたので、朝廷ではそれが議論の種子になつて、大外記清原賴業などは、「清盛に送つて來ただけ受納して置いて法皇に宛てた賜物は突返して返事を出さない方がいゝ」と主張した。併し清盛はそんな形式上の議論には耳を傾けなかつたと見え、翌年宋の使と一しよに人をやつた時、法皇からは蒔繪の厨子、色革、手箱などに沙金百兩を添へ、清盛からは劍一腰、手箱、武具などを贈つて返禮をした。

外國文化の輸入

そんな風に外國の商人や使者が頻りに福原へ往來したので、保守思想で固まつた公卿のうちには眉をひそめた者も多かつた。(三)

清盛が日宋の交通に着目し、外國文化の輸入に熱心であつたことは、治承四年に『太平御覽』を朝廷に獻じたことなどからも推測される。この書は千卷以上もある大部のもので、宋朝一代の事蹟を網羅し、その頃新しく印刷されて、また日本には渡らなかつたものであつた。あの重盛が黃金三千兩を、九州の船頭妙典に授けて、遙々宋の育王山の僧佛照に屆けさせたといふ傳說なぞも、同じ消息を語るものではないか？それば

海の日本の復活

かりでなく清盛の心が、いかに異國の事物に憧れてゐたかといふことは、高倉上皇が嚴島へ御幸になつた時に、清盛は福原から唐船を出して、水夫には宋人を使ひ、嚴島へ着いてからも、島の内侍八人に支那風の粧ひをさせて、舞樂を御覽に入れたといふ事實のうちにも充分に示されてゐる。(四) 後年平家の一門が、都を落ちてから、殆んど海上を家とし、船を都として、三年を送つたのも決して偶然でない。

この點に於て清盛が新時代の創造者の一人として、久しく忘れられた海上の日本を復活した偉功を沒却さるゝことは出來ない。

(一)(二)『長秋記』。
(三)『玉葉』。
(四)『嚴島御幸記』

兩宮の反目と清盛

二代后

第六章　平清盛の執政

第一節　平家一門の繁榮

平治の亂に清盛がその競爭者であつた義朝を斃してから、源氏の莊園は大部分平家の手に移り、これまで源氏に屬してゐた東國の武士も、勢ひに押されて大抵は平家の家人となつたので、此時から平家一門の莊園は日本全國の半に及ぶといはれるほどの勢になつた。併し平治の亂には、やう〳〵太宰大貳に過ぎなかつた清盛をして、八年の後には從一位太政大臣に昇つて、天下の政權を握るまでにならせたのは、主として宮廷の内訌の結果であつた。固より清盛の人物手腕が、當代に卓越してゐたことは、爭はれない事實であるが、併し院政につきまとふ不自然な政情が、いよ〳〵昂進して院と内裏との反目が、院政の弱點を内部から暴露するやうなことがなかつたら、これほど速に政局の中心に立つまでにはならなかつたらう。

二條天皇は後白河天皇の讓を受けた時には、まだ十六歳の少年であつたが、矢張後三條系の頽廢期の特質を備へて、英明な併し我儘な君主であつたと思はれる事實は、

何よりもあの一旦皇太后の號を受けた近衛天皇の皇后藤原多子を、二代の皇后に擧げた一事によつても推測される。多子は右大臣公能の女で、賴長が全盛時代に自分の宮中に納れたものであつたが、その頃にはまだやう〳〵廿二三歳で、近衛河原の御所に閑居してゐたのを、天皇はその美貌の噂を聞いて、父右大臣に諭して無理やりに皇后に立てようとした。上皇を初め、群臣もそれを聞いて止めようとしたけれども、天皇は、「天子に父母はない」といつて、つひに聽かなかつた。

經宗惟方の流罪

天皇と上皇との衝突は、先づ經宗、惟方の流罪によつて開かれた。經宗は天皇の舅であり、惟方は天皇の乳母の子であつた關係から、天皇の信任を受けてゐたが、平治の亂に信賴を使嗾して、院中の權力家信西を斃し、續いて信賴をも殺したので、いよいよ自分の時代が近づいたと思つた。それには上皇の政權を奪つて、天皇の親政にしなければ都合が惡いので、天皇の仰せと稱して、上皇に對して壓迫を加へるやうな所行があつた。上皇は清盛を召して、父子の間を隔てようとする兩人の所爲を語り、その成敗を相談に及んだので、清盛は上皇の仰せに從つて兩人を捕へて流刑に處した。これは平治の亂から百日もたたない時のことであつた。此事があつてから天皇と上皇との間の感情の縺れは、いよ〳〵甚しくなつた。天皇方でその報復として、上皇の近臣に對して刑罰を加へれば、上皇方でも、天皇の近臣に壓迫を加へるといふやうな有樣で、この抗爭が擴大したら、更に第三の內亂が爆發しさうな勢であつたが、天皇は二十三歳で病死したので幸に無事に濟んだ。かういふ兩宮の反目の間に立つて、如才ない清盛は成るべくその渦中から遠ざかつてゐた。兩方の黨與から身方に引入れようとするのを上手にあしらつて、內裏では皇居の近くに宿直所を設けて置いて、出仕を怠らないと同時に、上皇のためには蓮華王院を造營し、千體の千手觀音を安置し、長寬二年十二月盛大な供養の式を行つた。(一) それればかりでなく、清盛の妻時子の妹滋子は、後白河上皇の寵を受けて、應保元年に皇子憲仁親王を生み、院の御所で勢力を占めるやうになつたので、緣につながる清盛も、いよ〳〵上皇のお覺えがめでたかつた。

清盛の官位昇進

こんな風で、清盛は、平治の亂後とん〳〵拍子に位階が昇進し、永曆元年には從三位に陞り、參議に任ぜられ、翌年權中納言に進み、長寬二年には蓮華王院造營の功によつて備前の國を賜はり、嫡子重盛は正三位に進められた。この年前關白藤原忠通が死んで、その子の關白基實は廿二歳であつたが、清盛は自分の女盛子を基實に嫁し、攝關家の外祖として愈〻政權の中心に接近することになつた。その頃から陰謀に長じた院の近臣の間には、清盛に對する恐怖の感情が次第に濃厚になつて行つた。彼等の

眼に映じた清盛は第二の賴長でもあり、信西でもあつたに相違ない。

宮廷に於けるこの暗流が、最初に清盛を警戒したのは、二條天皇の大葬で世間の動搖してゐた折のことであつた。二條天皇は病が重ると共に、二歳になる皇子順仁親王に位を讓つて、永萬元年七月に崩じた。その大葬の折に席順のことから、集まつた僧侶の間に爭論が起つて、興福寺の僧が先づ延暦寺の立札を切り倒した。それが緒口となつて、八月九日には延暦寺の僧が山を下つて、興福寺の末寺たる清水寺を燒き拂つた。この騷ぎの間に、「上皇が山門の衆徒に命じて、清盛を討たせるのだ」といふ風說が立つたので、平家の一門は六波羅の邸へ集まつて、防戰の準備をした。上皇はその事を聞いて、親しく六波羅へ駕を枉けて、辯疏しようとしたが、清盛は病氣だといつて出なかつた。上皇は清盛の怒をなだめるために、俄かに官を進めて大納言とし、翌仁安元年の十月には憲仁親王を立てゝ皇太子とし、續いて清盛を內大臣としたが、翌年の二月には左右大臣を經ずしてすぐに太政大臣に進め、隨身兵仗を許したのである。

後白河上皇と清盛

六條帝の讓位

かういふ破格な昇進は、ある意味に於ては後白河上皇の清盛に對する懷柔策であつたらうが、一面に於ては滿朝の公卿が清盛の勢力に壓せられて、齒の立つほどの者もなかつた趣が看取される。清盛は二ヶ月の後に太政大臣を辭し、翌仁安三年二月には大病に罹つたので、出家して清蓮と號したが程なく淨海と改めた。この時清盛の容態は一時危篤を傳へられた程であつたので、上皇は御微行で六波羅の邸へ見舞においでになり、清盛との間に相談であつて、急に六條天皇から皇太子憲仁親王に位を讓ることになつた。天皇は四歳皇太子は八歳で、二月十九日讓位、三月廿日に卽位の式が行はれた。これが高倉天皇であつた。この讓位は恐らくは清盛の希望に從つたものでもあつたらう。併し運の强い入道は、この時危い命を生きのびて、これからまだ十四年の間、政局の中心に立つて、獨裁の權を揮ふこととなつた。この時清盛は五十一歳、後白河上皇は四十二歳で、この兩雄の爭覇戰は、今後の政局に層々の波瀾を描き出すのである。

平資盛肖像

こんな風にして、清盛は平治元年から仁安三年まで八年の間に太宰大貳から從一位

一門の顯達

資盛の暴行

太政大臣まで昇りつめて、これで藤原氏以外には例のなかつたほどの出世をしたけれども、これは勿論清盛一人のことではなく、それにつれて平氏の一門は、嫡男重盛、次男宗盛、弟頼盛、教盛、經盛を始めとして、官位がめき〳〵と昇進した。特に憲仁親王卽位以後の勢はめざましいくらゐで、平家一門の公達は藤原氏の公達と相竝んで殿上の風流を競ひ、その全盛時代には一門の公卿十六人、殿上人三十餘人、その他諸國の國司や六衞の武官を帶びた者が八十餘人に達し、大納言時忠をして「平氏でないものは人でない」と放言させるまでになつた。高倉天皇の卽位から二年ばかりたつた嘉應二年七月のことであつたが、重盛の嫡男資盛が忍び歩きのかへりに、攝政基房の車に行逢つた。その時資盛は車に乘つたまゝで、敬禮もせずに行過ぎようとしたので、基房の家來がその無禮を咎めて資盛の車の簾を切破つた。基房は後に相手が平家の一門だと知つて、其家來を撿非違使の廳へ差出して謝罪の意を表したけれども、重盛の家來は深くそれを根にもつて、その年十一月廿一日に基房が高倉天皇の元服定に參内する途中を待伏せして、基房の家來を散々に打懲し、その髻を切つて復讐した。(一)これがために攝政はとう〳〵參内せず、元服定も延期になつたけれども、基房はその次の日から參内して、知らぬ顏に過ごしてしまつた。攝政に對してさへこの通りであつたとすれば、その他の公卿が、平家の威勢に壓せられて、次第に内心に不滿を懷くやうになつたのも不思議はない。平家に對する陰謀が、法皇を中心として、仕組まれるやうになつたのは、この頃からであつた。

(一)『愚管抄』卷五。
(二)『愚管抄』卷五。『玉葉』。

清盛の結婚政略

第二節　平氏顚覆の陰謀

清盛が政權に近づいた第一の階段は、平治の亂にその競爭者たる源氏を倒して、その一門に集めた天下の武力と莊園の富とを擁して、院と内裏との反目の間を上手に遊泳したことであつた。彼れはこの間に一方ではその家人を目代として諸國に配置し、又は莊園の地頭として、天下の武士を制御させたと同時に、一方では海上の富源に眼を注ぎ、兵庫の港を修築して、出入の船舶に一種の海關稅を課し、又海外の貿易船を引寄せて、居ながら貿易の利を收めようとした。この莫大な經濟力と武力とによつて或度までその目的を達した清盛は、更に家門の榮達を計るために、藤原氏の故智に倣つて結婚政略を用ふることを忘れなかつた。清盛には九人の女子があつたが、彼れは最初

そのうちの一人を信西の子成範に娶はせて、信西との結托を堅くしたが、成範の死後この女は左大臣兼雅に再嫁した。その後清盛は關白基實をその女盛子の婿として、爰に攝關家の岳父となつたが、基實は廿四歳で、仁安元年に死んで、その弟基房が代つて攝政となつた。盛子はこの時まだ十歳の少女であつたので、清盛は攝關家との緣をつなぐために繼子の基通を盛子の子にして養育させ、假に他の一女を基通に嫁はせて攝關家との關係を絶たないやうにした。他の一方ではその妻時子の關係から、當時院中の切れ者であつた平時忠と結んだ上に、時忠の妹の滋子が、上皇の寵を得て憲仁親王を生んでからは、更に宮廷との關係も結ばれるやうになり、親王が帝位を履むと共に、清盛は、皇室と攝關家とを左右に擁して滿廷の公卿に臨む地位になつた。

清盛は剃髪後は大抵福原の邸にゐて、そこから萬事を指圖してゐたので、後白河法皇も折々福原へ御幸になつたが、承安元年十二月法皇は清盛の女德子を自分の養女にして、宮中に迎へ、間もなく天皇の中宮に進めた。この時高倉天皇は十二歳中宮は十六歳であつたが、七年の後に皇子が生まれ、翌月すぐに皇太子に立てられ、三歳で位を讓られた。これが安德天皇であつた。

清盛の婚姻政略は、こんな風に着々成功して、とうゞ藤原氏のお株を奪つて皇室の外戚といふ地位にまで進んだ。この頃になつては、平家一門の榮進は愈〻目ざましいばかりで、叙任の沙汰のたびに、平家の公達ばかりが顯榮の地位に進められるので、選に洩れた公卿には不平不滿がありがちであつた。その頃重盛は累進して内大臣左大將となり、次男宗盛は中納言右大將となり、三男知盛は三位中將となり、舍弟頼盛は正二位大納言となり、嫡孫維盛は四位少將となつた。これらの任官が公卿や院の近臣らの羨望の種子になつたのは當然なことで、中にも當時院中に飛ぶ鳥を落す勢のあつた大納言成親などは、現に檢非違使の別當として、丁度平治の信頼のやうに、かねゞ大將に望をかけてゐたので、それが平家の公達によつて先んじられたのを見ては、平家に對する不快は愈〻深くならざるを得なかつた。又北面の武士から出て、後白河法皇の寵を蒙つてゐた者に西光入道といふものがあつた。西光は藤原師光といつて、もと信西入道に引立てられて世に出たもので、沒落の際にも信西について大和へ下り、師の最期のきはに自分も出家して西光の法名を貰つた。そんな因緣から、その後も後白河の院中に寵用されて何事にも相談相手となり、その子師高と共に院中第一の切れ者といはれてゐた。相應に氣骨もあり、機略にも富んだ法師である。清盛の權勢が院中に壓迫を加へるやうになつた時、平家排斥の第一聲が、成親と西光との握手によつて擧げ

中宮德子

反平氏の空氣

座主明雲と清盛

藤原成親

られたのに不思議はない。

清盛は若い頃に一度祇園の社に田樂を獻じて、祇園の社人と喧嘩をしたことから、叡山の衆徒の嗷訴にあつて、銅三十斤の罰金を課せられたことがあつた。その後二條天皇の大葬の後にも、山の衆徒が六波羅に押寄せるといふ噂に驚かされた。そんな事から清盛は山門の操縦には心を碎いたものと見えて、仁安二年に明雲が天台座主となつた後間もなく、明雲に菩薩戒を受けて、師弟の約を結び、明雲によつて山僧らを懷柔しようとした。明雲は權大納言顯通の子であつたが、餘程政治家風の傑僧と見えて、前後十四年の間に幾度かその地位を奪はれたけれども、その度に叡山が動搖して、どうしても明雲を座主に戻さなくては鎭まらなかつた。この兩雄の結托が、端なくも平氏顚覆運動の導火線となつた。

高倉天皇卽位の翌年の十二月、叡山の衆徒が、神輿を擔いで山を下り、宮城へ押寄せて、權中納言成親を嗷訴した。事の起りは、成親が尾張ノ國司を拜任した時に、目代として派遣した者が、延曆寺に屬する美濃の平野莊の祠官を殺したので、衆徒が座主明雲に訴へて、上奏の手續をしたけれども、許されなかつたからであつた。この時法皇は山僧を宥めるために、一時その願を許して、成親とその目代を罪に處したけれど

平清盛と平重盛

上圖は平清盛の畫像で、下圖は重盛のそれである。傲岸不屈であつた清盛の顏貌は、俗間の畫に見られるやうな魔相を持つてゐないけれども、强志のシムボルといはれる長い頤に、彼れの性格が反映せられてゐる。眼尻の下つた蒙古眼の所有者である重盛の溫容は、どことなく德の高い、心の廣い彼れの性格を表現してゐる。

平重盤

平と盤清

ある。ふの高い、ふの廣い盤に、特徴の特性が発揮されるところに、は容易に盤の重厚さが

ない。盤の特性の特徴が、に関係、長されは

大者有所の鄭古輩に、すしの所の河原がるる。鄭の所のすしの所の河原がるる。

ンンゲ＊ムゲ＊ンンの志願、ゲンゲンゲン

も、僧徒が山へ引揚げてしまふと、俄かにその處分を取消し、却つて衆徒を鎭めなかつたといふ廉で、座主明雲に譴責を加へ、又山徒の訴を取次いだといふ廉で、權中納言平時忠、藏人頭平信範を流罪に處した。併し翌年の正月山の衆徒は、その事を聞いて再び騒動を起したのだ、公卿が評議を凝して再び成親の官を解き、時忠と信範を召還した。この處分は恐らく清盛の計らひに出たのであつたらう。

それから八年經つて、治承元年三月に、山僧がまた京都へ押寄せて來た。此たびの事件は西光の子の師高に關したことであつた。師高はその時加賀守であつたが、目代としてやつて置いた弟の師經が、勢ひに任せて寺社の莊園を沒收したので、僧侶との間に紛爭が起り、白山の末寺の涌泉寺を燒拂つたのを、白山から本山の延曆寺へ訴へて來て、とうゞ〳〵この度の嗷訴となつたのである。朝廷では最初師經だけを流刑に處して、山徒をなだめようとしたが、衆徒はそれだけでは納得しないで、翌月もまた神輿を擔ぎ込んで來て、大騒動を起したので、法皇も餘儀なく師高の處分をして、山徒を鎭めることが出來た。併しそれは衆徒を宥めるための一時の軍略であつた。西光らは叡山の衆徒がかう度々騒動を起すのは、座主明雲が平家と結托して、背後から絲を引いてゐるためだと睨んだので、先づ明雲に處分を加へて、この聯盟の一角を切崩さ

なければ、叡山の衆を手懐けることは出來ないと思つたでもあらう。衆徒が山に引返してから半月ばかり經つと、朝廷からは不意に撿非違使を差向けて、座主明雲を捕縛させ、天台座主の職を奪ひ、謀叛罪に問うて、その所領四十餘箇所を沒收し、伊豆國に流すことになつた。叡山の衆徒はまた〳〵蜂起して座主明雲の赦免を願つたが、勿論許されなかつた。清盛もこの事を聞いて、明雲を救はうとして、法皇の御所へ駈けつけたが、法皇にお目にかゝることが出來なかつた。併し山僧は明雲の護送されるのを近江の勢多で待伏せして奪ひ取つて、山へ還つてしまつたので、朝廷では山徒の處分について評議を重ね、一方では諸國の國司に命じて叡山の末寺や莊園を調査させ、又近江、美濃、越前三ヶ國の武士を調べさせると同時に、一方では叡山に向つて、謀叛の趣意を尋問し、兵を差向けて、東西の坂を固めて叡山を包圍させようといふことになり、清盛を召して、法皇から相談があつたが、清盛は無論贊成はしなかつた。(一)

鹿谷の密會

この前後から法皇を中心として、成親、西光の間には、平氏顚覆の陰謀が祕密に計畫されてゐた。そして一方には、當時法勝寺の執行として、八十餘箇所の寺領を管理し、豐富な經濟力を擁してゐた俊寛僧都を語らひ、一方には、源滿仲の流れを汲んだ多田藏人行綱を身方にたのみ、東山鹿ヶ谷にある俊寛の山莊に密會しては謀議を凝らしてゐた。その席には折々は法皇も御微行で御幸になるもことあつたが、叡山討伐の勅命を清盛が奉じないのを見て、愈〻豫ての計畫を實行し、山徒を討伐するといふ口實の下に兵を集めて、清盛を討たうといふまでに運んだらしい。

陰謀の失敗

併しこの陰謀は、一旦その一味に加はつた行綱の變心によつて失敗した。清盛は行綱の密告を聞くと、すぐに成親、西光らを捕へて、嚴重に訊問を加へたので、兩人とも罪に服して、悉く陰謀の次第を白狀した。清盛はその夜のうちに西光の首を刎ね、成親は重盛の取なしで備前の國に流すことになつたが、配所へ着くと間もなく失はれた。これは治承元年六月一日のことであつた。清盛は引續いて同類の處分に着手し、俊寛を初めとして、中原基兼、平佐行、平康賴、惟宗、信房などいふ院の近臣は官を褫いで、それ〴〵流罪に處せられ、西光の子の師高は尾張の配所で殺された。同時に明雲の流罪を取消して、この一件は落着した。この際叡山の衆徒はこの噂を聞いて、山麓まで下り、六波羅へ使者を立てて清盛に感謝の意を述べ、尙ほ力のいる場合には、いつでも加勢にまゐるからと申込んだ。併し院の御所は、まるで火の消えたやうな有樣で、誰一人參内する者もなければ、近習の者も、淨海入道の立腹が烈しいと聞いて、みんなこそ〳〵と逃げ隱れてしまつた。法皇の左右の者も一時は清盛の態度を計りかね

法皇の隱忍

て不安の日を送つてゐたが、清盛はこれらの處分がすむと、西光の調書を持つて院の御所へ行き、近臣の一人にそれを渡して、「かく〳〵の次第だからこの通りの處分をしたけれども、これは偏に世のため、君のためを思つたからで、我が身のためにしたとではない」と言ひ置いて、ぷいと福原へ還つてしまつたので、一同はやう〳〵安堵の胸をなでおろした。

こんな風に平家顚覆の陰謀は未發に防がれて、ともかくも清盛の勝利に終つたけれども、法皇と清盛との暗鬪は、この事件によつて一層深まつて行つた。そして折に觸れ事に觸れて、自然に洩れる法皇の不滿不快の感情は、その周圍の空氣と同じやうな灰色に染めずにはゐなかつたらう。それでもこの事件のあつた當座は、法皇も隱忍してしきりに清盛の機嫌を取つてゐた。治承二年十一月に清盛の女德子が安德天皇を產んだ時には、法皇も御幸になつて中宮の枕元で安產の祈禱をした。その後清盛が皇子の降誕を喜んで、富士綿千兩、美濃絹千兩を法皇の御所へ獻上したのを見て、法皇は苦々しさうに、「わしは修驗者になつても世が渡れるさうだ」といつて、皮肉な笑を漏らしたといふ逸話まで傳へられてゐる。この隱忍がいよ〳〵胸中の不快を深めて、自然とその周圍に於ける反平氏の感情を濃厚にして行つたに相違ない。

清盛はまだ政權を握らなかつた頃には、しきりに結婚政略を用ひて藤原氏の公卿と關係を結ばうと骨を折つたが、その後自分が政局の中心に立つやうになつてからは、藤原氏の公卿は却つて平氏一門の公達に壓せられて、その地位を轉倒するやうになつた。平氏の一門が繁榮すればするほど、公卿の間に反平氏の感情が高まつて行くのは自然の事であつた。その上清盛が、折角婿にして自分の力にしようと思つた攝政基實は夭死をして、弟の基房が代つて攝政になつた。これまでの慣例からいふと、攝關家の世領が當然基房の手に渡さなければならないのであつたが、清盛は藤原邦綱の說に從つて、數代以前の例に溯り、基房には基實の家領のうち興福寺、法成寺、平等院、勸學院などの寺領その他二三の莊園だけを分配して、九州の島津ノ庄を始として莫大な家領の大部分と共に、東三條の御所も、代々の日記や家寶の類も、全部未亡人盛子の手に留めて置いた。併し盛子はこの時まだ十歲の少女であつたので、基實の庶子の基通を盛子の子として養育し、邦綱は後見としてその家事を管理した。こんな事から、平家と基房家とは、自然に仲が惡くなつて、家來までが互に啀み合ふやうになり、あの資盛との車の喧嘩まで出來るやうになつた。法皇も一時は兩家の間を融和させるために、盛子が基房に再嫁させようと骨を折つて見たが、この緣談は成立たなかつた。

盛子重盛の死

基實の死後十四年たつて、治承三年の六月、もうその頃では餘程濃厚になつてゐた宮廷内の反平氏の空氣に、第一の衝擊を與へたものは未亡人盛子の病死であつた。平氏に不快を懷いてゐた公卿らは、藤原氏の世領を横領した罰だといつて、手を拍つて喜んだ。(三) 基房一派の策士が久しく待つてゐた機會はとうゞ〳〵來た。間もなく法皇の計らひで、これまで盛子が後家分として知行して來た基實の遺領を殘らず取上げて、基房の家領に加へることになつた。併し平家一門の不幸はこれだけではやまなかつた。盛子の死によつて可なりの打擊を受けた清盛は、それから一月餘りの間に重盛の死によつて一層大きな打擊を受けた。强情我慢の淨海入道も、この續けざまの凶事を見ては、さすがに胸を傷めたであらう。溫厚の長者として一門の重望を一身に擔つてゐた重盛の死は、もう下り阪の平家に取つて確かに取返しのつかぬほどの損失であつた。盛子の死を春日明神の神罰だと言ひはやした公卿らは、重盛の死を聞いて、恐らく平家の衰運を語る神意のやうに感じたでもあらう。

策士らの暗中飛躍は此頃から愈〻勢がついて來た。重盛が死ぬと間もなく、法皇は重盛の知行國であつた越前國を沒收した。勿論清盛には一言の相談もなかつたのである。續いて十月八日には、攝政基房の子師家が、僅かに八歳で從三位中納言に叙任された。

法皇の果斷

老獅遂に起つ

治承三年のクーデター

その以前清盛は、基實の子基通のためにこの官を奏請しておいたにも拘らず、法皇は突然に師家を擧げて、年長の基通を追越させてしまつたのである。

こんなやうな事情が、暗い心を抱いて福原に引籠つてゐた老雄の神經を昂らせた上に、法皇と關白との間に平家を滅ぼさうといふ陰謀があるといふ噂まで傳はつた。(四) 陰謀好きの公卿らは、獅子の周圍を跳梁する鼠のやうに、得意になつて、小策を弄してゐる間に、傷いた獸王の怖しいことを忘れてゐた。老いたる獅子は遂に起つた。そして咆吼の聲を擧げた時に、凡てのものは生きた心地もなくその前に慴伏してしまつた。かうして都人士の魂を奪つた治承三年のクーデターが勃發した。

十一月十四日清盛は、宗盛と共に數千騎の兵を率ゐて福原から入京し、即日法皇に迫つて基房父子の職を罷めて、基通を關白氏〻長者とし、續いて太政大臣藤原師長以下法皇の近臣三十九人の官職を解いて、平氏及び平氏に親密な公卿を以て之に代へ、基房を太宰權〻帥に貶し、師長を尾張に流し、法皇の寵臣源資賢及びその子源雅賢、資時、信賢を信濃に放逐した。同時に明雲を天臺座主に復任し、又法皇を鳥羽殿に遷し、お側の男女を殘らず遠けて、靜賢法印と丹後〻局以下二三人の男女の外は出入を許さないこと、して、武士をやつて嚴重に守護させた。凡てこれらの處分は、十五日から廿日

の間にぱた〳〵と片付けられて、清盛は疾風のやうに福原へ還つてしまつた。

その後の京都は、まるで大風の吹いた後のやうに、暴れに暴れた五日間の恐怖から甦へつて、ほつと安堵の息をついたことであらう。清盛はこの時重衡を内裏へやつて「この頃の有様ではいつ何時朝敵の罪を受けるかも知れない、いつそその以前に中宮と東宮を奉じて九州へ下り、一切政事上の關係を絶つつもりだ」といふ意味を奏上させ一方では中宮徳子と皇太子言仁親王を内裏から西八條の邸へ迎へる準備をしたので、朝廷ではこの威赫に震へあがつて、清盛の思ふ通りの改革が行はれたのだと傳へられる。(五)この際清盛の弟頼盛が一しよに官を解かれ、知行を取上げられてゐるばかりでなく、一時は頼盛の邸へ討手が向ふといふ噂まで立つた(六)のを見ても、この時の陰謀が案外根深く企てられてゐたことが想像される。そしてこの前の陰謀事件の折にも、既に清盛が法皇を幽閉しようとしたのを重盛の諫めでやう〳〵思ひとまつたといふ風説もあつたくらゐだつたが、今度はとう〳〵それが事實となつて、法皇のお身にまで手をつけるやうになつたのである。

(一)『玉葉』。
(二)『愚管抄』巻五。
(三)『玉葉』。
(四)『百練抄』第八。
(五)『玉葉』。『百練抄』第八。
(六)『玉葉』。

第三節　以仁王の擧兵

平家に對する前後二回の陰謀は、清盛の巨腕にぶつかつて一擊の下に粉碎された。清盛が六十四年の生涯の中で、恐らくこの最後の四五年ほど、その偉大な人格を充分に發揮したことはなかつたであらう。清盛は十二歳で初めて從五位下左兵衛佐に叙任されてから、五十歳で從一位太政大臣に昇り、六十一歳で皇太子の外祖父となるまで、殆んど一度の蹉跌もなく、とん〳〵拍子で進んで來た。運命は、如何なる場合にも、彼れの保護者であつた。若し清盛が治承以前に死んでゐたら、彼れは一代の幸運兒として、その偉大なる力を本當に試みる機會がなくて終つたであらう。併しこの頃から運命は突然彼れに背を向けた。その時から彼れは勝つべからざる運命に向つて格闘する人となつた。

その事業

清盛は白河法皇の落胤だと噂されたくらゐで、荒々しい源氏の田舍武士とは違つて生れた時から宮廷の空氣に包まれてゐた。彼れの母は宮中の女官であつたといひ、父の忠盛は深く後宮に取入つて、白河法皇の寵を受け、その六波羅の館には宮中の女官らも出入してゐた。若い頃の清盛は眉目秀麗な貴公子で、十二歳の時に石清水の臨時祭に舞人を勤め、二十八歳の時にも同じく石清水の舞人を勤めた程であつた。彼れの世になつては、平氏ももう伊勢の田舍武士ではなく、父祖二代の間に累積した富力を擁して、貧乏な公卿らからは羨まれるほどの豪奢な生活をしてゐた。三十歳の清盛が田樂の仲間に入つて、祇園の社頭で大喧嘩をしたあの話を考へると、都の生活に飽までも心を浸した一個の快樂兒が思ひ浮べられるではないか。併し彼れが肥後守となり、次に安藝守となつて、壯快な海洋の空氣に觸れると共に、その心の底に眠つてゐた海國的な伊勢武士の血潮は、再び眼をさまして、この改革の時代にふさはしい豪壯放膽な政治家を生み出した。彼れが本當に政治の舞臺に上つた平治以後のいろ〳〵な施設をたどつて見ると、彼れの風貌はひとり時代を濶歩してゐる。舊時代の亡靈ともいふべき先例や故格が、まだ一切の生活の上に勢力を占めてゐた帝都の中心で、彼れは何事にも自己の印影を捺さなくては承知しなかつた。彼れの事業には殆んど先例がなかつた。海上の經營といひ、武家政治の建設といひ、叡山の操縱策といひ、福原の開設といひ、彼れは到る所にその獨創の天地を開いてゐる。通例藤原氏を摸ねたといはれる外戚政略にしても、彼れには彼れの流儀があつた。三百年以來藤原氏以外には一指を染めることも許されなかつた宮廷の慣例を破つて、自ら太政大臣となり、皇室の外戚となつて、皇室を自家のものとする新例を示したことのうちにも、彼れの改革者としての面目が認められる。

貴族的外裝の底に海賊の魂

清盛には賴朝に見るやうな緻密な、組織的なところはない代りに、彼れの事業は飽までも獨創的であり、建設的であつた。そこには賴朝に見るやうな刻苦の跡は認められなかつた。彼れは殆んど超人的な偉力を揮つて、不羈奔放に新しい道を開いて行つた。平家一門の子弟が全く宮廷の文化に捕へられて、琵琶を彈じ、笛を吹き、青海波を舞ひ、公卿の交りに浮身を窶して、武人の本能を失ひつゝある間に、一門の長者と讃へられて、剛愎な清盛にさへ氣をおかせた重盛ですら、あの燈籠大臣の逸話から考へて見ても、平安朝の貴族趣味に追隨する一個風流の貴公子に過ぎなかつた間に、彼れはひとりその貴族的な外裝の底に、粗大な猛烈な海賊の魂を宿してゐた。彼れはその趣味に於て既に時代を超越してゐた。宋人を傭つて舵取とし、唐船を用意して、瀬戸

内海を乗廻して見たり、嚴島の内侍に宋人の裝をさせて喜んでゐたばかりでなく、彼れは福原の都に居を占めて、世界の珍奇をその目前に集めようとさへ考へた。彼れの趣味は海にあつた。そして豪爽な海上の趣味に鼓舞された彼れの雄大な魂は、陰謀と虛飾とで固められた狹隘な京都の空氣に堪へられなかつたであらう。彼れは固より宮廷の趣味を解せない程の田舍者ではなかつた、併しそれがために束縛されるには、彼れの人格は餘りに偉大であつた。

時代の信仰と彼れ

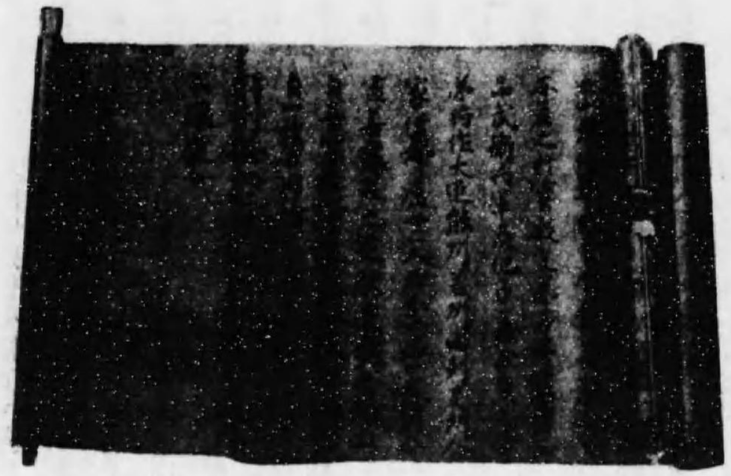
信仰に於てさへ彼れはその時代から解放されてゐた。高倉天皇の承安四年の春旱魃が續いて百姓が大に困窮した。この時叡山の澄憲僧都の祈禱の功德によつて三日三晩の大雨があつて、百姓は蘇生の思ひをしたので、澄憲は權少僧都から一躍して大僧都に進められた。この時清盛は冷笑して、「病人でもなほる時が來れば自然になほるやうに、五月雨の時節にかゝつて、春から降らなかつた雨が、自然に降つて來たのだ。それを澄憲の功名にするのは、滑稽な話だ」と言つた。彼れが時代の信仰を無視して、三井寺と南都の二大寺を燒拂つた大膽な行動を見ても、時代の迷信に捉はれない偉人の面影が窺はれるではないか。彼れが天台座主明雲に歸依したのも、信仰のためよりは寧ろ明雲によつて山門の衆徒を駕御するためであつたやうに思はれる。築島の工事に際して、人柱の迷信を捨て、經文を書いた石を沈めたといふのを見ても、彼れが迷信に捉はれる代りに、逆に時代の信仰を利用した機巧さが想像される。この解放された偉人の面影は、何よりも明かにその最後の言葉のうちに看取される。――「死といふことは誰にもあることだから驚きはしないが、唯一つ心にかゝるのは、流人頼朝の首を見ないことである。おれが死んだ後は、追善や供養を營むには及ばぬ、屹度頼朝の首を斬つて我が墓にかけよ、草葉のかげで嬉しいと思ふのは、そればかりだ」[一]と。晩年の彼れの感情を支配したものは猛烈な超人の我執であつた。彼れは佛法の迷信に對して何等の恐怖をもたなかつたやうに、同じく當代の人心を支配した皇室に對する宗教的な崇拜心からも超越してゐた。溫厚な重盛は、法皇に對する清盛の謀反心を見拔いて、平生から早く死にたいと言つてゐたくらゐで[二]、治承三年のクーデターは、清盛の思想からいへば驚くにも足らないことであつた。

重盛の死の損失

併し平家の一門に取つて取返しのつかない大打擊は、何といつても重盛の死であつた。これまで清盛と宮廷との間に醸される嶮惡な空氣を幾分なりとも緩和して、反平氏の感情を抑へて來たのは、全く調和的な重盛の力であつた。彼れは革新期の政治家としては、到底父のやうな雄圖と膽略とを具へた英傑の士ではなかつたが、その高潔

な品性と溫和な性情とによつて、火の樣な氣質をもつた火と狐のやうに陰險な宮廷貴族との間を融和する爲に、なくてならぬ人であつた。重盛の死によつて平氏はその最後の運命に一歩を轉じたのであつた。目に見えぬ運命との戰は、此時から刻々にこの老雄の力を枯らして行つた。

清盛が終に法皇を幽閉した時に、高倉天皇はやう〳〵二十歳であつたが、溫順な天皇はこの不幸な出來事に深く心を惱ました末、位を皇太子に讓つて清盛の心を慰めようと決心した。そしてその政變のあつた翌年の二月、天皇當時三歳の皇太子言仁親王を位に上せて、讓位後の第一の御幸には清盛の信仰する嚴島神社へ



平清盛納經

嚴島御幸

參詣することになつた。これまでの例からいふと讓位後の御幸は加茂か八幡ときまつてゐる。其先例を破つて遙〻嚴島御幸を仰せ出されたのは、それよつて一つには清盛の心を和らげ、又一つには嚴島の神に祈つて父法皇の難儀を解かうといふ憂しいお心からであつたらう。清盛は喜んで其支度にかゝつてゐたが、近畿の寺院ではその事を聞いて物議を起し、園城寺が主謀者となり、延曆寺や興福寺などにも通牒を發して、この度の御幸を遮り、法皇及び上皇を清盛の手から救ひ出さうといふ計畫をした。(三) この噂が傳はつたので、京都では一時大騒ぎをやつたが、それでも上皇は平家の武士の護衛の下に、三月十九日に京都を立つて嚴島に參詣し、四月九日を以て無事に還幸になつた。

この御幸の間に、京都では第三の陰謀が祕密に計畫されてゐた。この度の主謀者は源氏の長老でありながら、平治以來清盛と親密な關係を結んで來た源頼政であつた。頼政はその子仲綱、兼綱らと共に、後白河法皇の第二の皇子以仁王を奉じて、平家を倒さうといふ陰謀を企て、近畿の寺々を始め、諸國の源氏に令旨を下して、一時に起つて、平家を討伐しようといふ計畫を立てた。この令旨の下つたのは、丁度高倉上皇の還幸の日で、爲義の末子新宮ノ十郎義盛がその傳達の役目を引受け、山伏の姿になつて京都を出發したが、紀伊の那智新宮で、早くも平家方の耳に入つて、すぐに福原に

報告された。そこで清盛は五月十日に兵を率ゐて入京し、先づ十四日には法皇を鳥羽殿から八條烏丸の御所へ迎へて、嚴重に護衛させ、翌日以仁王の名を源以光と改めて土佐の國へ流すことに決定し、その夜檢非違使を王の御所に向はせたが、王はもう何處へか姿を隱した後であつた。[四] 間もなく王は園城寺へ入つたといふ消息が明になつた。そして園城寺の衆徒は、叡山、南都の寺々へも通牒を發して、平家に反抗するといふ情報が傳はつた。朝廷からはすぐに叡山と園城寺に命じて、衆徒を諭させて、穩便に以仁王を差出させようとした。併し叡山には明雲といふものがあり、平生から清盛の手が廻つてゐるので、平家に對しては寧ろ好意を有つてゐる方であつたが、それでも一部の不平分子は、園城寺の勸誘に應じたくらゐで、平生から平家に反感を抱いてゐる園城寺の方は、無論朝廷の命令にも從はなかつた。そこで平家では愈廿三日に兵を出して園城寺を攻めるといふ手筈になつて、廿一日にそれ〴〵部署を定めた。

すると廿三日になつて、賴政は一族郎等を引連れて園城寺へ入つた。この時まで平家方では賴政がこの陰謀の首謀者であることは、少しも氣がつかずにゐた。その上討手の大將のうちには賴政をも加へてあつた。それほどこの陰謀は秘密のうちに運ばれてゐたのである。賴政は平治の亂に清盛に身方となつて以來、父子相繼いで大內守護として忠勤を勵み、平家の下風について別に不平な樣子もなく、二十年の月日を無事に送つて來た。その間彼れは歌人としても相當に名を知られてゐたが、位は正四位下で、公卿の列に加はることが出來なかつたのを、清盛が深く同情して、治承二年に賴政が大病にかゝつた時、朝廷へ取りなして從三位に昇せてやつた。[五] そんな事情もありそれにこの時はもう七十七歲の頹齡にもなつてゐるので、清盛もまさか賴政にこんな野心があらうとは、夢にも思はなかつたらう。併し賴政の心のうちに入つたら、一期の思出に、埋もれた一族を翕合して、一度は死花を咲かせて見たいといふ考が、平氏の榮華を見るにつけて、その念頭に浮ばずにはゐなかつたらう。そして再度の陰謀に對する清盛の彈壓と皇室に對する不遜な態度によつて、平家の運命が世人の咀ひの的になつて來た樣子が、ぼつ〳〵と耳に入るにつけても、この老歌人の枯れたやうな心にも、天下の風雲のやう〳〵動いて來たことが感じられたであらう。一族の若武者が時こそ來れと躍躍して父の考を翼贊したことはいふまでもない。併し前後二回の陰謀によつて、法皇の近臣や公卿らの到底賴みにならないことを見て取つて賴政は、武士の力によつて堂々と平家に取つて代らうと決心した。同時に天皇を挾んでゐる平氏に對抗するためには、皇族の一人を奉じて唱首とする必要のあることをも考へた。さう思つ

て皇族の間をずつと見渡した時、賴政の目に映つたのは法皇のみ子でありながら、いい後楯(しろだて)をもたないために、今年三十になるまでも親王の宣下もなく、三條高倉の宮に屏居してゐられる以仁王の淋しい姿であつた。賴政は先づ人相見(にんさうみ)として評判のある少納言宗綱を王の御所へやつて、「皇位に卽くべき相が現れてゐる」と告げさせて、それとなく王の心を動かした後、大義を說いて擧兵のことを勸めたのであつた。

第一の違算

こんな風に擧兵の計畫は、老練な賴政の熟慮の下に、極めて祕密に運ばれたのであつたが、王の令旨がまだ諸國の源氏に達しない先に事が洩れたのは、第一の違算であつた。かうなつては暫く近畿の寺院をたのんで、身方の兵の集まるまで持ちこたへる外はない。

平氏の對策

賴政は先づ王を園城寺へ落しておいて、悠々と一族をまとめてその後を追つた。平家方では、賴政が園城寺へ入つたと聞いで、俄かに天皇を八條坊門ノ邸へ迎へて嚴重に護衞し、一時討手の出發を見合せ、叡山と南都へ手を廻して、園城寺を孤立させようといふ策戰を取つた。

平等院の戰

園城寺では廿二日に賴政の兵が加はつたので、愈氣勢をあげて、その夜のうちに六波羅へ夜討をしかけようとしたが、途中で夜が明けたので空しく引還(六)した。翌日は山科にある法皇の離宮を燒拂つて、討手を待受ける準備をした。すると廿四日になつて、平家方の策戰が成功して、叡山の衆徒は殘らず軟化してしまひ、却つて園城寺に攻め寄せるといふ情報が傳はつて、園城寺の中でも軟派が勢を得るやうになつた。併し南都の方は幸に硬派が勝を制して、攝政基通から送つた使者を追返し、僧兵を出して王を南都へ迎へようとした。賴政はこの形勢を見て園城寺では守りきれないと思つたので廿五日の夜半に以仁王を奉じ、僅かの手勢を引連れて、南都へ出發した。六波羅ではこの情報に接するや否や、重衡、維盛の二將が三百餘騎を率ゐて追擊を加へ、廿六日宇治の平等院の前で、宇治川を挾んで戰つたが、賴政方は苦戰に陷つて、賴政父子を初め一族郎等枕を竝べて戰死し、以仁王は南都へ落ちる途中で流矢に中つて死(七)んだ。

戰後の處方

清盛は廿六日の夕方福原から入京し、翌日は上皇の御所で戰後の處分に關する會議が開かれた。園城寺に對しては、此度の叛亂の主謀者を尋ねて、嚴罰に處するといふことに評議一決したが、興福寺の處分に就いては、當時まだ以仁王は興福寺の僧兵に迎へられて、無事に南都へ入つたといふ說があつたので、平家方では兵を差向けて興福寺に懲罰を加へよと主張し、一部の公卿もそれに同意したが、右大臣兼實、左大臣經宗がそれに反對したので、南都追討の議は一旦見合せとなり、官軍を差向けるといふことになつた。(八)

清盛と四圍の形勢

かうして清盛は、第三の陰謀をも手早く鎭壓したけれども、この時になつては、如何に强情な清盛も、反平氏の感情が殆んど天下に充ちてゐることを認めない譯にはゆかなかつた。彼れは法皇を敵とし法皇の近臣を敵とし、藤原氏の公卿を敵とし、皇族を敵とし、源氏の武士を敵としたばかりでなく、更に近畿の諸寺院の中に恐ろしい敵を發見したのである。それはたゞに園城寺と興福寺ばかりでなく、これまで座主明雲を通じて自由に操縱して來た叡山と雖も、中々安心はならないといふことゞが、今度の事件で證明された。彼等の武力は烏合の衆で左程恐るべきものでないかも知れないが、併し彼等には如何なる英雄豪傑と雖も、手を觸れることの出來ない神佛の威力がついてゐる。この危險極まる勢力の中に油斷のならない皇室と公卿とを放り出して置くといふことは、如何に考へても安全な處置ではない。清盛はこれまでにもその危險を知らないではなかつたらう、併し最も痛切にそれを感じたのは、この度の事件に就いてであつた。福原遷都の大英斷は、かういふ事情の下に嘯嗟の間に行はれたのである。

平清盛花押
（年二永壽）（年元和養）

都遷り

諸源の蜂起と遷都の苦情

清盛は五月三十日にこの度の事件に關する論功行賞をすますと、俄かに天皇を始め法皇、上皇の福原遷幸のことを發表し、六月二日にはもう攝政基通以下の公卿をも引連れて京都を出發した。併しいかにも突然の思ひ立ちであつたから、その翌日福原へ着いても、さういふ多人數を容れる宿舍の用意がなく、天皇は假に賴盛の邸へ奉じ、上皇と法皇とは、清盛の別莊と敎盛の邸へお入れ申したが、(九) 多くの朝臣のうちには野宿をしたものあつた。そんなことから公卿らは早くも遷都の悲哀を感じて、島流しにでもあつたやうな心持がしてゐた。それでも清盛は、新都の設計を進めて、ともかくも十一月十一日には、皇居が竣功して天皇は新內裏へお遷りになつた。併し福原は地域が狹隘で、到底京都のやうな都制を布くことは出來なかつたばかりでなく、第一經費の點からいつても、木式の帝都を造るには莫大な費用がいることが分つて來たので、取敢へず離宮として皇居だけを造營することにしたのである。

この頃には以仁王の令旨を受けて、東國に蜂起した源氏の勢が、だん〳〵と盛んになゝ、賴朝征伐に差向けて置いた維盛は、一戰にも及ばずして、富士川から逃げ歸つた。(一〇) 續いて尾張でも、近江でも源氏が兵を起して、園城寺と氣脉を通じて京都へ迫るといふ勢力になつた。又京都は遷都以來、平家はいよ〳〵不人望になつて、四百年の

帝都を棄て、荒廢にまかせようとする清盛の暴舉を咀ふ聲が、到るところで聞かれると共に、これまで皇室や貴族の歸依によつて繁榮を續けて來た寺院が、遷都によつて見る〳〵衰微して行くので叡山からは事情を訴へて、度々還都の請願を出し、後には若し裁可のない場合には、山城、近江の兩國を押領するとまでいつて(一二)脅迫して來た。その上高倉上皇は遷都の前後から日頃は病氣が重つて、日增しに衰へが見えて來るので、せめてはもう一度命のあるうちに住みなれた都へ還りたいといふ御意がしきりであつた。かういふ内外の事情に制せられた上に、自分でも内心では、民衆の不平の意外に烈しいことを見て取つたので、清盛は斷然として公卿らの希望に從ひ、皇居が出來上つてからまだ半月とは經たぬ十一月廿三日、俄に遷都の中止を宣言し、天皇、上皇、法皇を奉じて京都へ還つて來た。

都還り

かうして清盛の大英斷を以て行はれた福原遷都も、とう〳〵失敗に終つた。曾ては事々に運命の笑顔を以て迎へられた彼れの英斷が、今では事々に自己の運命を縮めるやうになつて行つた。彼れは確かに非凡な直覺力を具へた政治家であつたが、併し人心の機微を察して、うまく誘導して行くことには不得意であつた。それには彼れの性質はあまりに性急であり、あまりに猛烈であつた。この性急と猛烈とが、晩年になると共に愈甚しくなつて、殆んど輿論を顧みる餘裕がなかつた。それがために、彼れは皇室の敵となり、貴族の敵となり、天下の人民の怨みを一身に集めるやうになつた。

猛烈なる一撃

彼れが京都へ還つて來た時には、事實上京都は平氏の敵によつて包圍された形になつてゐた。京都の人心は遷都の中止によつて一時緩和されて、懦弱な公卿や市民は譯もなく喜んだけれども、清盛に取つては、遷都後の形勢は遷都以前よりも一層行き詰つてゐた。彼れが遷都を斷行した理由は、依然として存在するばかりか、更にその背後に東國の源氏の勢力まで加はつて來た。彼れは何れの道によつてか、活路を開かなくてはならない境遇に臨んでゐた。清盛の最後の大英斷はどうしても帝都を脅かす危險な勢力の上に加へられなくてはならなかつた。彼れは京都へ還るや否や、平知盛を主將として東國の源氏を討たせると共に、一方では平清房をやつて園城寺を燒拂ひ、續いて重衡を南都へ向はせて興福、東大二寺を燒いて、南都、北嶺の僧徒を屏息させ、帝都の貴族らをして、魔王のやうに怖れさせた。

人心日に離る

清盛はこの最後の英斷によつて、古來如何なる政治家も手を觸れることを難かつた無形の敵に向つて猛烈なる一撃を加へた。彼れは法然上人が精神界に於て行つた事業を物質界に於て行つたものであつた。併し他の場合と同じやうに、この最後の英斷も矢

張自己の運命に對する刃となつた。この時から彼れは王法の敵たると同時に佛法の敵として、愈〻益〻天下の同情を失ふやうになつて行つた。

(一)『平家物語』
(二)『愚管抄』卷五。
(三)『玉葉』。
(四)『玉葉』『山槐記』。
(五)『玉葉』。
(六)『愚管抄』卷五。
(七)以仁王の逝去に就いては、當時樣々の風説が傳はつて、永い間世間の疑問になつて居た。宮は宇治を脱走して阪東へ落延びたといふのが專らの風説で、或は頼朝をたよつて駿河に居られるといひ、或は伊豆、或は甲斐、或は相模と、其の場所は區々だが、兎に角頼朝の保護を受けて生存して居られるといふとが、此の後久しく唱へられて居た。(『玉葉』治承四年九月廿三日――養和元年十月二十七日)これは多分頼朝が政略上、宮の逝去を祕密にして、現に自分の手で輔佐して居るやうに言觸らしたものであらうといふ星野博士の考證が要を盡して居る。(『鎌倉文明史論』參照)
(八)(九)『玉葉』。
(一〇)『愚管抄』卷五。
(一一)『玉葉』

伊豆の一隅

伊東氏と北條氏

北條氏と源氏

第七章　源頼朝の出現

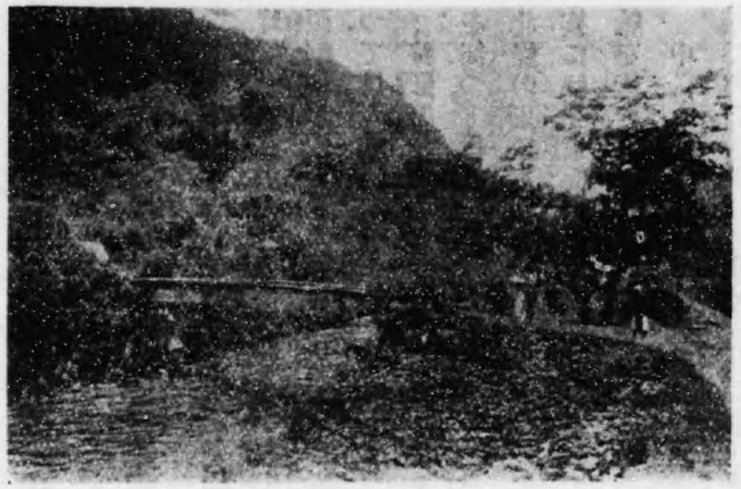
第一節　東國の風雲

平家一門の榮華が、もう殆んど極點に達して、都の人心が、そろ〳〵動搖を始めた時、東國武士の耳目は、期せずして伊豆の一隅へ引寄せられた。其處には前〻兵衛〻佐源頼朝が、平治の亂に、平家の手に囚はれてから、もう二十年近くも流人の生活を送つて居る。

狩野川が南から發つて、山々谷々の水を吸込みながら、長蛇のやうに、伊豆の平野を匂つて行く間に、大小樣々の洲島が、此處彼處に形造られる。その洲島の一つで、北條の東に當る蛭ヶ島へ、頼朝の配流されたのは十四歳の春であつた。當時伊豆の豪族には、東海岸に伊東氏が雄視し、狩野川の平野には、北條氏が蟠踞して、中央の山脉を境として、東西に相對峙してゐた。

中にも北條氏は、平貞盛を祖先として、伊勢平氏と同じ系統に屬して居る立派な家柄であると共に、貞盛三代の孫上野介平直方が、その女を源頼義に嫁して以來、源氏

一　頼朝と時政



伊豆伊東稚兒ヶ淵

とは切つても切れない關係が出來た。(一)頼朝は或時は山脈を越えて、伊東へ行つて、伊東入道祐親にたより、又或時は北條へ來て、北條時政の客となつた。

時政は直方から五代の孫で、當時は伊豆の在廳として、羽振を利かせて居た。(二)傳說によると、頼朝は伊東に居た時分に、祐親の女に通じて、一子を生ませたが、祐親は平家への聞えを憚つて、幼兒を淵へ沈め、頼朝にも迫害を加へようとしたが祐親の子祐清の保護によつて危難を脫し、北條へ來て、爰でまた時政の長女政子と通じた。時政は丁度三年の大番を終へて、京都から歸國する途中で、この消息を聞き、心中では私かに喜んだが、困つた事

には、在京中に、伊豆の目代山木ノ判官兼隆を政子の聟にする約束を定めて、同道して歸つて來たやうな次第で、先づこの始末を何とかつけなければならない。兼隆はもとは伊豆の流人であつたが、北條氏と同じく貞盛の流れを汲んだ平家一流の家柄なので一門のよしみで、伊豆の目代に擧げられ、今では兼隆に睨まれても面白くないといふが、時政の意中であつた。老獪な時政はそ知らぬ顏をして、兼隆と打連れて伊豆の國府(三島)へ着くと、自分は府廳に留つたまゝ、北條へ使をやつて、政子を山木の館へ送らせてやる、その夜政子は山木の館を拔出して、伊豆山へ逃げこんでしまつた。當時伊豆山權現は東伊豆の靈場として僧侶の數も多く、僧兵の武威が伊豆全國に振つて居たので、さすがの山木も、政子が伊豆山へ逃げ込んだと聞いては、うつかり手を出すことも出來なかつた。頼朝と北條氏の間には、かうして固い羈が結ばれたが、一方には伊東と山木と二個の强敵を作つたのであつた。

併し伊豆、相模は、頼義が相摸守となつて以來、代々源氏の勢力範圍であつた。安達藤九郎盛長、工藤介茂光、土肥次郎實平、岡崎四郎義實、天野藤内遠景、宇佐美三郎助茂、加藤次景廉、小中太光家などいふ兩國の住人は、累世の恩義を忘れずに、始終頼朝の御所に伺候して、奉公を勤めたし、又その頃澁谷莊司重國をたよつて相模に

足を留めて居た近江源氏の佐々木源三秀義は、その四子定綱、經高、盛綱、高綱を遣して、代る〳〵頼朝の左右に仕へさせた。(三)又頼朝の乳母の夫比企ノ掃部允は、武藏國比企郡から、廿年間絶えず扶持米を送り、又その三人の女の聟安達盛長、河越重頼、伊東祐清をして陰に陽に頼朝を庇護させた。

東國武人の傳統的感情

其他源氏譜代の恩顧を受けた關八州の豪族には、三浦半島を根據とする三浦、和田の一黨を初とし、武藏には、江戸、河越、畠山、秩父の諸族、及び丹、兒玉、横山、猪股等の諸黨、下總には、千葉、葛西、下河邊の諸族、上總から安房へかけては、上總介、安西、金餘、丸の諸族、下野には、小山、宇都宮、上野には、新田、大胡、里見、山名の諸族があつて、源氏の盛時は、また彼等の記憶から薄れては居ない。是等の豪族の中には源氏もあり、平氏もあるが、久しく東國に土着した是等の平氏は、今西國に榮えて居る伊勢平氏の一族とは、遠い祖先が同じだといふ以外には、永い間何の交渉もなく、從つて互に同情も薄く、頼信、頼義以來東國に扶植した源氏の勢力の下にその家人となつて、主從の契を重ねた者が多かつた。この傳統的の感情は、源氏といはず、平氏といはず、東國の或人をして、自然に源家に對して、本能的の親みを持たせずには措かなかつた。(四)

彼等と蛭ヶ島

彼等が時世に順應して、伊勢平氏の一門に膝を屈げ、その催促に應じて、京都の大番に上下する間にも、平家一門の榮華を見るにつけて、源氏の凋落を偲ぶ折もあつたらう。源氏に對する同情の底からは、又自己の運命に對する新しい望も湧いたらう。斯うした感情は、是等豪族の子弟をして、その大番の上り下りに、伊豆の一隅へ足を向けて、人知れず頼朝の配處に伺候させたに相違ない。(五)

關東附近の諸豪

更に關八州の周圍に目を向けると、信濃には平賀、岡田、大内、海野、望月、諏訪、仁科、木曾、樋口、今井以下の諸族が、四方に割據し、甲斐の盆地には、武田、小笠原、一條、逸見、安田、板垣、加々美などいふ所謂甲斐源氏の一族が蔓り、常陸には新羅三郎義光の正統と稱する佐竹氏が奥七郡を占領して、全國を威壓して居る。(六)それから越後の城氏や平泉の藤原氏になると、これはもう純然たる獨立國で、中央政府の威力は事實上こゝまでは及んでゐなかつた。是等の諸豪族の中には、或は源氏に心を寄せ、或は自立の志を抱いて、私に天下の風雲を覗つて居た者も多かつたらう。

平氏の東國政策

是等東國の諸豪に對する平氏の政略は、大體から言つて放任主義であつたらしい。勿論上總介忠清を八ヶ國の侍奉行に擧げて、東國の武士を操縱させ、山木ノ判官兼隆や橘遠茂を伊豆駿河の目代として、監視役を命じては置いたが、併し大體から言つて、

その配置は決して緻密ではなかつたらしい。平氏は、東國の事は差當り手を緩めて、その根據とする西國の經營に全力を注いで居たやうに見うけられる。

中心勢力の希求

かうして關東の諸國は、平家の全盛時代に於ても、矢張その以前と同じやう、多くの豪族の割據に打委されて居た。源氏の疲弊以來、是等の群雄の上に立つて、それを統一する勢力がなかつたので、彼らは所在に小戰鬪を續けて、弱肉强食の狀態を目のあたりに現出した。城氏、佐竹氏、藤原氏らの諸豪は暫く措いて、その他の小族の中には、かうした亂世の狀態に疲れ果てゝ、私かに中心の勢力の出現を望んだ者もあつたらう。かういふ場合に、先づ彼等の頭に浮ぶのは、古來武門の棟梁として、東國に威信を積み來つたと共に、生きた傳說として、また彼等の間に殘つて居る源氏世盛りの記憶であつたに相違ない。

賴朝の前半生

平家の運が傾きかけた時、賴朝が源氏の嫡流とし、東國武士の胸中で、斯ういふ中心勢力と擬せられたのも不思議はない。

賴朝は左馬頭源義朝の第三子で、母は尾張の熱田大宮司藤原季範の女であつたから、當時の習慣として、幼時は尾張で生長したであらうが、早くから京都へ出て、とりわけ義朝の寵愛を受け、義平、朝長といふ二人の異母兄があつたにも拘はらず、源氏の嫡子でなくては傳へられない髮切の太刀を授けられ、平治元年には十三歲で、後白河上皇の皇后上西門院の藏人に擧げられた。此の年の春賴朝は母に死別れ、その年の暮には、平治の亂が起つた。賴朝は從五位下右兵衞權佐の官に任ぜられて、父兄と共に戰場に出たが、戰敗れて、東國へ落ちて行く途中、一行は散り〳〵ばら〳〵になつて、義朝はその翌年の正月三日、尾張の野間內海の長田庄司忠致の手にかゝつて討たれ、義平、朝長の二兄も運拙くして前後してその世を去つた。足弱の賴朝は父や兄に後れて只一人路を踏迷ひながら、近江路から美濃へ出て、二月九日、關ヶ原へかゝると、丁度尾張から上つて來た平家の侍彌兵衞宗淸に行逢ひ、その手に捕まつて京都へ護送された。

池の禪尼の命乞ひ

かうして賴朝の一命は、敵の手に摑まれるところになつた。普通ならば賴朝はこの時死んでゐなければならない筈であつたが、神祕な運命の手は、此の時既に他日日本の歷史を轉廻する力を、この小さな生命の裡に育くんでゐた。傳說によると、淸盛も初めは賴朝を殺すつもりであつた。幼いとはいつても、彼れは源氏の嫡流である、わけても義朝が許して、重代の寶刀をも授け、位階なども兄を超えて昇進させてゐる所を見ると、どこかに見所のある人物に相違ない、さういふ者を助けて置くのは、宜しく

ないといふのが清盛の考であつたらしい。併し頼朝には何處かに人の心を魅く所があつたらう。宗清は、朝夕頼朝の樣子を見るにつけて、そのしほらしさに不憫が增して行つた。宗清の主頼盛の母は、池ノ禪尼といつて、清盛には繼母に當る人であつたが、宗清はこの尼の慈悲に縋つて、この可憐の捕虜を助けようと思ひついた。尼には家盛といつて、早く死んだ長男があつた。宗清は尼から頼朝の樣子を尋ねられたのを機會に、この家盛の幼顏に似た所があると言つて、先づ尼の情に訴へて、助命の事を申入れたので、尼は孫の重盛を呼んで、この事を父の清盛に傳へさせる。清盛も一旦は拒絶したが、池ノ尼の押して歎願するのを飽までも振切ることが出來なくなつて、漸く死刑を延期することになり、遂に流罪に定まつたといふのである。(一〇)後に平家沒落の際頼朝はこの時の恩誼を忘れずに、懇ろな使をやつて、頼盛と宗清を關東へ迎へさせたので、頼盛は池殿の亭に火をかけて、一旦は鳥羽の南、赤江河原まで落ちたが、そこから引返して、都へ上り、頼朝の好意を受けて鎌倉へ下り、平家一門の中で、只一人領地を安堵して、一生を無事に送つた。併し宗清は此の時頼盛に向つて、「戰場に向ふといふことなら、進んで先陣にも立ちませう。關東から昔の恩を思つて、迎へ取らうと言つて參つたからといつて、平家零落の今となつて、おめ〳〵と關東へ行くことが出來ませうか」と言つて、頼朝の好意を斥けて、平家一門の後を追つた。(一一)是等の事實から考へると、この傳說も大部分眞を得たものと言つてよい。とにかく、かうした事情から、頼朝は不思議に生命を助かつて、永曆元年三月十一日伊豆國へ流されたのである。(一二)

頼朝が伊豆に流された年から十四年を經つて、承安三年の夏、一個の怪僧が伊豆へ流されて來た。卽ち「高雄の上人」と呼ばれた高雄神護寺名僧文覺である。文覺は俗名を遠藤武者盛遠といひ、渡邊黨の武士遠藤左近將監持遠の子で、母は難產で死に、三歲の時には父にも別れ、それから全くの孤兒として他人の手で養育された。傳說に據ると、彼れは丹波の保津の庄の下司、春木ノ二郎入道道善といふ者に育てられたが、幼い頃から心がしぶとく、聲が高く親の敎訓をも聞かず、人の制止をも用ひず、村中の子供を集めて、野山を走り、田畑を荒らし、馬や牛を打ち、人の目に餘るやうな惡戲兒であつた。十三の年、一門の遠藤三郎瀧口遠光といふ者が、呼寄せて、元服させ、烏帽子子とし、盛遠と名をつけ、父の跡を繼いで、上西門院の北面の武士にした。盛遠は少年の頃から、時々狂氣のやうになる癖があつて、容貌は立派でないが、體格は大く、力が强く、武藝には勝れてゐた。いつも母が難產して死んだ事をいつては泣き、

三歳で別れた父を戀ひ慕つて悲んだ。文覺が出家したは、十八歳の時だと言はれてゐる。その發心の動機としては、彼れと袈裟御前との有名な戀物語が廣く傳へられて居る。尤もこの傳說に就いては、從來史家間にその事實が疑はれてゐるが、とにかく熱性なこの武人は、この青年時代の情熱に驅られ、何等かの事件によつて、當代に漲る厭世思想に動かされたものに相違ない。その時から彼れは武士の魂を麻の衣に裏んで、日本全國の靈場を遍歷り、人間の力に堪へ得る限りの苦行を積んだ。或時は、夏の盛りに、赤裸體で藪の中へ潛り込んで、蟲や、蚊や、その他の毒蟲に身を喰はせて、七日の間じつと辛抱した。又或時は、師走の中旬に、那智の瀧壺へ跳び込んで、三七日の荒行を續けた。西行のやうな詩人魂はなかつたが、當時の法師中に見られるやうな氣概と闘志とを十二分に具へてゐた。彼れも亦た平安朝末期の社會が生んだ憂國者の一人であつた。宗教家の假面を被つたその革命家のうちでも、最も熱烈な一人であつた。

かうして、十三年の間、山を分け、野に臥して、廻國の修行を積んだ後、彼れは高雄の神護寺へ來て、この寺の再興を志し、足に任せて、世人の奉加を勸進して歩いた。彼れが麻の衣に、黑袴を穿き、黑色の袈裟を掛け、大刀を腰に横へ、勸進帳を手に

握り、繩緒の足駄を踏み鳴らして、後白河法皇の御所法住寺殿へ立入つたのは、この時であつた。折から殿上では管絃の催ほしがあつて、法皇を始め、一同興に入つて居ると、一人の荒法師が案内もなく庭前へ立ちはだかつて、破鐘のやうな聲を出して、勸進帳を讀み上げた。程なく警固の武士が駈けつけて來て、荒れ狂ふ法師を門外へ引出したが、法師は引かれながらも、御所の方を睨んで、法皇を罵つた。文覺はこの罪で獄に繫がれたが、獄中でも法皇の惡口を言ひ續けた。そのうち大赦に遭つて、一旦は釋されたが、獄を出ると、その日から又京中を歩き廻り、群衆の中に立つて、世を呪ひ、法皇を罵つて已まなかつたので、再び捕縛されて、伊豆へ流されることになつたのである。

文覺は慢心が強く、折々狂氣のやうになつて、人を惡口する癖はあつたが、一方には、人を引着ける宗教家的の狂熱と人心の活機を攝む一種の直覺力を有つて居た。伊豆へ護送される船の中で、彼れは三十一日の斷食を續けて、平氣で居たばかりでなく、遠洲灘へかゝつて暴風に逢つた時、その機會を攝んで、船中の諸人を歸服させた。伊豆へ着くと、奈古谷の觀音堂の側に小さな庵室を建て、「今度奈古谷へ來た上人は、人相見の名人だ」と言ひ觸らさせたので、國中の男女は、觀音への參詣旁〻文覺に相を見

て貰ひに來た。この奈古谷寺といふのは、賴朝の流された蛭ヶ島から一里ばかりの所なので、この噂は直に賴朝の耳にも入つたに相違ない。賴朝は先づ文覺の弟子を招いて、それとなく上人の樣子を搜つた後、その弟子を介して會見を申込んだ。

賴朝との往來

英雄よく英雄を知る。この最初の會見は、少くとも兩雄の心に多少の默會を與へたに相違ない。この時賴朝は年廿七歳。文覺は三十幾歳でもあつたらうか。これからは互に往來して、親みを重ねるうちに、文覺は折を見ては、京都の樣子を語つて、それとなく謀叛を勸めた。或時は海岸から一つの髑髏を拾つて來て、白い布袋に裏み、父義朝の頭だと言つて、賴朝の心を動かさうとしたこともあつたといふ。併し飽までも用心深い賴朝は、容易に心の底を見せなかつた。文覺は賴朝の容易に動かないのを見て、最後に人知れず京へ上つて、院の近習、前ノ兵衛督光能卿をたのんで、後白河法皇の院宣を請ひうけて來て、賴朝の決心を固めさせたといふ傳說さへ傳はつて居る。(二四)

大事を勸む

以上の傳說の中には、果してどれ程の事實が含まれて居るか？　どこからどこまでを眞實と認めていゝか？　それらは實に斷言する限りでないが、少くとも、文覺と賴朝との間に淺からぬ關係の結ばれてゐたこと、又以仁王の擧兵以前に、文覺が賴朝に向つて擧兵を勸めてゐることだけは、他の史料に徵して事實を認められる。この時千葉介常胤の六男六郎大夫胤賴も文覺と心を合せて賴朝を起させようと骨を折つた事は『東鑑』(卷六、文治二年正月三日)の記事からも推察される。胤賴は早くから京都へ出て居たが、當時全盛の平家に膝を屈せず、文覺の父遠藤左近將監持遠の推擧で、上西門院に仕へて、從五位下に進んだ。この緣故から文覺上人とも師檀の關係を結んで、互に往來して居たが、上人が伊豆へ流された後は、力を協せて賴朝に大事を勸め、又擧兵の前には、京都から來て賴朝と密議を凝らし、直ぐに下總へ馳せ歸つて、父常胤を勸めて、最先に源氏に荷擔させた。

賴朝の伊豆生活

併し賴朝は流人の身である。東國には累代の家人が多いといひながら、今平家の世に在つて、草にも、木にも心を措かねばならぬ流人の身だといふことは、幼い時から苦勞を積んだ賴朝の胸に疊まれてゐたに相違ない。時が來たら源家再興の旗を飜へしたいといふ希望も、底の底には抱いて居たであらうと思はれる彼れの身としては、尙一層世間の疑ひを避ける必要があつたらう。彼れは源氏の公達として、立派な御所に住んで藤九郎盛長を初め伊豆相模の家人に侍づかれ、比企掃部允夫妻からは扶持を送られ、乳母の妹の子三善康信から、絕えず懇ろな音信を受け、伊東へ往つても、北條へ來ても、賓客として待遇されながら、その間には戀愛關係をも結んで、可也自由な生

活を送つてゐたやうだけれども、只平家の注目を避けようといふ點には、深い用意を拂つて居た有樣が窺れる。彼れは伊豆山の僧侶文陽房覺淵、專光坊良遲、箱根山の別當行實などを祈禱の師と賴んで、一家一門の菩提を弔ひ、自身も經文を讀んで日を送つてゐた。始めて文覺を訪ねた時にも、彼れは「上人の手で剃髮したい」と言つて賴んだと傳へられゐる。そして文覺から謀叛を勸められた時にも、「自分は池ノ尼にない命を助けられた身だから、父母の菩提、殊には池ノ尼御前の菩提を弔ふために、法華經を二部宛轉讀するのを日課にしてゐる位で、そのやうな惡事などは思ひも寄らない」と答へたといふのも、さもあるべきことといはねばならぬ。

(一)『陸奥話記』。『曾我物語』第三。
(二)『源平盛衰記』素卷。『曾我物語』第二。
(三)『東鑑』卷一。
(四)『源平盛衰記』禮卷。『東鑑』卷一。
(五)『東鑑』卷一。
(六)『源平盛衰記』和卷。
(七)『源平盛衰記』禰卷。
(八)『東鑑』卷一、治承四年八月廿六日及び九月九日の條參照。

(九)『愚管抄』卷五。
(一〇)『平治物語』。『愚管抄』卷五。
(一一)『東鑑』卷三。
(一二)『愚管抄』卷五。『東鑑』卷一。
(一三)『源平盛衰記』素卷、津卷。
(一四)『源平盛衰記』津卷。
(一五)『愚管抄』卷五。『東鑑』卷六。
(一六)『東鑑』卷一、治承四年六月廿七日、九月九日。
(一七)『東鑑』卷一、治承四年七月五日、八月十八日。

第二節　賴朝の擧兵

斯うしてゐるうちに、早くも二十年の春秋を送つて、賴朝が三十四歲を迎へた治承四年の春、京都では、源賴政が後白河法皇の皇子高倉ノ宮以仁王を奉じて兵を擧げる。その令旨を帶びて、東國に下つた八條院ノ藏人十郎行家(廷尉爲義の末子)は、四月廿七日に北條ノ館へ着いて令旨を傳へた。さうかうする間に、京都ではこの陰謀が露現して、以仁王は五月十五日に三井寺へ逃げて行く。賴政は後から兵を引いて宮方へ加はつたが、二十六日宇治の戰で賴政父子は枕を並べて討死し、以仁王も流矢に中つて逝去さ

れた。

そこで高倉宮の令旨を請けた諸國の源氏、竝に興福寺、園城寺の僧徒で、宮方についた者は、一人殘らず追討するといふ詮議があつた。從來頼朝は伊豆にゐても、三善康信から毎月三回の使者を受けて、京都の事情は、細大洩さず承知してゐたが、この度の事に就いては、康信も非常に心配して、特使を立てゝ、この沙汰を報告して來た。その使者が北條へ着いたのは六月十九日で、直に頼朝に對面して、京都の樣子を語り、「あなたは源氏の正統であらせられるから、とりわけて目を着けられてゐるらしい、一刻も早く奥州の方へお逃げになつたがよからうと存じます」といふ康信の口上を傳へた。頼朝は深く康信の志を感謝して、使を歸した後、急に評議を開いて、平家追討の謀事を廻らし、先づ安達藤九郎盛長と小中太光家を使者として、自筆の教書を授けて伊豆相模の家人に觸れさせることになる。盛長、光家は六月廿四日に北條を出立すると、その廿七日には、三浦次郎義澄と千葉六郎太夫胤頼が京都から來て、別室で頼朝と密議を凝らした。(一) 舉兵の計畫は、かうして着々と進んで行つた。

舉兵の計畫

手始めには山木ノ判官兼隆を討つて、軍の運試しをしよう、併し山木の館は中々要害の地で、前も後も山で圍まれて居るから、夜討には先づ其の地理を探つて置く必要があるといふので、不取敢、近頃京都から來た客人で、藤原邦道といふ通人を間諜に使つて山木の館へ入り込ませることにした。邦道は流行唄などが上手だつたので、兼隆の酒宴の相手になつて、四五日逗留して居る間に、すつかりその邊の地形を圖面に取つて、八月四日に北條へ歸つて來た。そこで頼朝は、時政を密室に招き、この圖面を中に置いて、細かに夜討の手順を定め、愈〻八月十七日に事を擧げるといふことになつた。

山木の襲撃

かう事が運んだので、頼朝は八月六日に工藤ノ介茂光、土肥ノ次郎實平、岡崎ノ四郎義實、宇佐美ノ三郎助茂、天野ノ藤内遠景、佐々木ノ三郎盛綱、加藤次景廉以下の勇士を、一人宛密室へ招いて、此度の企を打明けた上、「まだ誰れにも口外しない祕密だが、其許を見込んで相談する」と言つたので、誰も誰も、頼朝が自分一人を力と恃んでゐるやうに思つて、感奮して退出した。併し頼朝が奥底の祕密を洩らしたのは、只北條時政だけであつた。(二) すると、八月十一日に佐々木源三秀義が、相模の澁谷から、嫡男の太郎定綱を使者に立てて申入れるには、「近頃大庭三郎景親が京都から歸つて、會ひたいといつて來たので、一日その館を訪ねて、色々と京都の話を聽いた。その時の話に、景親が在京中、平家の侍上總介忠清と對面した席上で、忠清は一封の書面を披

豆相の諸豪を説く

いて景親に讀み聽かせた。其の書面は駿河國の住人長田入道から「北條四郎、比企掃部允等が、頼朝を奉じて叛謀を起さうといふ企がある」といふことを報告して來たものであつたが、之も讀んだ後、忠清が言ふには、「これは容易ならぬ事だ、高倉ノ宮の事件から、諸國の源氏の樣子を搜らうと言つてゐる最中に、斯ういふ報告が來たのだから、急いで相國禪閤（清盛）の御覽に入れなければならない」。景親はこの話を聞いて、「北條は頼朝の緣者になつて居るから何とも言へないが、掃部允はもう先年死んだ筈です」と答へて置いたが、それからはこの事が氣がかりでならない。今日君をお招きしたのも、實はこの事をお話したいと思つたからです。御子息らは定めし兵衞佐殿の身方に參られることと思ふが、よく〳〵御用心なさるがよいといふことであつたから、不取敢この趣を申上げます。」と言つて來た。頼朝は之を聞いて、深く秀義の志を喜ぶと共に、愈〻決心の臍を固めた。「此の事は四月以來思ひ立つて、愈〻近日に事を擧げる手筈になつて居る。丁度今使を出さうと思つてゐた所へ、折よく來て吳れて誠に好都合であつた。」と言つて、定綱は其のまゝ引留めて置いたが、十三日になると、定綱は支度をして來たいからと、暇を願つて、翌日未明に北條を出立した。

愈〻十六日になつた。身方はぽつ〳〵集まつて來たが、まだどうしても人數が足りない。力と恃んで居る土肥實平、岡崎義實も未だに到着しない。十六日には屹度來ると約束して歸つた佐々木兄弟も、日が暮れてもまだ見えない。頼朝は氣が氣でない。事に依ると、佐々木は變心したのではあるまいか？　といふ疑ひが起つた。澁谷ノ庄司重國は、平家の恩顧を受けた士である、それにたよつて來て、緣組までして居る佐々木父子に、うつかり祕密を洩らしたのは、飛んでもない不覺であつた。兎に角この分では明朝未明に事を擧げようとした計畫は多少變更しなくてはなるまい。併し十八日は、幼少の頃から觀音の像を祀つて、終日殺生を禁ずる習慣になつて居るから、この日には事を起したくない、といつて十九日になつたら、最早事が露顯するに相違ない。頼朝は煩悶の中にその夜を明した。翌日は三島神社の祭である。頼朝は朝のうちに藤九郎盛長を使に立てて、三島の社に參拜させたが、未ノ刻（午後）になつて、佐々木兄弟が着いた。太郎定綱は馬で來たが、三郎盛綱と四郎高綱は步いて來た。兄弟の姿を見ると、頼朝は涙を浮めて喜んだ。「お前達が遲れたために、今曉の合戰が出來なかつた」と殘念さうに言つた。兄弟は洪水のために遲くなつた次第を述べて、申譯をする。其處で頼朝は「人數の揃つた上は、今宵の中に山木へ攻寄せよう、今夜の合戰は自分の生涯の運試しである、合戰が始まつたら、館へ火を掛けてくれ、煙を覽て合戰の模樣

を知りたいから」と萬事の手筈を定めた後、佐々木盛綱、加藤次景廉、堀藤次親家の三人を宿直に留めて、その餘の人數を北條時政につけて山木へ向はせた。

成功の第一歩

その夜は空がよく霽れて、八月十七日の月が晝のやうに照り渡つて居た。時政は軍勢を二手に分けて、佐々木兄弟には、山木の背後へ廻つて、兼隆が後見をして居る堤權守信遠を攻めさせ、その他は正面から喊を造つて兼隆の館へ攻め寄せた。この日兼隆の家來は、大抵三島のお祭りに出掛けて、歸路には黃瀨川の宿で遊んでゐて歸つて來ない者が多かつたので、館の中は至つて手薄であつたが、よく防いで中々落ちない。

石橋山の進出

頼朝はもう煙が揚るか揚るかと思つて待つてゐたが、容易に揚らないので、急に景廉、盛綱、親家の三人を呼んで加勢に向はせ、景廉には手づから長刀を授けて、「これで兼隆の首を討つて來い」と言付けて遣つた。三人は馬にも乘らず、間道を走つて、山木へ駈付け、終に館へ斬入つて、兼隆の首を取り、館へ火を掛けて引上げて來た。

斯うした不安と動搖と熟慮と逡巡との間に、頼朝はその運命の第一歩を踏み出した。堤を破つた水は、往く所迄往かなければならぬ。勢ひは最早頼朝の逡巡を許さなかつた。彼れはその十八日を限りとして、年來の勤行を抛つた。(四) 十九日には東國の施政の手始めとして、兼隆の親戚で、蒲屋御厨の奉行知親の職を停止する下文を出して、人民に舉兵の事を觸れ知らせる。(五) これが頼朝の出した最初の文書であつた。此の間に伊豆、相模の家人は追々に集まつて來た。其處で頼朝は政子を伊豆山の僧房へ預けて、廿日には、三浦の一族の到着を待つ暇もなく、伊豆、相模の家人三百騎を從へて、相模の土肥へ出たが、廿二日には三浦の一黨が三浦を立つたといふ報知を聞いて、廿三日の未明に石橋山へ進んで陣を取る。旗の横上に以仁王の令旨を付け、中四郎惟重が旗を持つて陣頭に押立てた。

大庭景親

相模、武藏の住人は頼義以來源氏累代の家人である。この重代の恩誼を思ふ者は爭つて令旨の下に集るであらう。たゞ大庭三郎景親は、三代相傳の家人ではあるが、以前平家の恩を受けて、命を全うしたことがあつて、それ以來平家の信任を受けて、東國の監視を頼まれて居る緣故があるので、(六) これだけはどうしても弓を引くものと見なくてはならぬ。大庭は相模の大族といひ、當時平家の威勢を借りて一國に跋扈して居るから、中々油斷の出來ぬ敵ではあるが、これさへ駈け破つて、一たび武、相の平野へ旗を進めたら、關八州の家人は、風を望んで集まるに相違ない。頼朝の胸には斯ういふ希望が描かれてゐたであらう。彼れが石橋山に進出したのは一種の冒險であつた。三浦の黨は最初海上から土肥へ來る手筈だつたが、風のために船が出なかつたので、急

に摸樣替をして、陸路を取ることになつた。(七)すると又々風雨のために路々の河が止まつて、思ひの外に暇取り、酒勾の宿へ着いたのは、廿三日の黄昏方であつた。一方相模の家人らはどうかと見ると、源氏が滅びてからもう二十年、この間には或は平家の權勢に附き、或は其の官職を受け、その他樣々な情實關係が生じて、源氏重代の恩義も、大分薄らいで來たに相違ない。佐々木秀義は澁谷庄司重國にたよつて相模國に住み、重國の女を後妻として一子義清を生んだ。義清は又大庭景親の妹を妻としてゐるこんな關係から、秀義の諸子の中で、定綱、經高、盛綱、高綱の四人は、最先に源氏方に加はつたが、末子の義清だけは行かなかつた。重國も頼朝の敎書を受けたけれども、平家の恩顧を思つて、招きに應ぜず、孫の義清を連れて、大庭の身方についた。又安達盛長が伊豆、相模の家人に觸れて廻つた時、波多野右馬允義常、山内ノ瀧口三郎經俊などは、召に應じないばかりか、使者の前をも憚らず、暴言を吐いて嘲弄した。(九)

かういつた事情から、頼朝と特別の緣故を有つたものゝ外は、大抵は平家の聞えを憚つて、大庭景親の催促に應じて兵を出した。(一〇)勿論この中には、梶原平三景時や、飯田五郎家義のやうに、私かに頼朝に心を寄せてゐた者も少くはなかつたらう。又は大庭平太景義が、弟の景親と別れて、頼朝の身方になり、(一一)澁谷庄司重國が佐々木の兄弟

大庭方の優勢

椙山の陣

と別れて、景親の陣に馳せ加はり、後に自分の勳功を楯にして、佐々木兄弟を庇つた(一二)やうに二股掛けて、敵、身方に別れた者もあつたであらう。

こんな風で頼朝方には多少の違算もあつた。日は次第に西に傾いて、雨催ひの空は雲がいよ〳〵低くなつて來たが、待ちに待つた三浦の一族はまだ見えない。そのうちに大庭景親の率ゐる相模、武藏の精兵三千餘騎が喊を造つて石橋山へ押寄せ、谷を隔てて陣を取つた。後の山には伊東祐親が三百餘騎を從へて陣を取る。日暮方に酒勾の邊で煙の揚がるのが見えたので、三浦の兵が近づいたことは知つたが、今では敵に隔てられて、もう連絡の道がない。景親は三浦勢が加はらない先に攻落さうと軍議を決め、谷を越えて急に攻め掛かつて來た。日が暮れると、雨になつた。次第に大降になつて風さへ加はつて來る。兩軍の勇士は風雨の中を入亂れて戰つたが、源氏方は優勢の敵に壓迫されて、廿四日の曉方には、もう散々に土肥の方へ落ちて行つた。頼朝は椙山の中へ逃げ込んで、後の峯を指して登つて行く間に、景親の兵が近く追ひ迫つて來るのを、佐々木高綱、天野遠景、加藤次景廉らが踏留まつて防いだ。頼朝は土肥實平に護られて、終日椙山の内に潛んで居た。梶原景時が大庭景親を欺いて、頼朝を救つたのはこの時である。その夜箱根山の別當行實の迎ひを受けて、頼朝は窃と箱根山へ入つ

たが、翌日（廿五日）又箱根を出て、實平と一緒に土肥へ落ちた。

さて又三浦の一族は、廿三日の暮方に丸子河の岸へ着いたが、連日の雨で水が殖えて居て、越せないので、夜の明けるのを待つて、河を渡らうと思つて居ると、其の夜のうちに合戰が濟んで、源氏方が敗北したと聞いて、軍勢をまとめて引返して行く。由井ノ濱へ來ると、武藏國の住人畠山次郎重忠の勢に逢つて一戰を交へたが、蹴破つて三浦へ歸つた。畠山重忠は畠山庄司重能の子で、當時重能は、弟の小山田別當有重と共に、平家の大番を勤めて京都に上つて居たので、「平家の聞えを恐れる」一人として景親の催促に應じて、いはゞほんの義理一片に、こゝまで出陣したのであつた。それが端なく三浦の一黨の歸途に出逢つて、蹶け破られたので、一つにはこの遺恨を晴らすため、二つには平家の聞えをよくするために、俄かに同族の河越ノ太郎重頼、江戸ノ太郎重長を始め、金子、村山の諸黨の勇士數千騎を驅り催して、八月廿六日の早朝三浦の衣笠城へ攻寄せた。三浦の一族は寄手を引受けて終日防ぎ戰つたが、とう〳〵矢種を射盡して、其の夜人知れず城を捨て、栗濱の御崎から船に乘つて、三浦次郎義澄、同十郎義連、和田ノ太郎義盛、大多和ノ三郎義久を始め、一族を擧けて安房へ落ちた。この時一門の棟梁三浦大介義明は、八十餘歳の老齢であつたが、兒孫を勵まして、「俺

源頼朝

陰忍刺激の性格の所有者、理想實現に忠實な事業家としての源頼朝の畫像はこれ。其鋭い眼附きに見よ、高い額に見よ、結んだ口元に見よ、落ち着いた態度に見よ、自分を助けてくれた弟の義經を殺すに忍んだ彼れの强志薄情を表現してゐるのを覺えるであらう。さうした性格が革命家の持たねばならぬ資格としたら、革命家は情感に活きる日本民衆に喜ばれないであらう。

以前に喜びたいものである。

革命家として特に革命家の特性を備へた人物として、革命家の人格に現はれた特徴を強調する為めに、自分は敢て之を選んだ。其人の眼に見て、高い識見に見て、誠に近代に見て、善き者に属する人物である。

これは韓國の韓國の事業家として、忠實な事業家の誠實、真摯、熱烈

韓龍雲

はもう駄目だ、せめては老の命を佐殿に獻げよう。お前達はかまはず落ちのびて、主君の所在を尋ねなさい。此の城は俺が引受けたから、安心して行きなさい。」といつてひとり踏止まつて、城を枕に討死した。

頼朝が箱根山を出た時、北條時政は、一旦は別れて、甲州へ向つたが、急に思案を變へて途中から引返し、頼朝の後を慕つて又々土肥へ尋ねて來た。そのうちに北條四郎義時、岡崎ノ四郎義實、近藤七國平等も追々に尋ねて來る。是等の人々は廿七日に土肥の岩浦から船に乘つて、房州へ漕ぎ出したが、途中で三浦の一族に逢つて、頼朝の無事なことを話して安心させた。其の翌日土肥實平は頼朝を保護して、眞名鶴崎から船を出し、彌太郎遠平を伊豆山へやつて、政子に頼朝の消息を傳へさせた。頼朝の船は廿九日に安房國平北郡獵島に著いて、北條、三浦の人々に迎へられ、三浦義澄を案内者として上總に向つた。此處から小山ノ四郎朝政、下河邊ノ庄司行平、豐島權守清元、葛西ノ三郎清重に使者を立て、參會を促し、當國の住人安西ノ三郎景益、丸ノ五郎信俊を先導として安房一國を平定し、又其の間に和田義盛を使にして、上總介廣常に說かせ、藤九郎盛長を千葉介常胤の許へ送つて、何れも參會を催促させ、別に北條時政に敎書を授けて、甲州へ進發させた。上總權介廣常は三浦一家とは近親の關係があつた。

廣常の弟金田ノ小大夫頼次は、三浦大介義明の女を妻としてゐた關係から、衣笠城の合戰には、七十騎の兵を從へて共々に籠城した。かういふ關係から和田義盛は廣常に會つて懇談したが、廣常は確答をしない、「千葉介常胤の意向を確しめた上で參上しよう」といふことであつた。一方常胤は直ぐに盛長を客間に案内し、太郎胤正、六郎胤頼などを左右に置いて、頼朝の口上を聽取り、快くお請けをした。そこで頼朝は九月十三日に安房を立つて、三百餘騎の精兵を引いて上總へ出たが、廣常は口實を設けて出迎へないので、頼朝は廣常の二心のあるのを見拔いて、十七日には上總を立つて下總へ入る。この間に常胤は兵を出して、下總の目代を始め、平家の一類を攻め滅し、子息太郎胤正、相馬ノ次郎師常、武石ノ三郎胤成、大須賀ノ四郎胤信、國分ノ五郎胤道、東ノ六郎太夫胤頼及び嫡孫小太郎成胤以下從兵三百餘騎を率ゐて、頼朝を下總の國府に迎へた。其のうちに石橋山で別れた人々と追々も集まつて來たので、頼朝は軍を進めて十九日に隅田川まで來ると、上總權介廣常が二萬騎の大軍を率ゐて參會した。この時廣常はまだ頼朝の成功を危ぶむ心があつて、次第によつては、頼朝の首を討つて、平家に獻じようと思ひながら、表面には臣下の禮を取つて、頼朝の陣へ來たのである。併し疾うから廣常の二心を看破いてゐた頼朝は、故と其の遲參を責めて、面會を許さず、後陣に控へて、命令を待たせた。廣常の心はこの時から全く頼朝の前に屈伏した。(二五)

軍容俄に振ふ

廣常の兵を合せてから、頼朝の軍容は俄かに振つた。そこで、一方には土屋宗遠を甲州へやつて、「安房、上總、下總三國の軍士は悉く身方になつた、これから上野、下野武藏の精兵を集めて、駿河の國へ出て、平氏の下向を待つ手筈になつてゐるから、一日も早く北條殿を先達にして、黄瀨河へ出向かれたい」といふ命令を甲斐源氏に傳へると同時に、一方では江戸ノ太郎重長に使を送つて、武藏の諸族を勸誘させて置いて、十月二日、三萬騎の精兵を率ゐて、隅田川を渡つて、武藏國へ入る。豐島權守清光、葛西ノ三郎清重、安立右馬允遠元が最前に出迎へて案内役を勤める。畠山次郎重忠、河越太郎重頼、江戸ノ太郎重長も、勢を望んで身方に附いた。頼朝は豫て三浦の一族に向つて、言含めて置いたので、三浦の一族も前日の怨みを棄てゝ、畠山等の歸參を歡迎した。

鎌倉入り

かうして、安房に上陸してから一月餘りの中に、安房、上總、下總、武藏の豪族は悉く源氏の旗風に靡いたので、頼朝は武藏一國の事を、江戸ノ太郎重長に委託して、十月六日、武藏を發し、畠山次郎重忠を先陣とし、千葉介常胤を後陣として、相模の鎌倉へ入つた。鎌倉は三方に山を負ひ、一方は海に臨んで、天然の城廓ともいふべき要害

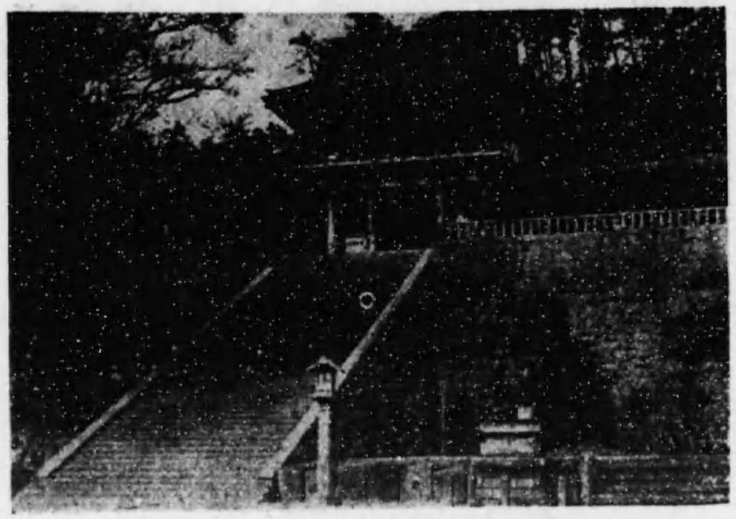
源氏と鎌倉

幕府の創始

の地であるばかりか、源氏に取つては緣故の深い土地であつた。頼朝六代の祖頼義は相模守となつて、當國に下り、平直方の女を娶つて、八幡太郎義家を生んだ。前九年の役に、頼義は、勅命を奉じて、安倍貞任を征伐した時、密かに石清水八幡に祈請を凝らし、芽出度く賊を平げて凱旋したので、康平六年秋八月、潛かに石清水を歡請して瑞籬を當國由比鄕に建てた。その後永保元年二月陸奥守義家は、この社に修復を加へて崇め祀つた。これが今の鶴ヶ岡八幡宮の起源である。それ以來鎌倉は、源氏累代の領地となり、頼朝の父義朝も、龜谷に館を構へて東國に雄視して居た。かういふ舊緣のある地であつたから、頼朝が安房へ入つた時、千葉介常胤は策を獻じて、「こゝは さしたる要害の地ではない、一日も早く鎌倉へ入り、祖先の遺跡に據つて、天下に號令するやうに」と勸めた。頼朝はこの獻策を用ひて、此度鎌倉に根據を定めることになつたのである。

頼朝は鎌倉へ入ると、先づ鶴ヶ岡の八幡宮を遙拜し、龜谷にある父義朝の遺跡を尋ねて、新邸を建てようとしたが、龜谷は地形も廣くないし、その上岡崎平四郎義實が義朝の後生を弔ふために、一宇の堂を建てて居ると聞いて、俄かに計畫を變へて、大庭景義を奉行として、大倉鄕に館の工事を始めさせた。この新館は十月九日に工を起して、程なく落成し、十二月十二日に移徙の式があつた。この時までは鎌倉は邊鄙な一漁村で、漁夫や海女の外は住む者もなかつたが、頼朝が幕府を開いてからは、多くの家人が思ひ〳〵に邸宅を構へたので、商賣や工匠の類がだん〳〵に集まつて來て、次第に街が出來、路が開けて、繁華な都會を現出した。

人心の收攬



鎌倉鶴ヶ岡八幡宮

頼朝は十月六日に鎌倉へ入つてから、十日の間軍馬を休めて居た。この間に頼朝は人心の收攬に心を用ひて、神社佛閣の修復や寄進に骨を折つた。十月十二日には鶴岳の八幡宮を由比の濱から小林の鄕の北山に遷して、專光坊良遲を別當職にし、同十六日には鶴岳の若宮で、國家

鎮護のために、長日の勤行を始め、相摸國桑原郷を御供料所とした。十六日には相摸ノ國府から、箱根山の別當行實の許に使者を立てゝ、箱根權現に當國早河の庄を寄進し、十八日には伊豆山の衆徒に文書を下して、軍兵の狼藉を禁止した。

富士河の對陣

さうかうする間に、小松少將維盛を總大將とした平家の大軍が、十三日に駿河國手越ノ驛に到着したと聞いて、十六日に鎌倉を出て、駿河國へ進發する。從ふ精兵二十萬騎、十八日足柄山を超えて、その夕刻には、黃瀨川の宿へ着いて陣を取る。この夕甲斐源氏は、北條時政を先導として、二萬騎の軍勢を率ゐて、賴朝の軍へ參加した。

甲斐源氏の參加

甲斐源氏は武田、一條を始めとして、最初から賴朝に心を寄せて、石橋山の合戰には、安田ノ三郎義定、工藤庄司景光等を送つて應援させたが、廿五日に富士山の北麓まで來ると、大庭景親の弟俣野ノ五郎景久が駿河國ノ目代橘遠茂と軍を合せて甲州へ攻込まうとして來がゝる所と行逢ひ、波志太山で遭遇戰を開いて、景久の軍を蹴散らしたが、石橋山の戰況を聞いてそのまゝ甲州へ引返した。その後武田太郎信義、一條次郎忠賴らは、駿河國へ出て賴朝の行方を搜らうとし、先づ後顧の憂ひを絕つために、信濃に入つて、諏訪、伊那の兩郡を服へ、十月十五日甲州へ歸つた。北條時政が甲州へ入つたのはこの時であつた。廿四日には土屋宗遠が石樂御厨へ着いて、賴朝の命令を傳へたので、武田信義、一條忠賴、安田義定、逸見光長以下の甲斐源氏は、北條時政と評議を凝らして、精兵二萬騎を率ゐて甲斐を發し、富士の裾を廻つて、十月十四日駿河國鉢田の邊へ出ると、偶然橘遠茂、長田入道の率ゐる遠江、駿河の軍勢に遭遇し、一戰に駈け破つて、長田入道の二子を斬り、遠茂を虜にした。(二〇) 甲州勢は十六日駿河國高橋の宿に着き、翌朝は使を維盛に送つて、「遠方御苦勞、何れ浮島ヶ原で見參しませう」と揶揄してやゐ。東軍の意氣はもう敵を呑んで居た。こゝから東に向つて、黃瀨川の陣へ參會したので、賴朝は愈〻廿四日を合戰の日と定めて軍を發し、廿日には駿河國賀島へ着いて、富士河を挾んで敵と對陣した。この夜武田信義は部下の兵を敵陣の後へ廻して、富士沼に下りて居る水禽を立たしたので、まだ戰はぬ先から怯氣のついて居た平家の軍勢は、その羽音に膽を潰して、「敵の夜討だ！」とばかりに騷ぎ立つた。平家の陣中では、參謀長の上總介忠淸が、早くから形勢の不利を悟つて退却を主張して居たが、爰に至つて維盛も終に忠淸の策を用ひて、その夜の中に陣を拂つて退軍した。(二一)

水鳥の羽音

翌朝賴朝は維盛が昨夜の中に退陣したことを聞いて、一旦は追擊の命を出さうとしたが、この時常胤、義澄、廣常等は賴朝を諫めて、「東國には常陸の佐竹秀義を始めと

行賞と處罰

して平家に心を寄せてゐる者が少くない、先づ東國を平定して、後顧の患ひを絶つた後に、西に向ふ方が宜い」といふ意見を述べたので、頼朝もその議を用ゐて、軍を還すこと、なり、その日は黄瀬川の宿へ引返し、不取敢甲斐源氏の功を賞して、安田三郎義定を遠江の守護とし、武田太郎信義を駿河の守護とした。源九郎義經が初めて頼朝に對面したのはこの時であつた。この間に大庭景親の黨類も追々に降參して來た。景親は一千騎を率ゐて平家の陣に加はらうとしたが、前には甲斐源氏が二萬餘騎を以て駿河國へ進出し、後には頼朝が二十萬の精兵を率ゐて足柄山を越えたと聞き、家人郎等は散々に逃亡したので、景親は狼狽して一旦は河村山へ逃げ込んだが廿三日頼朝の軍が相模の國府へ着いた時に、降參して來た。そこで頼朝はそれ〴〵に賞罰を行つて、義澄を三浦ノ介とし、千葉ノ介常胤、上總權介廣常、下河邊庄司行平以下或は本領々安堵し、或は新に領地を加へられた。景親は不取敢上總權介廣常に預け、長尾新五爲宗は岡崎四郎義實に、河村三郎義秀は大庭平太景義に、瀧口ノ三郎經俊は土肥次郎實平に預けて、鎌倉へ着いた上で、刑に處することになつた。又伊東入道祐親は伊豆國鯉名ノ泊から船に乘つて維盛の陣に加はらうとした所を、天野遠景に生虜られて、其婿三浦義澄に預けれらたが、其後一旦助命されて、自殺した。(二三)景親と義秀は程なく

佐竹征伐

鎌倉で斬られたが、爲宗は義實の命乞ひによつて、又經俊は頼朝の乳母であつた老母の哀訴によつて宥免された。その他の黨類も大抵は罪を宥され、刑に行はれた者は十分の一にも足らなかつた。

頼朝は一兵をも損ぜずに平家の大軍を破つて、十月廿五日に鎌倉へ凱旋したが、中一日置いて廿七日には全軍を率ゐて常陸に進發し、十一月四日を以て常陸の國府へ着いた。佐竹氏は奥七郡、竝に太田、糟田、酒出等を領して、新羅三郎義光の嫡流として當國に竝ぶ者もない豪族であつた。當時秀義の父隆義は、平家に從つて京都に滯在してゐたので、秀義は伯父の義政と共に、頼朝の催促に應じなかつたのである。頼朝は常陸へ入ると、先づ上總權介廣常が緣者になつてゐる關係を利用して、此の二人に歸參を勸めさせる。義政は騙されるとは知らず、城を出て、大矢橋の上で頼朝と會見する處を、廣常のために誅戮される。秀義は廣常の意中を看破して、一族郎等を率ゐて金砂ノ城に籠り、天然の要害を恃んで寄手を苦しめたが、廣常は秀義の叔父佐竹藏人を勸誘して身方に附け、藏人を案内者として城の背後の山へ上り、喊の聲を作つて攻寄せたので、城中の兵は狼狽して戰意を失ひ、四方八方に散亂した。秀義は城を棄て山中に入り、奥州の花園城へ落延びたので、頼朝は秀義の所領を沒收して、部下の勳

功を賞した後、八日に常陸を發して十七日に鎌倉へ還つた。

八月十七日に山木ノ判官兼隆を討つて兵を擧げてから、九十日の間に、關八州の平野と甲斐の盆地と信濃の二郡と駿河、遠江、伊豆の三國は、全く頼朝の勢力範圍となつた。只此の時、上野には新田大炊ノ助義重（入道上西）が、八幡太郎義家の嫡孫として窃かに自立ノ志を抱いて、頼朝の催促に應ぜず、上野國寺尾ノ城に據つてゐたし、下野には足利ノ太郎俊綱が、平家の恩義を思つて、兵を出して上野、下野の地を荒らして居(二四)た、俊綱は木曾冠者義仲の勢力に壓されて、其の勢を振ふことが出來ず、義重は此年十二月廿二日藤九郎盛長の取なしで、始めて鎌倉へ來て頼朝に對面し、其子山名義範及び孫里見義成と共に頼朝の指揮を仰ぐことになつた。

（一—四）『東鑑』卷一。

（五）『東鑑』卷一

下　蒲屋御厨等所。

可二早停二止史大夫知親奉行一事。

右至二于東國一者、諸國一同。庄公皆可レ爲二御沙汰一之旨。親王宣旨狀明鏡也者。住民等存二其旨一。可二安堵一也。仍所レ仰。故以下。

治承四年八月十九日

（六）『源平盛衰記』補卷。

（七）『源平盛衰記』那卷。

（八）『源平盛衰記』那卷。『東鑑』卷一。

（九）『東鑑』卷一『源平盛衰記』補卷。

（一〇）『源平盛衰記』那卷。

（一一）『東鑑』卷一。

（一二）『源平盛衰記』補卷。

（一三）『東鑑』卷一。

（一四）『源平盛衰記』那卷。

（一五）『東鑑』卷一。『源平盛衰記』羅卷。

（一六—二〇）『東鑑』卷一。

（二一）『玉葉』。

（二二）『東鑑』卷一。

（二三）『東鑑』卷二。

（二四）『東鑑』卷二。

第八章　落日の平家

第一節　都を落ちるまで

維盛が水鳥の羽音に驚いて京都へ逃げ歸つてから、平家の鼎は俄に輕くなつた。頼朝が暫く其の鋭鋒を收めて、東國の經營に心を注いで居る間に、四方の豪族は竝び起つて之に應じた。木曾の山中から起つた義仲は、此時もう信濃の大部を征服して上野に入つてゐた。近江には前ノ兵衛尉山本義經、同弟柏木ノ冠者義兼が、延曆、園城二寺の僧徒と結託して兵を擧げた。(一) 其の後頼朝の叔父藏人行家は、東國の兵數千騎を率ゐて三河に入り、養和元年一月には三河を經略して尾張へ入り、美濃、近江を徇へて京都へ入らうといふ勢を示した。紀州では熊野本宮の別當湛僧が那智、新宮の衆徒を率ゐて頻りに平氏の莊園を荒らし、河内には陸奥守義家の孫前武藏權守義基入道、同弟石河ノ判官代義資が、石川城に據つて遙かに頼朝に通じて居た。四國には伊豫國の住人河野通淸、其子四郎通信が、高縄城に據つて平氏に反抗して居た。備後國の住人額ノ入道西寂は一旦通淸を攻めて殺したが、通信は安藝の沼田へ逃れた後、再擧して西寂を海上に破り、生擒にして父の讐を報いたので、河野氏の勢はまた四國に振つた。九州へ行くと、肥後國の住人菊地隆直、豐後國ノ住人緒方三郎惟義らが、肥前の松浦黨と相應じて謀叛を起し、海上の往來を塞いだ。

頼朝擧兵の反響

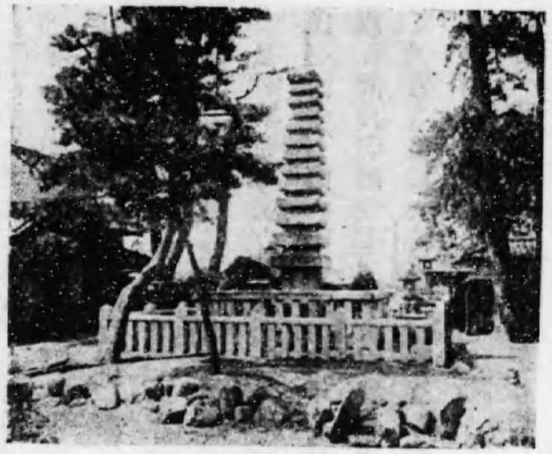
近畿鎭壓と對法皇策の一變

斯うした報道は、治承四年の末から翌養和元年の春へかけて、引續いて六波羅へ達したので、流石に强情我慢な淨海入道も、勢に迫られて、十一月の末には先づ福原の新都を棄て、俄かに舊都へ還り、十二月の初、左兵衛督平ノ知盛を大將として、先づ近江源氏を追討して、山本義經、柏木義兼を逃走させ、同月十日には淡路守淸房を遣つて園城寺を攻め、火を放つて全山を燒土となし、更に南都の大衆が兵を擧げて、平氏を討つと聞いて、其の二十六日藏人頭平重衡を大將として、南都に發向させ、同廿八日僧兵を破つて、東大、興福兩寺の堂塔一宇も餘さず燒拂つた。此の大英斷によつて、兎も角も一時近畿の騒擾を鎭壓した一方で、淸盛は飜然從來の態度を一變して、後白河法皇の心を和らげるやうに骨を折つた。淸盛は先づ法皇の幽閉を解き、上皇の御所へ迎へ、近臣の出入をも許し、美濃、讃岐の兩國を進めて法皇の分國としたが、間もなく高倉上皇の病勢が急變して、養和元年正月十四日にとうゞ〳〵崩御になると共に、淸盛は法皇の御歎きを慰めるためと號して嚴島の內侍の腹に出來た女の十八歳に

なるのを法皇の御所へ上げ、且つ法皇が前のやうに政治を聽かせられるやうにと奏請した。斯うして一方には武力を用ひ、一方には天皇と法皇とを挾んで、天下に臨まうといふのが、この老雄の腹算であつた。

源氏追討と清盛の死

此の間に藏人行家が數千騎の兵を以て尾張へ入つたといふ注進があつて、京都の人心は譯もなく動搖する。知盛は源氏追討の大將として、二月一日に東國へ出發し、近江、美濃の源氏の餘黨を伐つて、小河兵衞尉重清、蓑浦ノ冠者義明以下の首を斬り、行家を美濃國板倉に破つて、進んで尾張國墨俣川邊に陣を取る。此の時知盛は陣中で病に罹つて、二月十二日、左少將清經、左馬頭行盛を伴ひ、重清、義明等の首を携へて、墨俣川から引返した。今度は右大將宗盛が代つて追討の軍を總べることになり、賴朝追討の院宣を請うて關東へ出發しようとしたが、清盛は俄かに病を發して、閏二月四日に死んだので、宗盛は出征を中止し、更に三位



兵庫の清盛塚

藏人行家と平軍

中將重衡を賴朝追討の大將と定め、肥後守貞能を九州へ下すことになつた。

此の時藏人行家は千餘騎の軍を率ゐて尾張に陣して居たが、賴朝は義經の同母兄卿公義圓に一千騎を授けて、行家を援けさせたので、行家はまた勢を回復して、其子太郎光家、次郎行賴、尾張源氏の泉太郎重光等と、尾張、參河兩國の勇士を率ゐて墨俣河の東の河原に陣を取つた。平家の軍は頭中將重衡、左少將維盛、越前守通盛、薩摩守忠度、參河守知度、讃岐守左衞門ノ尉盛綱以下七千餘騎、三月十日に墨俣河に着いて西の河原に陣を取る。其の夜行家は平家の不意を襲ふつもりで、夜討の用意をしてゐたのを、平家の方に知られて、逆襲を受け、義圓、盛綱に討たれ、行賴は擒となり、泉太郎重光も亦た亂軍の中に命を失つた。行家は殘兵をまとめて、小熊、折戸、熱田など行く先々へ陣を取つて、且つ戰ひ、且つ走り、參河國へ入つて矢作川の岸へ陣を取つた。平家の軍は勝に乘つて、河の西岸まで攻下つた。此の時鎌倉では平氏の大軍が關東へ向つたと聞いて、和田義盛、岡部忠綱、狩野親光、宇佐美祐茂、佐々木義清を遠江へ下して、安田義定と共に濱松ノ庄橋本の要害を守つて平氏の襲來を待たせたが、平軍は行家の計略にかゝつて、東國の大軍が潮のやうに押寄せて來るといふ噂さを信じて俄かに京都へ引返してしまつた。行家は又京都へ攻め上らうと思つて、樣々に苦

木曾義仲の勃興

心したが、思ふやうに行かないので、一旦鎌倉へ歸つた。

斯うして平家が其の主力を近畿と東國とに注いで居た間に、思ひがけぬ勢力が北陸に現れて、北方から京都を脅かさうとする形勢を示して來た。それは木曾義仲であつた。

義仲の父は帶刀先生義賢といひ、源爲義の第二子であつたが、久壽二年八月武藏國大倉の館で、甥の鎌倉惡源太義平に殺された。其の時義仲はやつと三歳で、駒王丸と言つて居たが、乳母の夫中三權守兼遠に懷かれて、兼遠の故鄕へ逃げのび、信州木曾の山中で人となつた。成長するに從つて、武勇人に秀で、自然に武將の氣象が具はつて、何時かは平家を倒して、源氏の世にしたいと思つて居た。治承四年四月高倉の宮の令旨が木曾に到着し、程なく伊豆國では頼朝が兵を擧げたといふ風說を聞いたので、兼遠の二子樋口次郎兼光、今井四郎兼平を始め、國中の諸族を集めて兵を擧げた。時に笠原平五頼直といふ者が、平家の一類として義仲を襲はうとしたので、源氏の黨村山七郎義直、栗田寺ノ別當大法師範覺等が、信濃の市原で笠原勢と合戰を開いたが、戰は夜に入つて、義直方は箭種が盡き、やう〳〵敗色が見えた。此の時義仲は義直の頼みを聞いて大軍を引いて應援に赴いたので、頼直は威勢に怖れて、越後へ逃亡して、

義仲と平軍

城四郎長茂に依つた。これは頼朝がまだ安房に居た治承四年九月七日の事であつた。

頼朝が鎌倉へ入つたのは、其の年の十月六日であつたが、其の頃には義仲はもう信濃の大部分を平定して、十月十三日國境を越えて上野國に入り、父義賢の遺跡のある多胡郡に據つて足利俊綱の運動を牽制した。(三) それから翌養和元年年六月には信濃、上野の兵を率ゐて、城太郎資永、同弟四郎長茂と善光寺平で戰つて、其の大軍を擊破し、進んで越後に入つたので、越前、越中、加賀の三國は風を望んで義仲に服つた。

義仲がもう北陸道を經略して、北から京都に向つて來るといふ噂が傳はつたので、京都の人心は又もや動搖を始めた。朝廷では、養和元年八月十三日、藤原秀衡を陸奥守に任じて、頼朝を討たせ、城ノ資永を越前守に任じて、義仲を討たせようとした。秀衡は此の恩命を受けたばかりで、一向に動かなかつたが、資永は勅命を奉じて義仲を追討しようと用意してゐるうちに、九月三日卒中で死んでしまつた。宗盛は八月四日北陸追討の宣旨を申受けて、中宮亮通盛、同弟能登守敎經を大將とし、十六日に京都を出發させる。通盛は九月四日に越前國水津へ着いて、義仲の先陣根ノ井ノ太郎と會戰したが、通盛は義仲の勢の盛んなのを見て、急使を發して援兵を求め、退いて敦賀城を守つて居た。宗盛は九月廿八日、左馬頭行盛、薩摩守忠度を將として、兵數千騎

を送つて、通盛を救援させたけれども、此の時北陸道の諸國は義仲の兵威に靡いて居たので、平家の軍は到底義仲に敵することが出來ず、十一月に入つて、敦賀城を棄てて退軍し、通盛、行盛等は其の月の二十一日に京都へ歸つて來た。但馬守經正はひとり踏止まつて若狹國を守つて居た。

壽永元年の飢饉

其の年も暮れて養和二年となり、改元して壽永といつた。此前年から諸國が兵亂で苦められた上に作柄も一般に不作であつたため、此の年に入つて、東國、北國、西海の運上がはたととまり、京都では貴賤老幼といはず、餓死する者が道路へ充滿し、毎夜强盜や放火の絶え間がなかつた。此の時仁和寺に一人の法師があつて、死者の累々として葬る者もないのを哀れと思つて、路傍に倒れてゐる死者の首に阿字を書いて歩いたが、二月のうちに其の數が四萬二千三百餘人に上つたと傳へられてゐる。此の飢饉のために戰爭も自然と中止の姿になつたものと見え、一時は猛烈な勢で、北陸を靡かして來た義仲の運動も、此の年に入ると共に一頓挫を來たして、翌壽永二年の春までははかゞしく進行しなかつた。

不肖宗盛

斯ういふ際に平家はどんな事をしてゐたか？　宗盛は此の年九月大納言に成返り、十月三日内大臣となつて盛んな拜賀の式を行つたので、世人は此の天下多事の際に、さういふ悠長なことをしてゐる平家の態度を齒痒いと思つた。只こればかりでない、平家の財政は、從來の驕奢と連年の兵戰のために、殆んど破產に瀕して居た。諸國の人民が凶年と兵亂とに苦んで居るにも拘らず、世人の怨嗟を甘んじて、苛酷な兵粮米を賦課し、古來の例がないといはれる伊勢の神領にまで手を入れるやうなことをしたのは、全く財力の窮乏に苦んだ結果であつた。然かも一方には平貞能を九州へ下して兵粮米を促らせながら、一方では亡父の命令で燒拂つた東大、興福兩寺を再建するために、三十五ヶ國に課役を命じるといふやうな矛盾したことも平氣でやつてゐた。

頼朝と義仲

清盛といふ中心物を失つた後の平家は、斯ういふ風な無爲無策で、刻々に其の沒落を早めてゐたのである。

持重の頼朝

さうかうする中に、其の年も暮れて壽永二年となつて、源氏の運動がやゝ活氣づいて來た時に、爰に端なくも頼朝と義仲との間に、一つの葛藤が生じた。併し此の事件を述べる以前に、一應此の兩軍の形勢を述べて置く必要がある。

此の時義仲は三十歲、頼朝は三十七歲、義仲は信濃、越中、越後、能登、加賀、越前の六國及上野の一部を併せて、北から京都を脅かし、頼朝は遠江、駿河、伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野、甲斐及び信濃の一部を勢力範圍とし

て、東から京都に入らうといふ勢ひを示して居る。若し頼朝に功を急ぐ心があつたら、富士川の戰勝後、馬首を西に向けて、一舉に敵の根據を衝くことも出來たらう。併し思慮周密な彼れは、其の根據の堅まらぬ先に、遠く兵を動かすことの危險を知つてゐた。關八州の平野は源氏の旗風に靡いたとはいふものゝ、常陸の佐竹氏、下野の足利氏、上野の新田氏は、それ〴〵一方に割據して、頼朝の命令を奉じないばかりか、木曾義仲は信濃から南下して上野まで來て居るし、白河の關の彼方には、藤原の秀衡が所謂「十七萬騎の貴主」として、父祖三代の富を擁して、平泉に據つてゐる。うつかり根據を空にして西に向つたら、恐らくは腹背に敵を受けることになつたであらう。

志田義廣の亂

頼朝は其の根據を堅める手始めとして、先づ佐竹氏を征伐し、尋いで新田氏を降服させた。すると養和元年閏二月頼朝の伯父に當る志田ノ三郎先生義廣が、下野の豪族足利又太郎忠綱を語らひ、常陸、上野、下野の豪族を集めて、鎌倉を襲はうといふ陰謀を企て、月の廿日三萬餘騎の兵を率ゐて下野に進出した。當時下野には小山、足利二氏が勢力を振つて居た。此の二氏は共に藤原秀郷から出て、同族中でありながら、勢力爭ひから互に軋轢して居た。頼政が高倉宮を奉じて兵を擧げた時、小山氏の方へは最前に令旨が屆いて、足利氏は何となく閑却されたやうな姿になつたので、小山氏が宮方へ付くと、忠綱は平家の身方となつて兵を出し、宇治川の戰には先陣の功名を立て終に頼政を攻め破つた。尤もこれは忠綱の父俊綱が、以前領地の事から平家の恩を受けたことがあつて、其の義理に背けなかつたといふこともあつた。斯ういふ關係から頼朝が兵を起した時にも、足利氏は頼朝の招きを斥け、平氏の身方となつて、上野・下野の兩國を荒らして居たが、今又義廣と通謀して事を擧げ、此の序に小山氏をも亡ぼさうと謀つたのである。小山氏は本來頼朝とは深い關係があつた。小山政光の妻は以前頼朝の乳母だつたので、頼朝が隅田川畔に陣を取つた時には、其末子の七郎朝光を連れて逢ひに行つた。こんな關係から小山の一族は、頼朝には忠實な身方となつて、愈〻足利氏と反對の行動を取つて居た。此の時父の政光は京都へ大番に上つてゐた留守中で、極めて無勢な所であつたが、其處へ義廣から使者が來たので、小四郎朝政は老臣等と相談して、故ら同意のやうに見せかけ、計略を設けて義廣を地獄谷の嶮路へ誘き寄せ、不意に四方から起つて義廣の軍を打破つた。戰爭の間に朝政は義廣の矢に中つて創を受けたが、此の間には下河邊庄司行平、八田武者所知家、宇都宮信房以下下總、上野の同族が、兵を出して小山氏を助け、鎌倉からも朝政の弟五郎宗政、蒲冠者範頼が頼朝の命を受けて應援に來たので、義廣は敗北して、信濃へ逃げのびて行家と

頼朝追討の風説と武田信義

同様に義仲に身を寄せた。足利忠綱は百人力と呼ばれた程の大勇士であつたが、事の破れたことを知ると、上野の山中へ逃げ込んで、數日の間蟄伏した後、窃と山を出て、山陰道から九州へ落ちて行つた。(五) 其の後忠綱の父俊綱に討手を下して、その首を取つたので、(六) 下野も全く鎌倉の支配に歸することになつた。

義廣の亂が平定して間もない同年三月七日に、京都から三善康信の報告があつて、そのうちに「去月七日に後白河法皇の院中の御評議で、武田太郎信義に頼朝追討の命を下すことに定まつたといふ風説がある、同時に、諸國の源氏を悉く追討するといふやうな噂があるが、そんな事は決してない、朝廷で追討するのは、頼朝ばかりだと仰せ出されたといふ專らの噂だ」といふことがあつた。頼朝は急に信義を駿河から鎌倉へ召して、この噂の實否を糺した。信義は之に答へて、「追討使の事は夢にも存じない事です、縱令仰せを受けました所が、決してお受けをする筈はありません、私に二心のないことは、去年の戰の折の働きでもお分りにならうかと存じます」と再三陳謝した上、「子々孫々に至るまで、御子孫に對して決して弓を引くやうなことは致しません」といふ堅い起請文を書いて差出したので、頼朝はやう〳〵疑が晴れて、初めて信義に對面を許した。それでもまだ充分用心して、義澄、行平、定綱、盛綱などいふ勇士をずらりと竝べて、信義を引見した。

義仲の前進

斯ういふ周密な用意と冷靜な態度を以て、頼朝があらゆる機會を利用して、着々と其の地盤を固めてゐた一方に、義仲は信濃、上野二州の兵を率ゐて北に進み、城氏の大軍を撃破した勢ひに乘じて、一舉に北陸の大部を切り從へ、更に平家の追討軍を破つて越前に入り、養和元年の末には、長驅して京都を衝かうとする勢ひを示した。京都では今にも義仲の兵が攻め込んで來さうな騒ぎで、諸方の神社佛閣に勅使を立て、朝敵調伏の祈をさせ、伊勢の神宮にも奉幣使を立て、天慶の亂に甲冑を奉つた例に倣ひ、鐵の鎧を奉納して、源氏追討のことを祈つた。翌壽永元年にも平氏は尚ほ多少の軍を北陸に留め、又越後の城氏も兵を出して義仲の運動を牽制した。(七) 併し義仲の前進が一時阻止されたのは、これらの戰鬪よりも寧ろ凶年のためであつたらう。此の間に叡山からは、以仁王の王子を義仲の許へ送つて來たので、義仲はこの宮を奉じて京に入ることとなつた。

義仲が是等の天然と人間の障碍と戰つて、進軍の準備に從つてゐた間に、前に述べた頼朝との葛藤が起つたのである。傳説によると、此の爭ひの直接の原因は、頼朝に不平を抱いて鎌倉を去つた行家を、義仲が庇護したといふことと、義仲が行家と手を

武弁と政治家

握つて、頼朝に對抗しようといふ風評のあることにあつた。頼朝は此の報告に接するや否や、大軍を催して信濃に向つたが、義仲は爭を避けて、越後へ退いたので、頼朝は更に軍使を送つて義仲の罪を責め、卽刻行家を引渡すか、さもなくば嫡子清水冠者を人質として鎌倉へ送るか、二つに一つの返答を迫つた。此の時今井兼平、樋口兼光らの諸將は、頻りに頼朝との決戰を勸めたけれども、義仲は「平家追討の大事を閣いて、同族の間で啀み合ひをするのは、世間の聞えも耻かしい」といつて、先方の言ふがまゝに、其の時十一歳の清水冠者に、同年輩の近習宇野太郎行氏を差添へて鎌倉へ送つて和議を結んだ。

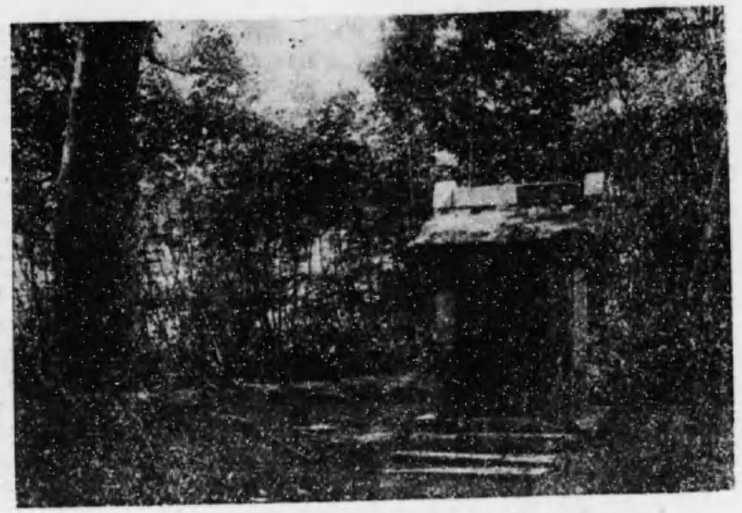
元來義仲は頼朝と同じく以仁王の令旨を奉じて兵を擧げたのであるが、此の時までは兩軍の間には何等の交渉もなく、それ〴〵單獨に行動して居た。それが此の時になつて、始めて行家の事から問題が起つて、兩軍の繫爭となつた。頼朝に取つては恐らく豫定の行動でもあつたらう。白河關の此方では、一草一木も鎌倉の旗風に靡かないものはなく、東國の源氏は悉く頼朝の指揮の下に統一された今となつて、義仲がひとり自由の行動を取つてゐるばかりか、現に自分の敵となつた義廣、行家を庇護してゐるといふことは、統制を重んずるこの政治家の到底忍び得ない所であつた。屈服か、

京都の形勢

滅亡か、義仲は必ず其の一を選ばなくてはならぬ！　隱忍な頼朝は斯ういふ機會の來るのをとうから待つてゐたに相違ない。而して今其の機會を掴へるや否や、疾風のやうに起つて義仲に挑戰したのである。傳說は、此の時今井兼平らがこの姑息の和議に反對して頼朝との一戰を主張したことを傳へて居る。併し平家追討以外には眼中に何物もなかつた程單純な此の武人は、大事の前の小事として、目を瞑つて、其の子を頼朝の手に渡したのである。これで義仲は兎に角安心して平家に向ふことが出來る。若い將軍の胸には、一日も早く京都へ進んで、平氏に代つて天下に號令したいといふ大望が、火のやうに燃えて居た。

此の間に京都では、高倉宮が東國に生存して居るといふ風說が眞實らしく傳へられて、「頼朝は愈〻大兵を率ゐて京都へ進發した、土洛も近い中であらう」といふやうな噂が幾度か立つた。又平家が西海へ落ちるといふやうな噂もある。(八)或は熊野、高野、吉野などの僧兵が大擧して攻込んで來るといひ、(九)或は天文博士から天象の變異を奏上したといひ、(一〇)斯う天變地異が重なつて來るといふのは平家の滅亡する前兆だと噂し合つた。平家の敗軍の報が傳はるたびに、京都の人心は愈〻動搖して、勢ひに附く輿論は早くも腑早麥ない平家を見限つて、却つて源氏を謳歌するやうになる。(一一)斯ういふ事には

敏感な宮廷の空氣が、此の動搖を感じない筈はない。『玉葉』に據ると、頼朝は此の頃密かに法皇に上書して、「私には謀叛の心は更になく、只々朝敵を伐たうとするばかりです、併し平家を滅ぼすには及ばぬといふ思召ならば、古のやうに源平相竝んでお召仕になり、關東は源氏の領分とし、西海は平氏に一任して東西の亂を鎭定せしめ、どちらが果して君命に忠實であるかをお試しになつたら宜しいでせう」と奏聞した。法皇は宗盛に此の上書を見せて、内々に意見を尋ねられると、宗盛は「然う出來れば誠に結構ではありますが、只父清盛が目を瞑る折の遺言に、平家の子孫が一人でも生き殘つて居る間は、決して頼朝と和してはならぬといふ堅い申付がありました、今更亡父の訓誡に背くことは出來ませんから、此の事だけは假令勅命でもお請けは致しかねます」と答へたといふ逸話を掲げて、此の事は人の知らない祕密だが、これは宗盛の近臣から聞いた實說だと言つて、尙ほ貞能が九州へ下つたのも定めて逃支度であらうと附加へてゐる。假に此の頼朝の上奏を事實でないとしても、少くともこの逸話が一部の廷臣の意向を反映してゐることは、この以前から頼朝の罪を宥さうといふ朝諸のあつたことなぞから推測される。(一二) 中にも大納言兼實が此の反平氏運動の主謀者の一人であたらうと思はれるとは、其の日記『玉葉』の記事や、この後の頼朝に對する態度



倶利伽羅古戰場

などから見て、疑ひを容れる餘地がない。

宗盛は斯ういふ四圍の事情に迫られて、一方には輿論の反對を和らげるために、東大、興福二寺の復興を命じ、或は罪滅ぼしのために、大神宮の臨時祭を執行するか、でなくば、阿育王の故事に倣つて八萬四千の寶塔を建てようか、などといふ奇拔な考案を出すと同時に、(一三) 一方には清盛の遺策に從つて、西海、北陸二道に兵粮米を課し、畿内、山陰、山陽、南海、西海、諸道の兵を募つて東國の源氏を一掃しようとした。壽永二年の初には是等の兵が京都へ集つたので、宗盛は權亮三位中將維盛、越前守通盛、左馬頭行盛、三河守知度、但馬守經正、淡路守清房、薩摩守忠度等を大將とし、總勢十餘

萬騎(『玉葉』には四萬餘騎)を率ゐて、四月十七日に京都を進發させる。先づ北陸に進んで、義仲を擊破つた上、關東へ攻入つて頼朝と雌雄を決しようといふのである。

此の時義仲は越後の國府に居たが、平氏の大軍が京都を發したと聞いて、信濃國の住人仁科太郎守弘、加賀の住人林六郎光明、倉光三郎成澄、近江ノ國住人甲賀入道成覺等を遣つて、越前國燧ケ城を堅めさせる。燧ケ城は北陸第一の堅城と聞えた上に、城兵は日野河の水を堰いて防いだので、平家の軍は空しく軍議に日を送つてゐたが、この時城中に籠つて居た越前國平泉寺の長吏齊明が俄かに變心して、敵に内通したために、四月二十七日に燧ケ城は陷落した。追討軍は齊明を案内者として、越前を徇へ、五月二日加賀國へ入つて、安宅の城を落し、林光明、富樫家經の居城を陷れて、加賀全國を恢復し、全軍を二手に分けて、一軍は越前三位通盛の下に越中前司盛俊、上總介忠清、飛驒守景家を附け、三萬餘騎を率ゐて志雄山を越えて越中へ向はせ、本軍は維盛自ら七萬餘騎を從へて、越中國礪波山に向つた。義仲は此の報を聞いて、越後の國府を發し、五萬餘騎(『玉葉』には五千餘騎)を率ゐて越中に入つたが、敵の大軍は志雄礪波の二道から越中へ向つたと聞き、敵が越中の平野へ出ない先に、得意の山地戰で惱まさうといふ計略を胸に描いて、五月十一日に礪波山の北の麓へ陣を取る。平家方の先陣は此の時礪波山の峠へ現れたが、源氏の白旗が林の中から立騰つて居るのを見て、峠を越えて猿ノ馬場に陣を取る。此の邊は左には斷岩絶壁を負ひ、右には倶利伽羅の深谷を臨み、その間を只一筋の路が走つて居る。義仲は先づ十郎行家、足利判官代義清に一萬騎の兵を授けて、志雄山の敵に向はせ、又今井兼平、樋口兼光、根ノ井ノ小彌太等に二千騎三千騎の兵を授けて間道から敵の後へ廻らせ、自ら三萬騎を率ゐて黑坂口に向つて敵と對陣したが、故らに敵を操つて日の暮れるのを待つて居た。此の夜義仲は樋口、根ノ井等の勢が敵の後へ廻つて鬨の聲を擧げたのを合圖に、數百頭の牛の角に松明を燃したのを追立てながら平家の陣へ押寄せ、前後から取圍んで攻立てたので、地理に暗い平家の軍勢は忽ち進退の度を失つて、倶利伽羅の深谷へ陷る者一萬八千餘騎、三河守知度、右兵衛佐爲盛を始として、敵の手に討たれた者も多かつた。此の間志雄山の方面では、盛俊が行家に對して優勢を示して居たが、礪波山の敗報を聞いて急に引返し、礪波山の殘兵を收容して、五月廿五日加賀國安宅の湊に據り、橋を引いて陣を取る。六月一日義仲の大軍が安宅の渡に押寄せて、河を渡つて攻めかけたので、平家は再び退いて加賀國篠原に陣を取つたが、こゝをも落されて、殘兵三萬餘騎這々の體で、或は北國の浦を傳ひ、或は山道を越えて、思ひ〳〵に京都へ逃げ還つた。

平家の都落

此の敗報は六月四日に京都へ達したので、此度出征した兵卒の家族はいふまでもなく、全都の住民が此の一大不幸を悲んで、家業も手に看かない有樣であつた。五日に

延暦寺の向背

は院の御所で評議があつて、中納言長方らは又々關東との和睦を主張した。右大臣兼實は病と稱して出なかつたが、法皇は其の奏議を容れて、其の十一日に藏人右衞門權佐定長に命じて、兵革が鎭まつた後は、大神宮へ行幸にならうといふ御願書を立てられた。此の月の中旬には義仲の軍は東山、北陸の二道から京都へ攻め上つて、北陸道の先陣はもう越前の國府へ著いたといふ報告がある。七月に入ると、東國の兵が入京するといふ噂が一般に擴がつて、京都の人心は愈〻動搖する。平家はこの危急の際に、延暦寺に叛かれては一大事だといふので、俄かに一族十人の署名した鄭重な起請文を送つて、藤原氏が春日社、興福寺を氏社、氏寺とする例に倣ひ、日吉社、延暦寺を平家の氏社、氏寺として尊崇しようといふ誓ひを立てた。一方義仲の方でも山門を身方につけようといふので、大夫房覺明に牒狀を書かせて延暦寺に送り、又覺明の知己で白井法橋幸明といふ僧を賴んで衆徒を說かせた。延暦寺の衆徒は此の兩方の申出を受けて僉議を重ねたが、平家のこれまでの振舞に不快を感じて居た大多數の衆徒は、平家の誓願を一笑に附して、惡逆な平家を見棄てる時が來たといつて、源氏に身方するに決したので、幸明は總持院の大庭に遠火を燒いて、義仲の軍に合圖をする。此の時義仲は進んで、近江の蒲生に陣を取つて居たが、山上の合圖を見て、覺明を先達として七月二十二日叡山に登り、總持院に城郭を構へ、一軍は東近江を廻つて野路に陣を取つた。平家方では、是より先義仲の將足利判官代義淸が丹波路へ廻つたと聞いて、薩摩守忠度を遣つて、丹波路を固めさせたが、義仲の本軍が愈〻近江に入つたと聞いて、七月二十一日三位中將資盛を大將とし、肥後守貞能と共に一千餘騎を率ゐて宇治に向はせ、翌日は更に新中納言知盛、三位中將重衡に二千騎を授けて勢田に向はせた。併し此の時には義仲はもう叡山に上り、行家は大和に入つて、吉野の大衆を率ゐて京都に向つた。又この時まで平家方であつた多田ノ藏人行綱が俄かに變心して、攝津、河內の兩國を徇へ、河尻ノ津を塞いで西海の兵粮米を止めた。義淸も忠度の軍を破つて日ならず丹波路から攻上つて來る、といふやうな報告が櫛の齒のやうに到著したので、平家は急に宇治、勢田を棄て、京都へ引返した。二十四日になると、もう源氏の軍勢が四方から京都へ亂入して來るといふ噂が立つて、全都の人々は上を下へと騷動する。愛に至つて平家は居ながら敵を受けることの不利を察し、豫定の計畫通り、愈〻天子を挾んで西海へ下らうといふことになり、廿四日に先づ天皇と神器を法皇の法住寺ノ

法皇の山門御幸

御所へ移し、翌日は天皇と法皇を奉じて、西海へ出發する手筈に決めて居た。すると法皇は此の夜右馬ノ頭育時、檢非違使平知康以下數人の者に供奉されて、人知れず法住寺殿を脱け出し、鞍馬路を廻つて延暦寺へ上り、義仲の陣に身を投じたので、平家は愈〻狼狽して、翌二十五日主上(安德天皇)、皇母(建禮門院)及び三種の神器を奉じ、六波羅、西八條の邸に火をかけて、一族郎等御輿の前後を圍んで落ちて行つた。平家一門の中で、都に殘つたのは、賴朝の好意を憑んで鳥羽から引返した池ノ大納言賴盛ばかりであつた。畠山重忠の父庄司重能、叔父小山田別當有重は、此の時までも平家の恩義を忘れず、共々に下つたが、宗盛は强ひて諭して東國へ歸らせた。

(一)『東鑑』卷一。
(二)『東鑑』卷二。
(三)『東鑑』卷一。
(四)『東鑑』卷二、治承五年閏二月廿日、廿三日、九月七日。
(五)(六)『東鑑』卷二。
(七)『東鑑』卷二、養和二年九月十五日、廿八日、十月九日。
(八)『玉葉』養和元年九月廿八日、廿九日、十月廿七日等。
(九)『玉葉』養和元年九月—十月。

平家落去後の京都

(一〇)『玉葉』。
(一一)『玉葉』。『愚管抄』卷五。
(一二)『玉葉』養和元年閏二月六日、七日。
(一三)『玉葉』。

第二節　賴朝と義仲

平家の一門が西海へ落去した翌日(七月二十六日)京都では法皇が叡山へ上つて、東塔南谷ノ圓融坊にゐるといふことが知れ渡つたので、入道前ノ關白基房、左大臣經宗、右大臣兼實、內大臣實定以下の廷臣は先を爭つて山へ登る。攝政內大臣基通は清盛の女を娶つてゐる關係から、大抵の人が平家と運命を共にしたことと思つてゐたが、基通は一旦は平家に迫られて京都を出發したものゝ、法皇が一緒でない事が分つたので、俄かに引返して圓融坊へ上つて來た。其の翌日法皇は山を下つて蓮華王院の御所へ入る。錦織ノ冠者義廣が白旗を差して先陣に立つた。續いて義仲の先陣として武田の勢が最先に京へ入り、義仲と行家は廿八日に北と南から入京した。

卽日人を蓮華王院の御所へ召して、平家追討の命を下され、賴朝には別に使者を立て、上洛を促した。八月六日平氏一門二百餘人の官職を解き、同十日には平家討伐の

賞を行つて、義仲を從五位下に叙し、左馬頭兼越後守に任じ、行家を從五位下に叙し備後守に任じたが、二人ながら其の任國を嫌つたので、十六日の除目には義仲を改めて伊豫守とし、行家を備前守とした。この間朝廷では平氏追討解官、勸賞などの形式に就いて、種々な問題が起つた。追討や解官に宣旨を用ひようか、院廳下文を用ひようか、又源氏の勸賞を行ふに就いても正位の天皇のない場合に、果して除目を行つていゝか、或は内々の沙汰に止めて置くべきかといふことが、大分面倒な問題であつたらしい。(三)其の結果追討、解官などは、院廳下文で行はれたが、除目の一條に就いては、異論があつて、先例のない院殿上の除目が行はれた。勸賞の次第に就いても議論があつたが結局賴朝を第一、義仲を第二、行家を第三とし、賴朝の賞は上落の時まで保留することになつた。

皇位繼承の問題

是等の問題につけても、京都に天皇が缺けてゐるといふことは不都合だといふ議論が出て、右大臣兼實なぞは極力新帝を立て、天下の人心を繫がなくてはならぬと主張した。帝都の騷擾を鎭めるためにも、平氏を追討する必要から言つても、一日も主上がなくてはならぬ、只古來三種の神器なしに卽位の大禮を擧げた例はないが、繼體天皇の例に倣つて、踐祚といふ分には差支ないといふのが、兼實の意見であつた。(四)此の時一方には平家に院宣を下して安德天皇の還幸を促さうといふ議論があつて、法皇は敎書を平大納言時忠に下して、無事に天皇と神器を還させようとしたが、時忠は備前國兒島から返書を送つて、「今となつては何とも取計ひ兼ねる」といふ意味の冷笑的な文言であつた。是に至つて朝議は終に新帝を立てるといふことに一決し、法皇は高倉天皇の皇子の中から擇ばうとした。先帝の皇子には安德天皇の外に三人あつて、第二の皇子は二位ノ尼に養はれて、都落の時西國へ伴はれたが、第三の皇子は五歲、第四の皇子は四歲で京都にゐた。法皇はこの二皇子を御所へ召して對面すると、第三の宮は人みしりをして、法皇の側へ寄らなかつたのに、第四の宮は直に法皇の膝へ抱かれて、嬉しさうににこ〳〵してゐたので、法皇の心は、早くもこの皇子に傾いた。(五)其の上又法皇の寵女六條殿も夢想に託してこの皇子を薦めたので、法皇は愈〻四ノ宮を立てゝ天子にしようといふ心になつた。(六)

義仲の異議

すると爰に思ひがけない故障が、思ひがけない方面から出た。それは義仲がこの廷議を聞いて、「それならば以仁王の王子が北陸に居るから、この王子を推戴するのが當然だと思ふ」といふ意見を、大藏卿高階泰經まで申出したのであつた。法皇は義仲と昵懇な俊堯僧正をお使として、重ねて義仲の意見を尋ねられ、尙ほ先帝の皇子が二人ま

で都に在るのを差措いて、皇孫を立てるといふのは例のない事で、神慮の程も測られないといふ意味を說諭させた。併し義仲は飽までも其の意見を主張した。斯ういふ重大な事柄に我々が口を挾むべき筋はないが、只道理の上から言ふと、法皇が幽居の當時、高倉上皇には平家の權勢を憚つて、何の御成敗にも及ばなかつたのを、三條宮は御身を棄て、法皇に孝を盡されたこと、法皇にもお忘れになる筈はない。まして此度平家を驅逐した大功は、偏へに北陸ノ宮の力であるのに、この宮を棄て置かれるといふのは甚だ殘念な次第である。この事は決して義仲一人の考ではない、部下一同の意見を代表して申上げるのである。但この上の事は偏へに法皇の思召しに從ふ外はない」といふのが義仲の意見であつた。(七) 法皇は八月十八日前關白基房、攝政基通、左大臣經宗、右大臣兼實を召して評議させたが、北陸ノ宮に贊成する者は一人もなかつた。それでも尙ほ法皇は義仲を憚り、官僚に命じて卜占を立てさせると、四ノ宮が大吉、三ノ宮が半吉、北陸ノ宮が不快と出たので、直に僧正俊堯を以てこの占形を義仲に示し、四ノ宮を皇位に登すことに一決した由を通じてやる。義仲は尙ほも不滿を抱いて二三の抗議を述べたが、廷議は最早義仲の不平に頓着なく、壽永二年八月廿日法皇の宣命によつて、皇孫尊成を皇太子に立て、卽日閑院で踐祚の儀を行ひ、翌元曆元年七月、

後鳥羽帝

神器の歸還を待たずに太政官廳で卽位の禮を擧げた。卽ち後鳥羽天皇である。三種の神器を具へずして踐祚することが、既に違例として後世の非難を免れなかつたが更に神器の授受なくして卽位の大禮を擧げるといふに就いては、最初に踐祚を主張した兼實すら、極力反對して、「劍璽を持つた者が天子になるのは、我國古來の習慣で、劍璽を持たずに踐祚した例は、文字あつて以來聞いたことがない。只天子の位が一日も缺くことが出來ないために、假に天子を立てたのは、誠に止むを得ないからであつた。併し卽位の事は、劍璽の歸るのを待つて行ふべきである。神鏡も劍璽も今は叛賊の手にあるけれども、國家の運が盡きなかつたら、屹度恙なく歸つて來るに相違ない。其の時を待つて卽位の禮を擧げるのが上々の策である。若し又不幸にして神器が海底へ沈み、又は灰燼よなつて紛失するやうなことがあつたら、其

後鳥羽天皇寢影

正閏論

の實否を見究めた上で、更めて評議に及ぶべきである。今劍璽を帶びずに輕々しく卽位の禮を行はれるといふのは、恐らく神器を輕んずるがためであらう。國家の大亂の本である云々」と言つて諫爭したが[八]、法皇はこの議を用ひないで、卽位の禮を擧げた。そこで同時に二人の天子があることになつて、其の正閏に關して後世に種々の議論を生じ、一方には「これは違例には相違ないが、法皇が事實上の君主として、正統の位を傳へたのであるから、安德天皇は院宣で廢せられたものと見て差支ない」といふ解釋があれば[九]、他方には「後鳥羽の卽位は、唯實際の主權者を以て說明するの外に道がない。これ後世南北兩朝分立の端を開いたものである」と論じ[一〇]、尙ほ極端なものは春秋の軍法を以て、後鳥羽天皇の踐祚を認めず、安德天皇の崩後に初めて其の卽位を認めるものさへある[一一]。賴襄は特にこの事件を論じて、兼實が、踐祚と卽位とを別けて、一を贊し、一を斥けた態度を攻擊し、踐祚と卽位とどれ程の違ひがあるか？「神器を輕んじて、國家の大亂の本をなす」といふのは、自分の事だと難じて居る。

京都に於ける義仲

この時義仲は京都へ入つてからまだ一月とは經たなかつたが、ひとりこの皇位の問題ばかりでなく、四圍の事情がすべて最初の期待に反くことを發見した。單純な武人たる彼れは、一たび京都を占領すれば、平氏一門のもたやうに、思ふがまゝに天下の實權を握ることが出來ると想像してゐたに相違ない。彼れは大兵を提げて京都へ入つた。而して平家を西海に逐つて、代つて京都の主人公となつた。併し京都へ入ると同時に、彼れは京都を支配せずに、却つて京都に支配される境遇に陷つた。政治上に何等の經綸をも有たない彼れは、先例と典故を生命とする宮廷政治の渦中へ跳込むや否や、殆んど手も足も出なくなつた。木曾の山中で成長して、京都の生活に親みのない彼れは、斯ういふ宮廷の事柄に就いては、小兒のやうに無知であつた。彼れは一切の典故にも、一切の作法にも頓着なく、田舍の言葉を語り、野人の無作法を振舞つた。彼れは其の兵力を以て朝廷の官僚を威壓したことは事實である。老獪な法皇さへ、彼れに對しては遠慮勝であつたことは、皇位問題に對する態度でも推察される。併し表裏に長けた京都人は、早くも彼れの弱點を見て取つた。彼れの粗暴と無作法とは、忽ち貴族社會の嘲弄の種となつて、蔭口に剛れた京都人士は、彼れの不人望を一層深く廣くしたのは、其の部下の兵士の亂暴であつた。義仲が大兵を擁して京都へ入つたさへ無謀であつたのに、其の兵を其のまゝ、狹い京都へ止めて置いたのは、如何にしても思慮のない行爲だといはなければならない。當時の戰爭の習慣からいふと、分捕と徵發とは武士

兵士の亂暴

の當然の權利であつた。假に糧食が充分に行渡つてゐたとしても、京都のやうな都會地へ大軍を駐屯して、軍規を保たうといふのは、殆んど不可能なことであつた。況して糧食や物資に乏しい北國の兵にそれを望むのは、愈困難であつたと言はなければならない。北方の山國を出て忽ち帝都の繁榮を目擊した多くの兵は、到る所、家々になだれ入つて、亂暴狼藉を擅まにした。

滿都怨嗟の的

法皇は幾度となく義仲に命じて、武士の狼藉を停止させようとした。同時に平家の沒官の所領を義仲行家以下の將士に分け與へて、彼等に糧食の缺乏を感ぜしめないやうに計らつたが、それでもまだ武士の狼藉は已まなかつた。是に至つて義仲はひとり法皇及廷臣の間にばかりでなく、全都の人民の怨みを一身に負ふことになつた。浮草のやうな人の心は、まだ平家の方がましであつたと思ふやうになつた。法皇の法住寺の御所の門前に札を立て、「あかさいてしろたなごひに取替へて頭にし卷く小入道哉」といふ落首を書く者さへ現れた。(一二)

斯ういふ場合に、陰謀と詭計を生命とする宮廷の謀議が、頼朝によつて義仲を制御しようといふことになつたのは、自然の經路だと言はねばならぬ。卽位の問題のまだどちらとも決定しなかつた八月の中旬頃、院廳/官中原康貞は、窃かに法皇の院宣を奉じて鎌倉に下り、頼朝の上洛を促した。康貞は九月初旬鎌倉に着き、十月の下旬に京都へ歸つたが、此の間院中の談話は頼朝上洛の噂で持切つて居た。或は頼朝は八月の末に鎌倉を立つたといひ、或は義仲は合戰の用意をして頼朝を待ち受けてゐるから、どうしても一戰爭なくては納まるまいといふかと思ふと、他の風說では、頼朝はまだ出發しないが、中原親能が先驅として九月十日頃には上洛する併し其の後から頼朝も上洛することになつてゐるといひ、寄ると觸ると、この噂ばかりであつた。兼實は『玉葉』で斯う書いてゐる――「近日の天下では、武士の外は、一日も存命する手段がないので、上下貴賤を問はず、山里や田舍へ逃げて行く者が多いといふ。四方の道は皆塞がつた。四國及山陽道の安藝以西、九州等は、平氏征討以前には道が開かない、北陸、山陰の兩道は、義仲が押領して、院の領地を始として、一切吏務を執らせないし

頼朝に對する京人の期待

藤原兼實の畫像

又東海東山の兩道は頼朝の上洛以前には、これも進退することが出來ない。其の上畿內附近の田畠は、悉皆作物を刈取られ、京都の市中から郊外へかけて、神社も佛寺も一般の民家も一樣に追捕され、庄公の租稅は、多少を論ぜず、輸送の途中で奪ひ取られ、それがために市中の商賣も止まつたといふ。京都の人民は殆んど生活の道を失つた。たゞ一つの憑みは頼朝の上洛だといふ。併し彼れの賢愚の程も計られない。只我が朝の滅亡の時が來たのか、といつて院中の上下は歎息するばかりである。云々。」

頼朝の上奏

斯ういふ期待の中へ康貞は鎌倉から歸つて來た。この時頼朝は封書を獻じて、三ケ條の上奏をした。一には、神社佛寺に勸賞を行はるべき事。其の理由は、日本國は神國である。然るに近年平家の輩が、神社佛寺の領を顧みずして、押領した咎によつて、七月廿五日に都を落ちて、散りうせた。これ王法を守護する佛神が、冥罰を加へられたものに相違ない。全く頼朝の微力に及ぶ所ではない。されば先づ賞を神社佛寺に行はるべきが至當だと存じます。近年では佛の燈油の料が闕けて、昔の面影がない。寺領を元々通り恢復するやうに、早く宣下を給はりたい。二には院宮以下諸家の領を元の如く本所に返付さるべき事。其の理由は王侯卿相の御領を平家の一門が押領した所が多い。領家に取つては、堪へ難い苦痛に相違ない。早く烈日の明詔を降して、この愁雲を拂ふことが出來たら、この上の幸福はないでせう。道理に從つて適當な御沙汰が望ましい。第三には、叛逆者たりとも斬罪を宥さるべき事。平家の家來でも歸順した者には、命を助けるやうに致したい、といふ理由は、頼朝は勅勘を蒙つて、罪に行はれましたが、露の命を全うしたばかりに、今朝敵を討つ事が出來た。この後も斯ういふ事がないとは限らない、急いで斬罪に行ふことをせずに、只罪の輕重に從つて處分せられることを希望するといふのである。之に續いて頼朝は別に使者を送つて、義仲が頼朝を討つ計畫をしてゐるといふ風說に就いて、朝廷に實否を質し、又一たび頼朝に叛いた三郎先生義廣が上洛してゐることや、義仲が平氏を追擊せず、朝廷を蔑ろにするにも拘らず、却つて朝廷から恩賞を下されたことに就いて抗議を申込んだ。同時に上京の命令に對しては、當座の延期を奏請した。其の理由としては、一には今鎌倉を離れて上洛したら、藤原秀衡、佐竹隆義(秀義の父)のために、盧を衝かれる恐れのあること、二には若し數萬の軍勢を率ゐて入京したら、京都の騷擾は愈〻甚しいであらうといふことであつた。(一三)

京人の傾倒

義仲に對する反感から、頼朝の入京を待ちこがれて居た京都の貴族らは、この復命を聞いて、失望したに相違ないが、併し頼朝の宮廷に於ける輿望は、このために愈〻

重くなつた。この時までも頼朝の人物に就いて幾分の懸念を抱いてゐた者も、彼れの三ヶ條の建言を聞いて、「これは義仲などの比ではない」と悟るやうになつた。「頼朝といふ人は、威勢の嚴肅な、性質の强烈な、成敗の明かな、道理のよく分つた人物だ」といふことが一般の輿論になつた。これには「莫大な引出物」を給はつて歸つて來た使者康貞の復命が有力な基礎となつたに相違ない。頭から京都人を輕蔑し、虛儀虛禮を冷笑した義仲の皮肉な態度が、宮廷の不人望を買つた一方に、よく京人の心理を理解し、京人には京人らしい待遇を與へて、其の感情を利用するに努めた頼朝の溫雅な態度が、京人の間に人望を得たのも不思議はない。

義仲の出征

この間法皇は一方に頼朝の上京を促すと共に、一方には義仲を早く京都から退去させようと思つて、頻りに進擊を促したが、九月廿日には愈〻義仲を院の御所へ召して平氏追討の命を傳へ、手づから御劍を給はつた。[二四] この前後に頼朝からも進擊の督促を受けたが、[二五] 義仲は頼朝の上京を氣遣つたものと見えて、足利義清、海野幸廣などを先發隊として、西方に向はせたばかりで、自分ではまだ京都に留つて居た。其のうちに、院の使が歸つて、頼朝が急に上京しないことが分つたので、義仲はやつと安心して樋口兼光を京都の守護に留めて、京都を出發した。[二六]

奏上の實行

義仲の出征で、ほつと安心の息を吐いた法皇は、十月十四日、頼朝の上奏を用ひて、宣旨を東海、東山の二道に下し、「諸國の年貢、神社佛閣寺院竝に王家臣家の家領庄園は、元々通りに領主に從ふやうにせよ、若しこの院宣に背く者は、頼朝に命じて屹度處分させる」と觸れさせた。頼朝の奏議の中には、北陸道も入つて居たが、北陸道は現に義仲の勢力範圍になつてゐるので、義仲の感情を和げるために北陸道へは宣旨を下さなかつた。同時に宮廷では頼朝と義仲との間を調停するやうに骨を折つて居た。[二七]

瀬戸内海に於ける平家

さて京都ではこんなことで空しく日を送つて居る間に、一旦都を落ちた平家の一門は、再び陣形を立て直して、次第に東へ進んで來た、是より先、菊池隆直、緒方惟義などが頼朝に應じて九州で兵を擧げた時、宗盛は筑後守貞能を遣つて、叛亂を鎭壓させると共に九州の諸國から兵粮米を徵發させたが、壽永二年の七月になつて、貞能は菊池、緒方を始め、臼杵、戸槻の諸族を降し、九州を鎭定して京都へ凱旋した。この時はもう北陸の軍が大敗して、義仲が京都へ迫つて來た時だつたので、貞能の功は圖らずも平家の都落ちの準備をしたことになつた。平家の一門は七月廿五日に京都を出で福原に下り、其の夜は、管絃の會を催して、淸盛入道の魂魄を弔ひ、翌日は、內裏を始め、一切の邸宅を燒き拂つて、船に上り、瀬戸內海を航して、八月十七日に筑前

の太宰府へ着いた。爰で原田種直、菊池隆直を始めとして、臼杵、戸槻、松浦黨の諸族に迎へられ、皇居を造つて天皇を安置したが、豐後國ノ豪族緒方三郎惟義が、國司刑部卿頼資の旨を受け、臼杵、戸槻、松浦黨を說いて、平家に叛き、大兵を以て太宰府を攻めたので、平家は一日太宰府を落ちて、箱崎に逃れ、更に兵藤次秀遠の山鹿の城へ入つた。この時になつて、菊池隆直も變心して敵になつたので、平家は再び船に上つて、豐前の柳浦に移り、長門の目代紀ノ民部ノ大輔光季の獻じた兵船百三十艘を率ゐて四國に渡り、讃岐國屋島に行宮を造つた。阿波の豪族民部大夫成能を始めとして、四國の豪族は悉く馳せ集つて身方になる。長門國は新中納言知盛の管國なので、知盛は彦島を固めて、門司關を扼し、敎盛、通盛、敎經は、山陽道を經略して、備中の水島に據つた。

義仲軍の水島敗戰

この時瀨戸内海に於ける源氏の黨には、伊豫に河野通信があり、安藝には其の舅沼田太郎が沼田尻を扼して、通信と相呼應して居る。そこへ足利義淸、海野幸廣を將とした義仲の先鋒が、備中へ下つて、閏十月一日に海上から水島を攻擊したが、海戰に慣れない東國の兵は、大敗して義淸、幸廣を始めとして一千餘人を失つた。義仲はこの時播磨まで下つてゐたが、(一八) この敗報を聞いて急に備中へ馳せ下り、瀨尾太郎兼康を板倉城に攻めて之を殺した。併し京都からは九郎義經が頼朝の代官として、大兵を率ゐて鎌倉を發したといふ報知と共に、行家が院宣を給はつて義仲を討つといふ風說があるといふことを通じて來たので、義仲は山陰の兵を備中へ殘して(二〇) 遽かに京都へ向つた。(二一)

義仲の境遇

義仲が上京するといふ噂が傳はると、京都の人心は俄かに動搖して、急に家財を運び出したり、妻子を連れて田舍へ立退いたり、今にも戰爭が起るやうな騷ぎの中へ、義仲は手勢を引率れて、閏十月十五日に入京した。法皇の御所では、義仲が歸つたと聞くと、君臣共に顏色を變へて驚いた。義仲は法皇が頼朝を召して義仲を討たせるといふ疑を抱いてゐるに相違ない、先づ義仲の心を和げて、平家を追討させるためには、法皇が御自らから進んで西征を仰せ出され、播磨あたりまで御幸あつて、中國、西海の住人を召されたらよからうといふやうな策を立てる者さへあつた。(二二) 義仲は京都へ歸つて見ると、京中では法皇が義仲を避けて、京都を出るといふ噂が專ら傳はつてゐるので、急に一族を集めて評議を開いた。其の席上で、法皇を頼朝の手に奪はれない先に法皇を奉じて北陸に赴いて根據を堅めようといふ意見が出たが、行家等の反對で成立たなかつた。するとこの祕密が忽ち法皇の耳へ入つた。閏十月廿日、法皇は法印靜賢

行家との關係

を使として義仲に此の事を詰問させ、尙ほ不平に思ふ條々を尋ねさせた。義仲は風説の事實を非認すると同時に、法皇が自分を疎んじて、頼朝に使を送つた事、又頼朝の上奏に從つて東海、東山の諸國に宣旨を下された事をお怨みに思ふと答へ、又この度頼朝の代官が數萬の精兵を率ゐて上京するといふ風評があるに就いては、途中まで出向いて防がうと思ふ、この際頼朝追討の院宣を賜はりたいと申請した。義仲はこの祕密の漏洩者を確めようと思つて、其の後參院して、其の執奏者を承りたいと申出したが、法皇は只世間の風説だといつて、名を言はなかつた。けれども義仲は行家の外には、この祕密を漏らす者はないと信じて、愈〻行家を不快に思ふやうになつた。

斯うして義仲は、東西に敵を控へた上に、内部には法皇と行家とに於て、頼み甲斐のない身方を發見した。行家は義仲と相竝んで京都へ入り、相竝んで勸賞を行はれたけれども、本來源氏の故老として、頼政と共にこの度の擧兵の唱首となつた行家は、年少の義仲よりも却つて行賞が薄いのを見て、この時からもう不平を抱いてゐた。[二三] 其のうちに義仲が京都の上下に不人望となつたのを見て、行家は院中に取入つて、法皇の雙陸のお相手までもするやうになつた。[二四] 義仲もこれには多少不快を感じてゐたものと見えて、法皇から最初行家を平家追討に差向けるやうにといふ仰せのあつた時にも、

義仲は、行家は勇士ではあるが冥加がなくて、いつの戰でも敗北するから、今度の追討使にはどうかと思ふ」といつて反對した。[二五] そこで義仲は行家の監視を腹心の樋口兼光に言含めて置いて、自分は中國へ出征したが、此の間に彼れは諺にいふ「鼬のなき間貂誇り」で院中のきれ者になつて法皇に近づき、義仲追討の院宣を給はつたといふ風説まで立てられる程になつた。これは一方には、武士を以て武士を制御しようといふ朝廷の傳統的政策と、「義仲僻事あらば、行家に仰せて討たるべし」といふ頼朝の獻策の一致した結果が、法皇と行家の握手になつたのでもあつたらうが、他方には、以前頼朝に叛いて義仲に投じさせた同一の性癖が、今又行家を驅つて義仲に叛氣を起させたことも爭はれない。こんなことで、義仲と行家との間にも不快の芽がのびかゝつてゐた所へ、前述の祕密漏洩事件が起つたので、義仲は愈〻行家の行動に疑惑を抱いて、一方には志太三郎先生義廣を備後守として、平氏を追討させることを奏請すると共に、一方には行家を京都へ拘束して置いて、頼朝の軍に向はせようとした。[二六] 併し行家は義仲の意に背いて、十一月八日平氏追討のために京都を出發し、石川判官代義兼と同伴して播磨國へ下つた。[二七]

この間に法皇が待ちに待つた頼朝の上京に就いては、樣々な風説ばかりが傳はつて、

一向取りとまつたことがない。頼朝は精兵五萬騎を率ゐて上京することになつて、閏十月の初に鎌倉を立つたが、俄かに秀衡が數萬騎を率ゐて白河ノ關を出たといふ報を聞いて、途中から引返したともいひ、或は弟九郎義經に五千騎を附けて上京させることになつたといふやうな噂も傳はつたが、やがて十一月に入ると、頼朝の代官九郎義經が齋宮次官中原親能と共に、東國の年貢を護送してもう近江まで來たといふ報道があつたので、法皇は澄憲法印を使者として、義仲にこの由を通じて、官物を護送するために上京するものだから、誤解のないやうにと言つてやる。義仲は義經の兵が僅かに五六百騎に過ぎないと聞いて、大兵を率ゐて來るのでなければ、入京を許しても差支へないと不精不精にお請けをする。(二八) 此の間に一方では法皇が南都へ御幸になる、いや義仲の暴行を避けるためと、南都といふ名目で吉野へ引籠られるのだといふやうな風説も傳はつた。此月閏十月の末には奈良ノ僧正が法皇の召を受けて上京したが大和の國の兵士を集めて軍備をして置くやうにといふ仰せであつたといふ。(二九) さうかうする中に十一月十一日になると、法皇が鎌倉へ遣はされた院廳ノ官康貞が、再度の使命を果して歸京する、續いて其の後からやつた主典代景能も上京したので、關東の樣子や、頼朝の意向は愈〻確かめられたに相違ない。此の頃から義仲に對する法皇の態度が、

法皇の詰問

急に強硬になつた。此の時義仲は頼朝の軍を防ぐために、部下の將を伊勢、美濃などに出したので、京都に留めてある兵は極く手薄であつた。此の虚に乘じて、院の御所では、義仲を京都から驅逐しようといふ計畫があるといふ風聞が、京中に擴まつた。院中には此間から警固の武士が集まつて、嚴重に門々を固めて居たが、十六日になると、法住寺殿の周圍にはもう堀をほつたり、柵を構へたりして、まるで戰爭でも始まりさうな騒ぎである。(三〇) 北面の武士壹岐ノ判官知康、宮内ノ判官公朝などが、法皇の命を奉じて密々に延暦、園城二寺の僧兵を招き、又緣故のある源氏の武士を召集して院の御所を固めさせた。(三一) 十七日法皇は主典代景宗を使として義仲に詰問させた、「平氏征討のために、西國へ向ふやうに幾度も申付けてあるのに、未だに出發しないばかりか、頼朝の代官を伐つと唱へながら、未だに進發しないのは其の意を得ない。さうして京都に留まつてゐる所を見ると、噂の通り謀叛の心があるのではないか。若し法皇に敵たう心がないならば、即刻京都を出て、西國に下向するがよい、此の後も尙ほ京都に留るに於ては、謀叛の風聞を事實と認めるから」といふのが詰問の趣意であつた。之に對して義仲は、謀叛の風聞の事實でないことを陳辯し、「頼朝の代官を京都へ入れないといふ御沙汰があつたら、直にも西國へ下向します」といふ返事をした。

無謀の御企て

併しこれを最後通牒として、十八日には、後鳥羽天皇は御微行で法住寺殿へ行幸になり、天台座主明雲、仁和寺法親王守覺も、武士を連れて參入した。園城寺の圓惠法親王はこの以前から院中に居た。院方の武士には、攝津源氏多田ノ藏人、河内ノ守光助、弟源藏人仲兼なぞもあつたが、其の他はみな烏合の武士や僧兵であつた。廷臣の中でも考のある者は、法皇が近習の小人を信じて、無謀な事を企てるのを歎息した。

法住寺殿の燒討

斯うなつては義仲も最早意を決しない譯には行かなかつた。「十善の帝王にて御座しませども、冑をぬぎ、弓をはづして、おめ〳〵と降人には參るまじ。」十九日の午後、義仲は兵を三手に分けて、三方から法住寺殿を圍み、風上から火を放つて燒討にしたので、烏合の勢は忽ちに崩れ立つて、大將知康を先に散々に落ち失せた。座主明雲と圓惠法親王とは、亂軍の中で殺され、主上と法皇と守覺法親王とは、危ふく難を遁れて、主上は母儀の七條亭に渡り、法皇は武士に護送されて、攝政基通の五條東洞院の亭に移つた。(三三)

義仲の三日天下

義仲は實際に京都の主人となつた。この戰の翌日院方の首級百十一を五條河原に懸け、義仲は監臨して、三たび鬨の聲を作らせた。翌日基通の攝政を罷め、前關白基房の子師家を內大臣に任じ、攝政、氏ノ長者とした。師家はまだ十一歲なので、父の基房が實際の政治に當ることとなつた。義仲は基房の女を娶つてゐたので、師家とは兄弟の關係があつたのである。尋いで廿八日には院ノ近習中納言朝方以下四十餘人の官を解き、其の他は所領を沒收し、義仲は院の御厩の別當となつて、平氏の沒官領の中から一所を賜はり、八十六箇所を管領し、十二月十日には奏請して賴朝追討の院廳ノ下文を賜はり、靈元曆元年正月十一日には征夷大將軍の宣旨を下された。

刻々に迫る外部の壓迫

斯うして十一月十九日の事變後、義仲は天皇及法皇を擁して、暫く京都の實權を握つてゐたが、此の間に外部からの壓迫は刻々に迫つて來た。義經は此の月の初めにも一度近江へ入つて、京都の形勢を窺つてゐたが、事變の當時は丁度伊勢國にゐたらしい。(三四) そこへ院ノ北面宮內ノ判官公朝、藤左衞門尉ノ時成の二人が馳けつけて、合戰の顚末を報告したので、義經は卽刻飛脚を鎌倉へ立てゝ、賴朝の指揮を仰ぎ、その次第によつて京都へ攻上らうと用意して居た。同時に一方では水島の戰後平氏は頻りに瀨戸內海の兩岸を徇へ、伊豫の河野通信を攻め落し、轉じて安藝の沼田尻に向ひ、沼田ノ城を攻めて、沼田ノ太郎を降し、更に豐後の緒方惟義、臼杵維隆、海田宗親らの水軍が、河野通信と聯合して備前の今木城に據つたのを攻落して、備中、備前を恢復し、京都の內訌に乘じて、十一月には其の先鋒は播磨まで進んで、室ノ泊に陣を取つた。是より先十一月

義仲の畫策

八日に京都を發した行家は、其の月廿九日に室ノ泊まで下つたが、平氏は之を室山に迎へて、散々に打破り、播磨を平定して、次第に福原の舊都へ近づいて來た。義仲は東西に此の大敵を控へた上、畿内でも攝津源氏多田ノ藏人行綱は、城を堅めて義仲の命に從はず[三五]、行家も河内の石川城に據つて叛旗を翻へしたといひ、其の上叡山の衆徒が、山を下つて義仲に復讐に來るといふ噂は頻りと傳はつた。斯ういふ有樣で、義仲は京都の實權を握つたとはいふものゝ、四面に敵を受けて、その境遇の不安なことは、平家の末年と少しも變らなかつた。尚ほ其の上に油斷のならないのは、宮廷の陰謀である。義仲は腹心の郎等を五條内裏へ配置して、嚴重に法皇の身邊を警固させると共に、一方には陸奥の秀衡と握手し[三六]、一方には平家と和議を結んで、賴朝に當らうといふ策を畫いてゐたらしい。義仲が平家と和睦する考があらうといふ風説は水島合戰の後で、急に歸京した頃から、世間に傳へられて居たが[三七]、十一月十九日の事變以來、餘程實際的の色を帶びて來た。或は義仲が使を播磨ノ室ノ泊にあつた平氏の陣に送つて、和睦を申込んだといひ、或は和議が成立つて、明春には平氏が入京することになつたといひ、或は義仲が一尺の鏡を送り、其の裏に起請文を鑄て、平家に送り、それによつて和議を結んだのといひ、或は義仲が法皇を奉じて、北陸へ奔るといふ風聞があるために、

東軍の上京

和議が一時頓挫したといひ[三八]、其の風説は區々であるが、兩者の間に和議の進行しつゝあつたことは、略ゝ推定される。之と同時に、義仲は最後の場合を豫想して事が迫つたら法皇を奉じて、京都を出ようと考へてゐたらしい。彼れは從來の經驗から、法皇を奉じなくては事が出來ないと信じて居た。併し法皇は誠に厄介な代物である、一刻も目を離すことの出來ない危險人物だといふことも知つて居た。彼れが法皇の督促を受けながら、最後まで京都を離れ得なかつたのは、主として之がためであつたらう。義仲は此の見解から、京都を離れる場合には、東國へ向ふにしても、或は西國へ下るにしても、或は北陸へ落ちるにしても、必ず法皇を奉じて行かうと思つて居た[三九]、更に最後の場合には、京都中を燒き拂つて、北國へ引上げようといふ猛烈な意見さへ持つてゐたらしい[四〇]。併し平家との和議がまだ熟せず、又法皇を京都から連れ出す策も、種々な故障が起つて、決行する機會に達しない先に、關東の軍は、豫期したよりも早く京都へ迫つて來たのである。

元曆元年正月の初めには、義仲と平家との和睦が略ぼ調つて、十三日には平家の一族が京都へ乘込むことになつたので、義仲は十一日に法皇を奉じて京都を出る手筈になつてゐたが、平家の方から苦情が出て、「法皇を奉じて北陸へ向ふといふやうなこと

は、謀叛の沙汰である、そんな事では和睦の儀も見合はせねばならぬ」と言つて來た。それで十一日の出發は急に中止になつて、楯ノ親忠らを遣つて宇治方面の敵を防がせることになつた。(四一) 併し十三日にはどうしても京都を平家に明渡して、自身は東國の敵に向はねばならぬことになつてゐたが、何かの手違ひから平家の入京は急に延期になつたと同時に、近江へ出して置いた先鋒隊からも報告があつて、義經の軍勢は一千騎ばかりの小勢だと通じて來たので、義仲も幾分氣をゆるして、又もや腰を落着けてしまつた。(四二) けれども東軍が斯うして大軍を近江へ入れなかつたのは、恐らく義仲を油斷させて其の不意を討たうといふ計略であつたらう。十四日になつても、京都には「關東が飢饉のために多數の兵が出せない、で、此度上洛した軍勢も極く少數だ」といふやうな風說が唱へられた。義仲はこんな風說に釣られて、北陸下りの計畫をも斷行せず、僅かの手勢を控へて、一日送りに京都に留まつて居た。すると十五日になつて、東軍は俄かに數萬騎の大軍を近江に進めたので、義仲の前軍は殘らず引上げて京都へ還つて來て、此の趣を報告した。義仲もさすがに驚いて、又もや法皇を奉じて熱田へ向はうとしたが、法皇が御病氣だといふやうなことから、又々模樣替になつて、今井兼平と三郎先生義廣に五百餘騎の兵をつけて、勢多に向はせ、自分は矢張り京都に踏留まつて、院の御所を警固して居た。

其のうちに關東の大軍は、宇治勢多の兩道から京都へ攻上つて來るといふ報告と前後して、十郎藏人行家は、石川判官代義兼の居城なる河內の石川城に據つて、背後から京都の虛を衝かうといふ形勢があるといふ注進に接したので、義仲は更に其の兵力を割いて、樋口次郎兼光を河內へ出發させた。これが一月十七日の事であつた。義仲は百騎ばかりの手勢を京中へ留めて、前軍の戰況の報告を待ちながら、いざといつたら、法皇を奉じて京都を出る準備をして、嚴重に御所を警固させて居たが、義經は湖畔の進擊を節賴の手に委せて置いて、自分は一軍を率ゐて、伊勢國から伊賀大和の間道を進んで、二十日にはもう宇治へ出て、海嘯(つなみ)のやうに京都へ押寄せて來た。義仲は此の時までもまだ〳〵と油斷して居た。片腕とも賴む樋口兼光が歸らない先に、よもや宇治の守備が敗られようとは思はなかつた。宇治の守備が敗れたと聞くと、義仲は狼狽して、法皇の御所へ馳けつけた。其のうちに敵はもう伏見まで進んで來たといふ注進を聞いて、義仲は取るものも取りあへず、再び御所を馳け出した。義仲は僅かの手勢を率ゐて六條河原へ出て、敵の大軍に向ひ、且つ戰ひ、且つ走つて、勢多の手に加はつて、北國路へ落ちるつもりで、近江の大津の邊まで出たが、爰で範賴の軍に馳

け散らされ、最後に今井兼平と只二騎となつて粟津ノ野を落ちるうちに、相摸國ノ住人石田ノ次郎の矢に中つて、三十一歳を一期として命を終つた。兼平は群がる敵と戰つてゐたが、遙かに此の有樣を見て、太刀の切先を啣へながら、飛んで壯烈な最期を遂げた。樋口兼光は行家を破つて廿一日に河内から凱旋したが、淀まで來て昨日の戰爭の模樣を聞き、義仲の戰死を知つたので、討死の覺悟で、京へ入り、義經の郎等と戰つて、武藏ノ國兒玉黨の手で生虜にされた。一月廿六日義仲を始め、高梨六郎忠直、今井四郎兼平、根ノ井ノ四郎行親の首を大路を渡して、獄門の前の木に懸けた。此の時兼光も首の後について、京都を引廻されたが、二月二日五條ノ西朱雀で斬罪に處せられた。

(一)『愚管抄』卷五。
(二)『玉葉』。『保曆間記』。
(三)『玉葉』『壽永二年七月廿六日—八月十四日。
(四)『玉葉』。
(五)『愚管抄』卷五。『保曆間記』。
(六)『玉葉』。
(七)『玉葉』壽永二年八月十四日、十八日。
(八)『玉葉』。
(九)『神皇正統記』等。
(一〇)『日本政記』。竹越氏『二千五百年史』等。
(一一)『大日本史』。
(一二)『源平盛衰記』。
(一三)『玉葉』『壽永二年十月四日、八日、九日。
(一四)『百練抄』第九。『玉葉』。
(一五)(一六)『玉葉』。
(一七)『玉葉』壽永二年十月廿三日、閏十月十二日。
(一八)(一九)『玉葉』。
(二〇)源平盛衰記。
(二一)乃至(二四)『玉葉』。
(二五)『源平盛衰記』。
(二六)『玉葉』壽水二年閏十月廿三日、廿四日、廿七日。
(二七)『玉葉』。『百練抄』第九。
(二八)(二九)(三〇)『玉葉』。
(三一)『愚管抄』卷五。『保曆間記』。
(三二)『源平盛衰記』。

(三三)『愚管抄』卷五。『百練抄』第九。
(三四)乃至(三七)『玉葉』。
(三八)『玉葉』壽永二年十二月二日、十三日、同三年正月九日、十二日、十三日。
(三九)(四〇)『玉葉』。
(四一)『玉葉』元暦元年正月十一日、十二日。
(四二)(四三)『玉葉』。

第三節　一ノ谷の戰の前後

義仲が信濃の高原を下つて、旋風のやうに京都へ驅け上つた時、皮肉な運命の惡戲が、木曾山中の野人を忽ち文明の世界へ引出して、滑稽な悲劇を演ぜしめてゐた間に、

賴朝の朝廷に對する態度

賴朝は何をしてゐたか？　彼れは志水ノ冠者義高を質として鎌倉へ歸つてから、平氏追討の事は安心して義仲に一任してゐたのであらうか？　如何にも、賴朝は一方に於て關東の代官として義仲の上京を認めて居ると同時に、一方に於ては、其の一擧一動に就いて監視の眼を弛めなかつた。壽永二年七月廿八日義仲が京都へ入つた後二日、院議は先づ平家追討の功を論じて、賴朝を第一とし、院ノ廳ノ官中原康貞を鎌倉へ下して賴朝の上京を促した。當時賴朝は、三善康信の通信によつて、便宜を得てゐた上に、齋院次官中原親能も鎌倉へ下つて種々の相談相手になつてゐたので、京都の事情は手に取るやうに分つてゐた。義仲の京都に於ける不人望も、耳に入つてゐたであらうし、義仲と行家との間に軋轢の生じてゐることも察してゐたであらうし、又後に「日本第一大天狗」と諷罵した後白河法皇の性格に就いても、其の用心深い頭腦には、疾うに會得する所があつたに相違ない。彼れは院の使を迎へて、能ふ限り優遇を加へ、巨額の引出物を與へて、京都へ還した、そして其の使に託して、前節に述べた三ケ條の建言を進めたけれども、自分では一歩も鎌倉を出ようとはしなかつた。併し四方山の話の中には、義仲、行家の恩賞を不當とし、「義仲に罪科あらば行家に命じて討たせ、行家に不屈があつたら、義仲に仰せて討たれたら宜しからう」といふやうな意見をも述べたに相違ない。院の使を還した後からは、直ぐに使者を立てゝ、上京の催促に對して延期を願ひ出ると共に、義仲が平氏の追討を急がず、京都に留つて、不當の恩賞に預つて居るばかりか、賴朝に對して敵意を懷いてゐることを訴へて、暗に義仲に對する宮廷の反感を煽つて居る。賴朝の上京を催促する法皇の眞意は、前に清盛を引いて、經宗、維方らを抑へたやうに、又近くは義仲を引いて平家の一門を驅逐したやうに、賴朝によつて義仲を牽制しようといふのである。賴朝の烱眼は勿論此の間の呼吸を會得

んで、却つて法皇と其の周圍の廷臣を利用して、義仲に壓迫を加へようとしたのであらう。彼れは恐らく義仲の運命の永くないことを看破してゐたであらう。從つて敵としてはそれ程恐るべきものとは考へてゐなかつかも知れない。只此の冷靜な政治家の慣用手段であり、又一面には其の成功の祕訣でもあつた、如何な人間でも中々殺さない、極度まで其の力を利用する、そして利用し得る限りは、飽までも隱忍して、胸中では死刑を宣告しながらも、用の濟むまでは殺さずに置くといふやり口、後に義經にも、範頼にも、又其の不俱戴天の敵であつた長田忠致父子にまでも用ひた此の一流のやり口を義仲の場合にも用ひようとした。此の猛牛を屠る前に、其の力を用ひてもつともつと平家の一族を追窮させたい、出來るならば、今暫く京都に猛威を振はせて置いて、自然と自滅の運命に入つて行くのを待たう。平氏の一門が西海に沒落した上は、京都の事は暫く法皇を義仲の交渉に打委せて置いてもいゝ。其の間に充分に根據を堅めて置いて、義仲をも、平氏をも、一擧に破碎する機會を待たうといふのが頼朝の眞意であつたらう。

此の時東國の經營は着々と其の歩を進めて、三河以東は略ぼ其の節度に從つたけれども、關八州の彼方には、藤原秀衡が父祖三代の武威を擁して關東の平野を睥睨んでゐるばかりか、常陸には秀義の父の佐竹隆義が復讐の機會を窺つてゐるし、上野から信濃へかけては、固より義仲の勢力範圍である。一旦歸順はしたものゝ、新田義重の心中もどうして〳〵圖り難い。亂世の習ひとして、群雄の向背、何れか安心のなるものはないが、中にも油斷のならないのは、あの傲岸な上總權介廣常である。廣常は治承四年に隅田河畔で始めて頼朝に見參した時から、頼朝の心に一種不穩な印象を與へてゐた。彼れは佐竹氏とは親族關係があつた。彼れは上總全國に威を振つて、其の兵力は下總の千葉氏を凌駕し、平生から「斯うして關東に居る以上は、指一本でも觸れる者はない。朝廷が何だ？」と豪語してゐた。(二) 又治承五年六月頼朝が納涼のために三浦へ遊んだ折、廣常も頼朝の命に從つて、五十餘人の郎從を連れて、佐賀岡ノ濱へ出て待ち合せた。其の時郎從はみんな馬から下りて沙上に平伏して居たが、廣常だけは、馬上に身を屈めて頼朝の駕を迎へたので、三浦ノ十郎義連が其の無禮を咎めて、「下馬しないか？」といふと、廣常は、「三代の間、如何なる場合にも、下馬の禮を執つたことはない」と答へて終に馬を下りなかつた。(三) 時に觸れ、折に觸れて表れる斯うした言動が、頼朝の第一印象を愈〻濃厚に色づけて行つたに相違ない。彼れは頼朝の胸中で早くから死刑の宣告を與へられた一人であつたらう。

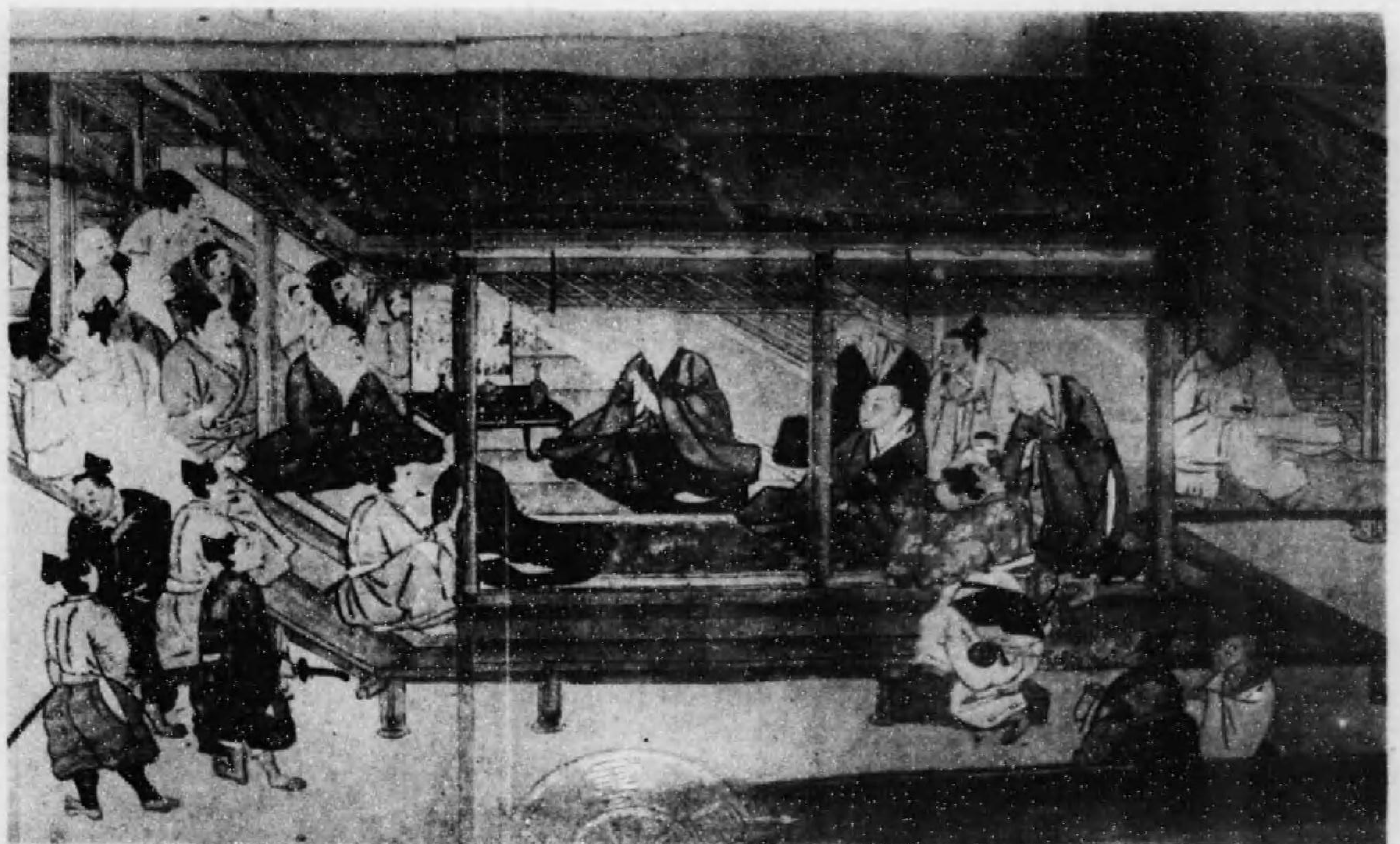
侍所を置く

是より先き治承四年十一月十七日、佐竹氏を征服して常陸から凱旋した日に、頼朝は和田義盛を侍所、別當に補して、家人の進退を掌らせることにした。頼朝が石橋山で敗軍して、身を以て安房へ上陸した當時、義盛は豫て上總介忠清が平家の侍奉行として關八州の武士を監督し、權威を振ふを羨ましく思つてゐたので、話の序でにこの事を言出して、「他日平家を亡して、本意を遂げた曉には、義盛を日本國の侍の別當にしていただきたい」と望んだことがあつた。頼朝は其の時の約束を忘れずに、侍所を設けると同時に、義盛を別當に任じたのである。此の時から鎌倉の軍政は次第に組織的になつて、諸國の家人の統御の上にも一段の進歩を見たに相違ない。けれども愈、東國の勢力を擧げて西に向はうといふ場合には、更に一層の用意が必要であつた。

頼朝の動かざる理由

此の點から觀察して、頼朝が法皇の催促を受けても、容易に動かなかつたのは、理由のあることだといはねばならぬ。鎌倉を出たら、義仲と衝突する覺悟でなくてはならない。義仲は頼朝が若し上洛したら途中で邀擊しようといつて、京都に留つて戰爭の用意をしてゐた。又頼朝が若し上京したら、秀衡、隆義が、鎌倉の虛を衝く惧れがあるといふのは、單に頼朝の遁辭ばかりとはいはれない。現に閏十月の初には頼朝は既に鎌倉を進發して、精兵五萬騎を率ゐて、遠江まで來たが、藤原秀衡が數萬騎を引

[illegible]



率して白河關を出たと聞いて鎌倉へ引返したといふ風聞さへあつた。(四) 京都の上下は、救濟者の出現を望むやうな熱望を以て、頼朝の入京を期待してゐたにも拘らず、頼朝出動の噂ばかりが頻々と傳へられて、噂の本尊は一向に動く樣子もなかつた。

法皇との交渉

法皇は使者に立てた康貞が、九月の末に鎌倉から歸つて、頼朝の急に上京しない事が分ると、十月九日には先づ頼朝の官位を元に復し、折返して康貞を鎌倉へ下し、義仲に上野、信濃の兩國を與へて、北陸を押領させないといふ條件で、頼朝と和解させようとした。法皇の意中は、これによつて頼朝上洛の故障を除いた上に、この二人を操縱して、互に牽制させようと云ふのであつたらう。この使は十一月の十一日に歸京し、其の後から送つた第二の使者も、引續いて鎌倉から歸つて來た。この時の頼朝の返事はよく分らないが、八ヶ國の正税官物を護送させるといふ名義で、中原親能に副へて鎌倉を出發させた頼朝の代官義經は、十一月の七日にもう近江に入つてゐるし、(五) 又この前後から法皇の義仲に對する態度が、俄かに强硬になつた所なぞから推察すると、頼朝の返事も略〻想像される。

機會の到來

拔目のない頼朝は、義經をして義仲の運動を監視させて置いた一方には、いふまでもなく八方へ手配をして、關東の背面には一々に駄目を押して置くと共に、家人の間に

は一層結束を堅めるやうな手段を盡したことであらう。上總權ノ介廣常が謀叛の嫌疑を受けて誅せられたのも、此の時であつた。代官として義經を選んだのも、強ひて忖度すれば、從來の關係を利用して、秀衡を牽制するためであつたとも言へよう。さうかうする間に十一月十九日の政變となつた。この變報は遲くも十二月の初には鎌倉へ達したであらう。頼朝の待設けた機會は思つたよりも早く到來した。義仲は蓦直に破滅の淵へ跳込んで行つた。彼れの叛逆は明白な事實として公衆の面前に發表された。彼れを討つは朝敵を討つのである。頼朝はこの正義の名を攫んで立つた。彼れが坐ながら關東を鎭壓し、六萬の大兵を西に送つて、一擧に義仲の勢力を粉碎したのは、當然の成行といはねばならぬ。

義經範頼の入京

元暦元年正月二十日、東軍は二手に分れて宇治、勢多の兩道から京都へ迫つた。蒲ノ冠者範頼は武田、一條以下の甲斐源氏、千葉介常胤の一門を始めとし、三萬餘騎を率ゐて、東海道から勢多へかゝり、九郎義經は一門の安田義定、田代信綱を始として佐々木の一族、和田、三浦、土肥、梶原以上の相模武士、畠山、河越、平山、熊谷以下の武藏武士を中堅として、總勢二萬五千餘騎、伊賀路を廻つて、間道から宇治へ現れた。宇治河の固めが先づ破れて、義經の軍は潮の如く京中へ侵入した。義仲が周章狼狽して、北國路を差して逃走すると、義經は入替はつて法皇の六條殿へ馳せ參じ、河越太郎重頼、同小太郎重房、佐々木ノ四郎高綱、畠山ノ次郎重忠、澁谷ノ庄司重國、梶原源太景季等と法皇の御所を警衛した。程なく範頼の軍も義仲の最期を見屆けて、勢多の方面から入京した。

平家追討の院宣

翌日法皇は、攝政師家の氏の長者を止めて、基通を元々通り攝政に復すと共に、左大臣以下の廷臣を召して、平家の追討、頼朝の賞、それから頼朝の上京を促すかどうかといふ事なぞに就いて議定させた。此の時平家追討に關しては、別に勅使を差副へてやつて、三種の神器を奉還させるやうにしたらどうかといふ案があつて、廷臣の間には贊否區々であつたらしい。中にも右大臣兼實の如きは、この案に反對して、「神鏡劍璽の安全を謀るならば、暫く追討を見合せて、勅使を以て穏便に平家を諭し、頼朝にも勅使を立てゝ、此の仔細を言つてやつたらいゝでせう。追討使に勅使を副へてやるといふことは、甚だ理由がない」と主張した。(六) 併し法皇の近臣には、平氏追討を主張する者が多く、左大臣經宗も此の說に贊成し、法皇の心もこれに傾いてゐたので、遂に此の月廿六日を以て、頼朝に宣旨を下して、平家を追討させることになつた。(七)

平家の東進

一方に於て平家の形勢はどうかと見ると、水島の海戰以來、著々瀨戸内海の經營を進

め、西は彦島に據つて、其の海口を扼し、藤戸、田ノ浦、下津井、屋島に根據を置いて、中國、四國の地を經略し、十一月廿九日に行家を室山に破つて、備前、播磨を恢復した後は、その先鋒は進んで攝津に入り、尙ほ一部隊は丹波へ入つて、義仲の兵と衝突するまでになつた。(八) 同時に能登守敎經は頻りに海上で活動し、四國を平定した勢を東に向けて、淡路の源氏淡路ノ冠者義嗣、掃除冠者義久を攻め殺し、尋いで義嗣に黨した淡路の豪族安摩六郎宗益が、竊かに兵を引いて上京しようとしたのを要擊して、西ノ宮の冲で打破つた。宗益は紀伊を指して逃げのび、吹井ノ浦へ着いて、紀伊の豪族園部ノ兵衞重茂と兵を合せて上京しようとしたが、敎經は紀伊へ向ひ、園部の館を攻落した。(九) 斯うして瀨戸內海の海權は、全く平氏の手に歸したので、壽永三年正月八日には福原の舊都へ入り、(一〇) 一ノ谷に城を構へ、兵船を和田ノ泊に置いて、海陸の防備を修め、義仲の首が京都の大路を渡された正月廿六日には、安德天皇も亦た屋島の行宮を發して福原へ遷つた。けれども福原の內裏は先年海へ向ふ時に、火を放つて燒き拂つたので、この時は御所の用意もなかつたものと見え、主上を始め、二位ノ尼以下の供奉の人々は船を家として海上に浮び、二月四日は丁度淸盛入道の一廻忌に當つたので、船中で佛事を營んだ。(一一)

朝廷と平家

源平兩軍の兵勢

是より先、朝廷ではどうして神器を無事に取返さうといふ考から、幾度ともなく院宣を送つて、天皇と神器とを京都へ送り還すやうにと催促し、例の慣用手段で、一方には義仲に平家追討を迫りながら、一方では平家と和睦をしたいやうな態度を取つて、頻りに平家を京都の近くへ引寄せるやうに努めたらしい。これは言ふまでもなく、兩虎を相戰はせて、互に牽制させ、一方では唆しかけながら、一方では宥めるやうな樣子を見せて、双方を操縱して行かうといふので、賴朝と義仲の間にも、之と同一の手段を弄してゐる。義仲も最初は無論之に反したであらうが、水島の敗戰後、特に鎌倉の壓迫を感じて來てからは、自然と平家との和睦に心を引かれるやうになつたらしい。(一二) こんなことで、平家も半ばは警戒しながらも、半ばは甘言に誘はれて、次第に京都近くへ歸つて來た。壽永三年の春に入ると、京都では愈〻平氏の一門が入京するといふ風說が、頻々と傳はるやうになつた。(一三) 公卿諸臣特にも院の近臣の中には平家と書信を往復する者も多かつたらしい。

關東の軍は一月廿九日に京都を出發して、一ノ谷に向つたけれども、(一四) 京都では何故か平家の勢を過大に見積ると同時に、關東の軍勢を過小に見て、寧ろ戰局を悲觀してゐた風があつた。(一五) 併し事實は之に反して、當時平氏の兵は二萬騎を超ゆること多から

一ノ谷の要害

す。(一六) 源氏の勢は、大手から生田に向つた範頼の兵が五萬六千騎、搦手から一ノ谷に向つた義經の兵が二萬餘騎と注されてゐる。(一七)

この時平家の立籠つた一ノ谷の要害を見ると、この地は攝津ノ國と播磨との境にあつて、生田の森を東の城戸口とし、一ノ谷を西の城戸口とし、一ノ谷の險に據つて城を構へて居た。東西三里に亙つて、須磨、板宿、福原、兵庫、明石、高砂などを其の中に取籠め、北は山の麓、南は海の汀、陸には此處彼處に堀をほり、逆茂木を引き、二重三重に櫓を搔き、垣楯を構へた。

一ノ谷東軍進路圖

一ノ谷の包圍

義經を大將とし、武藏、相模の武士を中堅とした搦手の軍は、北方から迂回して丹波路にかゝり、龜岡篠山を過ぎて二月五日の夜攝津、播磨、丹波三國の境に當る三草山の麓に着いて、東の山口に陣を取る。(一八) 是より先、平家方では源氏の軍が丹波路へ廻つたと聞いて、新三位ノ中將資盛、小松ノ少將有盛、備中守師盛に七千餘騎を與へて、三草山の西の山口を固めさせた。兩軍は三里を隔てゝ陣を取つたが、この夜義經は田代信綱、土肥實平の議を用ひて夜襲を仕掛け、敵の不意を討つて一戰に駈け破つた。平家方では三草山の固めが破れたと聞いて、急に能登守教經を山の手に向けて、越中前司盛俊と共に、三草山から兵庫に通じる山手の街道を守備させた。義經は兵を二手に分けて、一軍は田代信綱、土肥實平を將として、三草山から西方に迂回して一ノ谷の西ノ城戸に向はせ、自身は七十餘騎の勇士を選抜して、間道から一ノ谷の後ノ山へ出た。(一九) 一ノ谷の後山は一帶に鵯越と呼ばれ、「道がせばまつて大鳥は羽をのばすことが出來ないので、「ひよ鳥ごえ」の名がある」(『兵庫名所記』) と言はれる程有名な難所である。傳說に據れば、義經が此の嶮岨へかゝつだのは二月六日の夜であつた。義經は先づ山の案内を知つた者を尋ねて、鷲尾三郎經春といふ一人の少年を得た。(二〇) 六日の月は早く山蔭に入つて、星を流したやうな闇の中を案内者の導くまゝに、夢のやうに辿つて行く中に、二月七日の曉方近くなつて、城の後鵯越の山上へ出た。見渡せば、淀の河尻、大物が濱、難波の浦、昆野野、打出の濱、西の宮、葦屋の里は、まだ曉の靄の底に眠つて

南には淡路島が黑く浪に浮び、生田ノ森から明石の浦へかけて、平家の陣の篝火は星のやうに續いて居る。この時には範頼の軍は、昆野野へ着いて、生田ノ森と相對して陣を取り、田代、土肥の軍は一ノ谷に近い鹽屋へ着いて夜の白むのを待つて居た。源氏方では豫て七日の卯の時(午前六時)を以て箭合せの時刻と定めてあつたので、六日の晩には既に一ノ谷包圍の準備が出來てゐたのであつた。

平家方の油斷

翻つて平家方の防備を見ると、新中納言知盛、本三位中將重衡は、東の城戸口を固め薩摩守忠度は、筑後ノ守貞能、伊賀平内左衞門家長を率ゐて西の城戸口を守り、越前ノ三位通盛、能登守教經、越中ノ前司盛俊は、山ノ手に向つた。東西の城戸口には、濠を掘り、逆茂木を引き、城戸の上には櫓を二重に搔き垣楯を竝べ、矢狹間を開いて敵の寄せるのを待つて居た。只爰に見のがすことの出來ない一の事實は、一ノ谷の總攻擊の前日卽ち二月六日に、修理權大夫某といふ者が書を宗盛に送つて、「和睦の事で、來る八日に京を出て、法皇の使として下向する筈になつて居る、勅答をいたゞいて歸參するまでは、狼藉のないやうにと、關東の武士らにも言ひつけてあるから、そちらでも一同に此の趣を言含めて置くやうに」と言つて來たといふことである。後になつて、宗盛は重衡の書面に對する返書の中に、この事實を記して、「だから當方では初から一同に戰意がなく、院宣使の下向を待ち受けて居ると、七日になつて關東の軍が不意に襲擊して來たので、思ひがけない敗軍をした。全體これはどういふ譯だつたのか？　院宣の事を東軍には通じてなかつたのか、院宣は下したが、武士らが從はなかつたのか、若くは當方に油斷をさせるための計略であつたのか。一向に不審が晴れない。將來のために其の仔細を承りたい、云々」と反問してゐる程で、この和睦の一條が、平家方の志氣に影響したことは事實らしい。併しこの院宣の眞意に就いては、二種の解釋が容れられる。卽ち平家の推測通り、全く法皇の計略で、平家方の勢が侮り難いと見て、特更に油斷をさせて、まんまと一杯食はせたのだといふ解釋と、朝議は一たび追討と決しながらも、法皇はなほ神器の事を心にかけて、院使を下して源平二氏の講和をさせようと思つて、姑く兩軍の妄動を禁じようとしたのであるが、騎虎の勢で奈何とも出來なかつたのだといふ解釋である。權謀術數に長じた後白河法皇の性格からいふと、第一の解釋も決して不可能ではないが、更に推測すれば、平家方から見れば、如何にも法皇の術中に陷つて、不意を討たれたことになるのだが、法皇の心中では、最初から平家を追落さうためではなく、寧ろ形勢を觀望して、都合のいゝ方へ轉ばうといふ例の慣用手段を用ひたに過ぎないのではなかつたらうか？それは前に述べたやうに

總攻撃

當時京都の人々が平家の勢力を過大に見積つて、一般に戰局を悲觀してゐた結果、若し七日の戰爭が東軍の敗北に終つた場合には、平氏を宥めて京都へ入れるための豫防線を張つて置いたのだとも解釋されない。東軍に對して追討を促した事實は、必ずしも平家の滅亡を希望した證據にはならない、寧ろ源平兩氏を操縱して、互に牽制させて行く方が便利でもあり、法皇の眞意にも近いのではないのではないか？　それはこの以前にも密々に平家と和睦の議を進めながら、一方義仲に對しては頻りに追討を迫つたり、義仲と賴朝との仲を割きながら、兩方の和睦を提議して見たりする從來の遣り口から見ても、略ぼ推察されようと思ふ。

さて七日の總攻撃は熊谷次郎直實、同小次郎直家、平山武者所季重等が、夜中窃かに義經の陣を脱して、一ノ谷の城戸口へ拔驅けして、先陣の名乘りを揚げたのに初まつて、生田ノ城戸口では、梶原平三景時、同源太景季、同平次景高が先陣に進んで攻めかゝつた。

かれこれする中に七日の夜は明けた。義經は寅ノ刻（午前四時）に一ノ谷の後ろ鵯越へ向つて、辰の半（午前七時）に一ノ谷の上鉢伏と蟻の戸といふ所まで來ると、軍はもう眞盛りであつた。喚き叫ぶ聲、射違ふ鏑の音、山を穿ち、谷を響かし、波の音に和して物凄く聞えた。

鵯越の奇襲と平家の屋島落

今に至るまで我が國の熱血を躍らせるあの鵯越の强襲は、義經の膽略と東國武士の精鋭とによつて敢行された。勝敗はこの奇襲によつて決した。最初から戰意のなかつた平家の將士は、この意外な背面攻撃に遭つて、忽ち其の根據地を奪はれ、混亂して四方へ敗走した。馬に策つて一ノ谷の城を落ちる者もある、船に乘つて海上へ逃げのびた者もある、踏止つて奮戰した勇士もある、船に乘り後れ討たれた者もある、船に乘らうと思つて海に溺れた者も少い數ではなかつた。宗盛は主上及女院に供奉して、和田の海上から軍の模樣を窺つてゐたので、戰利あらずと見ると、再び海上を屋島の行宮へ引返したが、通盛、忠度、經俊、知章、敦盛、業盛、經正、師盛、盛俊を始めとして、一千餘人は戰陣の間に命を殞し、三位中將重衡は梶原景時に生虜られた。

戰鬪時間

戰爭は卯の時（午前六時）から巳の時（十時）に亙つて、二時（四時間）の間に平家は一ノ谷を追落され、午の刻（十二時）には全く陸上から掃蕩された。

平氏諸將の梟首

平家は再び海に浮んで去つた。さて陸上の根據地は奪つたが、元來水軍を有たない東軍は、見す〳〵敵の退却するの見送りながら、どうすることも出來なかつた。範頼、義經は卽日飛脚を立てゝ、京都と鎌倉に戰爭の經過を報告し、義經は九日に先づ京都

神器奉還の辭退

へ入り、法皇に奏して、平氏一門の首を京都の大路を渡して、獄門に梟すことを願つた。この時法皇は攝政、左右大臣、内大臣の意見を召されたが、何れも「平家は王室の外戚として久しく朝廷に仕へて高位高官に列つてゐた者である、公卿廷臣の首を大路を渡して、獄門に懸けることは、先例のない事である」といふ理由で、この奏請に反對した。中にも右大臣兼實は、さういふ事は、徒らに平家の怨を募らせて、愈〻神器の歸還を困難ならしめるものだと言つて極力反對したけれども、結局範頼、義經の強請を斥ける力がなくて、其の奏請を許可することになり、十三日平氏一族の首を渡して八條河原に向ひ、名字を注した赤簡を付けて獄門の樹に梟した。

朝廷では折角京都近くまで引寄せた平家を、また逃がして、再び神器を取戻す機會を失つたので、今度は今更に一ノ谷の捕虜の大將重衡を利用して、宗盛に諭させようといふことになつて、二月十四日藏人右衛門ノ權ノ佐定長に命じ、重衡を故中御門中納言家成卿の八條堀川の堂に召して、院宣の趣を傳へさせた。それは宗盛に使を送つて、安德天皇及三種の神器を都へ還すやうに取計らつたら、重衡の死罪を宥さうといふのであつたらしい。重衡は成功は覺束ないとは思ふが、兎に角院宣の趣を通じて見ようとお請をして、二月十五日に左衛門ノ尉重國といふ郎從を屋島へ下向させた。(二五) 宗盛は一族を集めて評議を開き、斷然神器の奉還を辭退することに決したので、神器を取戻さうといふ折角の計畫も殆んど水泡に歸した。

(一)『東鑑』卷三。
(二)『愚管抄』卷六。
(三)『東鑑』卷二。
(四)乃至(八)『玉葉』。
(九)『源平盛衰記』。
(一〇)『百練抄』第十。
(一一)『東鑑』卷三。
(一二)『玉葉』。
(一三)『玉葉』壽永三年正月廿八日、二月十一日。
(一四)『東鑑』卷三。『玉葉』。『百練抄』第十。
(一五)『玉葉』壽永三年二月二日、三日。
(一六)『玉葉』。『歷史地理』所載、大森氏『一ノ谷の戰についての研究』。
(一七)(一八)(一九)『東鑑』卷三。
(二〇)『源平盛衰記』。
(二一)『東鑑』卷三。
(二二)『歷史地理』所載、大森氏『一谷の戰についての研究』。

(二三)三浦氏『鎌倉時代史』。
(二四)『玉葉』。『平家物語』。『東鑑』卷三。
(二五)『東鑑』卷三。『玉葉』。

第四節　海の平家と陸の源氏

一ノ谷の落城と共に、平家は再び天皇と神器とを奉じて海上に去つた。朝廷では又もや平家を逸して神器奉還のことはいよ〳〵望が遠くなつた。之と同時に法皇は愈、頼朝に秋波を送つて、一ノ谷の戰後幾ばくもなく、頼朝の信任薄からぬ中原親能を御使として鎌倉に向はせ、重ねて頼朝の上京を促し、頼朝が若し上京しなければ、法皇自ら東國へ御幸しようとまで言つてやつた。(二)この使と行違ひに頼朝は鎌倉から飛脚を立てて、家人に對して京都の警固を手落のないやうにせよと嚴命し、又梶原景時、土肥實平等に命じて、播摩、美作、備中、備後の五ヶ國を守護させた。(三)是れ所謂近國總追捕使で、莊園に於ける武士の不法を禁ずるといふ名目の下に、先づ是等の地方から平家の勢力を驅逐しようとしたのである。續いて廿五日には封書を院に上つて、政務の意見を陳べた。其の中の一條には、「畿内近國の武士を義經の下知に任せて、平家の追討に向はせるやうに院宣を下されたい。但し勳功の賞は追つて頼朝から奏請する」といふことがあつた。この頃はまだ義經と頼朝との間には意志の疎隔がなく、却つて範頼は去年征討の軍を率ゐて上京した時、尾張國墨俣川で、先陣の事から家人と爭鬪したといふ廉で頼朝の譴責を蒙つたので、一ノ谷の戰が終ると一旦鎌倉へ歸つて、謹慎を表して、百方兄の心を和げようとしてゐた時であつたから、(三)自然に平家の追討の全權を義經の手に委ねることになつたのであらう。三月には九州の武士に書を下して、「早く鎌倉の家人となつて、平家の追討に從ふに於ては、本領を安堵し、勳功ある者には賞を與へようといひ、又四國の中でも土佐の豪族は平家に背いて鎌倉に心を寄せるものがあつたので、北條時政に命じて、平家の追討に力を合すやうに勸誘させた。(四)頼朝は斯うして平家追討の準備に心を奪はれて、法皇の懇切な催促を受けながらも終に鎌倉を離れることが出來なかつた。そこで朝廷では三月廿七日の除目に、義仲追討の賞として頼朝を從五位下から進めて正四位下に叙した。この時又頼朝を征夷大將軍に任じようといふ意見も出たが、これは坐なながら將軍の宣下を下した先例がないからといふ反對が出て沙汰やみになつた。(五)

この間に土肥實平は板垣兼信らと共に、三月八日に京都を出發して西國に向ひ、其

一ノ谷合戰後の頼朝

東軍の動靜

月の末には備中に入つて、國務を處理して居たが、四月廿九日には中原親能を京都へ上し、西海奉行として平家追討の軍務に當らせることにした。親能は土肥實平、梶原景時等と共に西に進發して、豫め兵船の準備を整へて置き、海上の平穩な六月の候を期して敵と會戰する手筈であつたが、戰備は捗々しく進まなかつたものと見えて、六月が過ぎ七月が過ぎても東軍は容易に動く風もなかつた。八月に入つて頼朝は範頼を平家追討使として鎌倉を出發させ、行く〳〵山陽を經略し、九州に入つて平家の後援を絶ち、又後段に述べるやうに、九州の水軍を語らつて平家の根據地を覆へさうといふ策を授けたが、爰にも亦樣々な障碍が出來て、翌年の春になるまでは、戰らしい戰をもする機會が來なかつた。

これは主として戰局の性質が一變して、陸上の雄者たる東軍に不利な形勢を現出した結果であつた。この以前破竹の勢を以て京都へ入つた義仲が、平民を西海に逸し去つた以來、殆んど陸上に立竦んで、糧食の道を絶たれ、結局連戰連敗の憂目を見て自滅するに至つたのと同じ樣に、義仲を破り、一ノ谷を陷れるまでは、とん〳〵拍子に進んで來た關東の騎兵も、馬を瀬戸内海の岸に立てゝ、空しく敵の帆影が波の彼方に消えて行くのを眺めると共に、張詰めた氣も一時に弛んで、この大自然の障壁の前に膝を屈しない譯には行かなかつた。彼等はハンニバルの襲擊に苦められた羅馬人と同樣に、何よりも先に兵船を得なくてはならぬ。併し正盛以來三代の功を積んだ瀬戸内海の經營の效果は、この時に現れて、東軍が一隻の船艦をも有たなかつた際に、西軍は完全に内海の海權を握つて居た。東軍は此の點に於て第一に不利の地位に立つてゐる。第二に瀬戸内海の兩岸は、平家に取つては多年其の勢力を扶植した地であるが、東軍に取つては全くの不案内の地である上に、其の根據地たる關東を距ることが遠いため、糧食の輸送に困難を感じるのは知れきつた話である。特に此の際東軍に取つて不便を感じたのは、以仁王の舉兵以來、平家は諸國の源氏を征討するために、兵亂米と名けて、諸國の公田莊園から軍費を徵收し、義仲も其の例に倣つて、共に天下の人望を失つたが、頼朝は人心を收攬する必要から、此の課稅を停止することを奏請したので、元暦元年二月廿二日の宣旨で、五畿七道の國司に命じて兵亂米の徵發を停止させたことである、之がために東軍は自繩自縛に陷つて、平氏追討軍の兵粮も、大部分は關東から輸送しなければならないことになつたが、制海權を有たない東軍として、此の輸送に苦んだ有樣は、範頼がまだ九州へ入らない先に其の將卒の中には、脫走を企てる者が多かつたといふ事實を見ても推察される。

範頼の西向

頼朝は固より是嶋の困難を豫期してゐたであらう。彼れは其の性來の忍耐と熟慮とを以て、着々と陸上の經略を進めて行つた。山陽の諸國を鎭撫し、兵船を調へる命を受けて先發した土肥實平、梶原景時、中原親能らの先鋒は、既に備前備中を定めて、六月には備後まで下つてゐたが、この時新中納言知盛は長門の廣島に據り、九州の兵を以て、門司ノ關を固め、宗盛は讃岐の屋島を根據地として、內海の東方を經營し、制海權は依然として平家の手に握られてゐたので、東軍の先鋒は屋島の對岸まで進みながら、海を渡つて敵に向ふことが出來なかつた。其の間に平氏の軍は、其の海上權を利用して、海岸に攻め寄せ、敵の不意を襲つて、東國の武士を惱ましたことであらう。神經過敏な京都人の間には、早くも平家が勢を恢復して、捲上重來の勢で攻上つて來るやうな風說が傳はつた。土肥實平らの軍は、平家と戰つて、備後から驅逐された、梶原景時はこの報を聞いて、播磨から備前へ入つたが、平家の一軍は其の隙に乘じて播磨の室ノ泊に上陸し、火を放つて燒拂つたので、俄かに京都から兵を送つた、といふやうな噂も傳へられた(八)、こんな有樣で、豫て合戰の期と定めた六月が過ぎても、進擊の準備は少しも捗らないのを見て、頼朝も愈〻持久の策を決したらしく、今迄は糧食の輸送其他の關係を顧慮して、大兵を繰出すのを躊躇してゐた彼れも、八月に入ると、

東軍の作戰計畫

範頼を平家追討使として西海に發向させた。範頼はこの以前頼朝の譴責を受けて、一ノ谷の戰後鎌倉へ歸つてゐたが、三月六日になつて漸く其の譴責を宥され、六月五日には兄の奏請によつて三河守に任命され(九)、是に至つて追討使の大任を拜することになつたのである。其の六日頼朝は三河守範頼、足利藏人義兼、武田兵衞ノ尉有義の三人を招き、千葉常胤、三浦義澄、和田義盛、北條義時以下此の度の遠征に從ふ主な御家人をも列席させて、終日餞別の宴を開き、散會の時には銘々に馬一匹を賜ひ、範頼には特に祕藏の名馬と甲一領を副へて賜はつた。八日範頼が從兵一千騎を率ゐて鎌倉を發した時には、頼朝は稻瀨川の邊に棧敷を造つて、一行の行裝を見物した。範頼は廿七日京都へ入り、廿九日追討使の官符を賜り、九月二日を以て西海に向つた(一〇)。

此の時鎌倉の策戰は、先づ東國の兵を以て陸上から山陽道を經略し、海峽を越えて九州に入り、次第に陸上の根據を奪つて、平家を海中に孤立せようといふのであつた。これがために頼朝は溫厚な範頼を勵まして、平家の多年の勢力範圍なる安藝以西に强行させた。追討軍は十月を以て安藝へ入り、十一月には進んで周防の地へ入つたが、此の時周防の內藤六、長門の郡東、郡西、厚狹の諸族は、平家の身方として赤間關を固めてゐたばかりか、平家の將左馬ノ頭行盛は、五百餘騎を率ゐて備前の兒島に據り、

廓城を構へて東軍の連絡を脅かしてゐたので、範頼の軍は早くも兵粮の缺乏を告げ、將士らの意氣沮喪し、懐郷の情に驅られて、脱走を企てる者が過半に及んだ。けれども範頼には、斯ういふ境遇に臨んで將士の心を勵ますだけの機略がなかつたので、殆んど周章狼狽して、十一月十四日に飛脚を鎌倉へ發して、この苦境を訴へて來た。この書面に答へて、頼朝が範頼に送つた返書は、當時の關東の策戦と頼朝の面目を活躍させて居る。(一一)焦慮るな、失望するな、飽までも忍耐して、平家の殲滅を期せよ、將士の和合に心を用ひよ、よく〳〵西國の人心を收攬せよ、東國の兵を以て陸上を固め、九州の兵船を以て屋島を攻めさせよ、天皇を始め、女官達には呉々も恙ないやうに一同にも申付けよ、又二月十日頃には兵糧と兵船を送るからそれまで辛抱せよ、豐後の船を手に入れるやうに努力せよ、これが頼朝の方略であつた。彼れは海軍の應援を有たない遠征軍の困難を知り抜いてゐたので、此度の戰爭の祕訣は九州の水軍を懐柔することにある、東國の兵を以て四國を包圍し、九州の水軍を以て敵の根據地を衝かせるとすれば、殘る所は時間の問題だ、と信じて居た。頼朝が遠隔の地にありながら、如何に九州の水軍に着目し、其の向背に焦慮してゐたかといふことは、範頼に令して、「土肥ノ二郎、梶原平三と相談して、九州の武士を招き、歸服しさうな形勢が見えたら、九州へ渡るべし、其の見込がつかなかつたら、九州には兵を入れずに、直に四國へ渡つて平家を攻めよ」といひ、(一二)又伊澤五郎から、「九州を攻めようと思つても、船がなくて海を渡れない、又飢饉のために長門に留れないから、安藝ノ國へ引返さうと思ふ」といふ書面を受取つた時にも、「九州を攻めるといふことは、目下の場合では宜しくない、先づ四國に渡つて、平家と合戰を遂げよ」といふ返事を出してゐるのを見ても推量される。(一三)曾て平家の一門が都を落ちて、西海の波に浮んだ時、其太宰府を攻めて平家を九州の地から逐出した者は、豐後の豪族緒方維義であつた。頼朝が緒方の一族に最初から望みを繋いでゐたことは、見易い道理である。彼れは範頼に對して豐後の船を手に入れよと命じると共に、鎮西九國の住人に與へて、朝廷征討に加勢せよといふ下文を發し、同時に院廳の下文を奏請して、豐後ノ國の住人の忠勤を勵まして居る。

一方又粮食が盡きて、家人等の心が離反し、歸國の念が將士の間に漲つてゐるといふ情報に接しては、範頼を始め軍中の家人に懇ろな書面を與へて士氣を鼓舞し、「今度の合戰を遂げずして京都へ歸つたら、何の面目があつて、人に顔を合せようぞ。兵粮は直に送るから、暫く忍耐せよ、平家は故郷を出て、異郷の空にありながらも、軍備を盛んにしてゐるではないか、況して追討の任を受けながら忠勇を抽んでないといふ

ことがあらうか！」といつて、且つ慰め、且つ勵まして居る。(一五)

元暦二年正月になつて、範頼の軍は周防を發して長門へ入り、赤間關近くまで進んだには進んだが、海峽を隔て九州の地を望みながら、船のないために向ふへ渡ることが出來ない、空しく敵地に日を送つて居る間に、一方ではもう糧食の供給が絶えた。これでは如何に東國の勇士でも戰爭をする譯には行かなくなつた。侍所ノ別當和田義盛を筆頭にして、陣中の將士が懐鄕の情に驅られたといふのも無理はない。斯ういふ形勢に遭つて範頼は餘儀なく周防へ退却し、再び急使を發して窮狀を鎌倉へ訴へると共に、一方では豐後の臼杵二郎惟隆、緒方三郎惟榮の兄弟には使を送つて應援を求めた。此窮策が幸に成功して、同二十六日惟隆惟榮は命に應じて八十二艘の兵船を送り、又周防ノ國ノ住人宇佐那木上七遠隆は、兵粮米を獻じたので、範頼は頼朝の豫ての注意に從ひ、三浦義澄を周防に留めて京都及關東との連絡に備へ、全軍海を渡つて、始めて九州の地へ入つた。(一六) 二月一日平家の黨太宰少貳原田種直、子賀摩衞兵尉は兵を出して東軍を筑前の葦屋浦に迎へ戰つたが、渋谷庄司重國、下河邊庄司行平らが奮戰して種直父子を破つた。斯うして遠征軍は海峽の對岸に足掛りを得て、頼朝の胸に描かれた屋島包圍の計畫は、略ぼ實現された。併し筑前の原田、山鹿、肥後の菊地、肥前の松浦黨は、依

然として平氏に身方してゐるし、知盛は長門の兵船を率ゐて廣島を固め、兵を分つて周防の大島に據り、周防灘を扼して、東軍の退路を絶つてゐるから、遠征軍の境遇はまだ決して安全とはいはれない。其の上九州へ足を入れたのはよかつたが、さて上陸して見ると、こゝは敵地に近く、人民は東軍を恐れて四方へ逃亡したので、糧食を徴發する便がなく、又しても飢餓に迫られて、和田の一族を始め工藤祐經に至るまで歸國を願ひ出る程の窮境に陷つた。(一七) 頼朝は、範頼を初め出張の諸將から櫛の齒を引くやうな注進を受けて、兵船三十二艘に、兵粮米を積んで、三月十二日に伊豆ノ鯉名ノ沖、及妻郎ノ津を出發させたが、勿論急場の間には合はなかつたであらう。只一つ幸ひなことは此前年の暮に、佐々木三郎盛綱が頼朝の命を受けて、備前ノ兒島に向ひ、十二月七日郎從六騎と共に、藤戸ノ海路三町餘を乘切つて、一舉に其の城を奪ひ、左馬頭行盛を擊退して、山陽道の連絡を通じたことであつた。此の時頼朝が感狀を盛綱に與へて、「昔より河水を渡すの類有りと雖も、未だ馬を以て海浪を凌ぐの例を聞かず、盛綱が振舞希代の勝事なり云々」と賞揚してゐるのを見ても、この一戰の效果が如何に重要に視られたかゞ推察される。

(一)『玉葉』。

(二)乃至(六)『東鑑』卷三。
(七)『東鑑』卷四。
(八)『玉葉』壽永三年六月十六日、廿三日。
(九)『東鑑』卷三、壽永三年五月廿一日、六月廿日。
(一〇)『東鑑』卷三、壽永三年八月六日、八日、九月十二日、卷四、元暦二年正月六日。
(一一)(一二)(一三)『東鑑』卷四。
(一四)『東鑑』卷四、元暦二年正月六日、三月廿九日。
(一五)(一六)(一七)『東鑑』卷四。

第五節　義經の躍進

一ノ谷の戰後、範頼が九州の一角に脚を立てて、陸上から四國を包圍する形勢を形造るまでに早くも一年を經過した。此の一年の間に一方の大將として敵に向ふべき義經は何をしてゐたか？　彼れは一ノ谷の戰後、兄の範頼を越えて平家追討の大任を命ぜられ、畿内、近國の武士を統轄する權を賦與せられ、頼朝の代官として京都に留つて居た。壽永二年の末までは京都人の間にその名をさへ知られなかつた彼れは、前後二回の戰捷によつて、何事にも驚き易い都人士の驚嘆の的となつた。彼れは頼朝の弟と

して、關東の代官として、假に其の赫々たる武功がないとしても、廷臣の間に歡迎されるべき充分の資格を具へて居た。新し物好きの法皇が、此の若い、然かも華々しい功名に飾られた武人を見のがす筈はない。曾て清盛を引き、義仲を引き、行家を引き、又頼朝を引寄せようとした法皇の魔手は、忽ち此の二十六歳の青年將軍の上にのびた。彼れは京都の警衛を委託され、法皇に近づき、院の近習と親んでゐる間に、知らず知らず、古い都會の空氣に感染して、何人も陷り易い誘惑に引込まれて行つたに相違ない。賢明とはいへ、まだ經驗に乏しい、年少氣鋭な彼れとしては、周圍の讃歎と迎合に逢つて、赫々たるその武功に多少は醉心地にもなつたらう。心あつて法皇の魔圈を遠ざからうと努めてゐる頼朝の目には、此の美しい遊星が京都の魔力に引かれて、一歩一歩自己の圈外に逸して行くのを認めない譯にはゆかなかつた。こんな風にして前に兄の譴責を受けた範頼が、百方哀訴して其の譴責を宥された時には、頼朝と義經との間の新しい反感が、互ひの胸に根を張つてゐた。

斯うして後年この兄弟の身邊に不穩の空氣を漲らした感情の衝突は、既にこの頃から萠してゐたけれども、隱忍な頼朝は、平家征討の大事を前に控へて、部内で事を荒立てるやうな事はしなかつた。併し此の間にも苟くも部内の結束に障碍を及ぼすやう

な事柄に就いては、容赦なく其の峻嚴な手を揮つた。元暦元年四月廿一日には、堀ノ藤次親家に命じて、豫て人質として營中に留めて置いた志水ノ冠者義高を誅戮させ、尋いで足利ノ冠者義兼、小笠原次郎長清を甲斐へ下し、小山、宇都宮、比企、河越、豐島、足立の諸族に命じて信濃に出兵させて、木曾の餘黨を討伐させ、尚ほ相摸、伊豆、駿河、安房、上總の家人にも命を傳へて鎌倉に參入させた。(二) 五月四日には、伊勢ノ國羽取山で志太ノ三郎先生義廣を討取り、(三) 又一條次郎忠頼が謀叛の心あるのを見拔いて、六月十六日營中へ招いて誅戮を加へた。(四) これは義仲追討の前年に上總ノ權介廣常を誅したると同じやうに、先づ部内を廓清し、木曾の餘黨を掃蕩して、西國出兵の準備に從つたのであらう。此の間一方には五月廿一日法皇の近臣高階泰經に書を送つて、範頼、廣綱、義信の任官を奏請し、六月五日を以て範頼は三河ノ守に、廣綱は駿河ノ守に義信は武藏ノ守に任ぜられたが、義經に對しては何の推擧をもしなかつた。斯うして出征の準備も滯りなく運んだので、八月八日三河守範頼に關東の主立つた家人を副へて、平家の追討に發向させた。この時頼朝が故らに義經の任官を奏請せず、又義經を措いて範頼が追討使の任を授けた理由に就いては、多少譴責の意味もあつたであらうが、特に追討使の事に關しては、その他にも範頼に代へねばならぬ理由があつた。それは當時義經が京畿を離れられない事情があつたことである。

三日平氏の亂

義經は一ノ谷の戰後、關東の代官として京都に留つて、近畿の鎮撫に當つてゐたので頼朝と雖も院の許可を得ずに獨斷で動かす譯には行かなかつたと見え、範頼を追討使として西下させる以前にも、法皇に奏請して義經を平家追討使として西海へ遣したいと願つたが、(五) 法皇のお許がなかつたらしい。それは此の頃所謂三日平氏の亂があつて京都附近が物騒だつたからであつた、元來伊勢は平家發祥の地で、伊賀、伊勢には平氏の一族が散在してゐたので、一ノ谷の戰後頼朝は大内ノ冠者惟義を伊賀國の守護として之に備へさせた。(六) 時に上總介忠清は一ノ谷を逃げのびて、伊賀國へ入り、筑後前司貞能の兄に當る平田家繼入道の居城平田城に據り、伊賀、伊勢の同志を糾合して兵を擧げ、七月七日惟義の館を襲つて多くの郎從を殺し、富田ノ進士家助、前ノ兵衛尉家能、壬生野新次能盛及び前ノ出羽守信兼の諸子と共に、近江國に進發し、佐々木源三秀義と戰つて之を殺し、鈴鹿山を塞いで陣を取つた。京都の上下は此の報を聞いて、一時は大騒ぎをしたが、大内惟義は再び兵を集めて、近江國に向ひ、七月十九日大原庄で戰つて、家繼、家助、家能等を殺した。忠清と信兼の諸子とは山中に逃げ込んだが、京都へ入つた形跡があるので、直に義經の許へ飛脚を立て、搜索させた。(七) 越えて八月

法皇と義經

十日義經は信兼の三子左衛門尉兼衡、次郎信衡、三郎兼時を招いて尋問したが、三人は其場で自殺したので、翌日信兼の官を解き、義經は十二日京を發して伊勢に向つた。信兼は伊勢國瀧野に城を構へて義經の兵を防いだが、終に城に火を放つて自殺した。上總介忠清入道は平家の滅亡後、元暦二年五月十日志摩ノ國麻生浦で捕縛されて京都に護送され、同十六日六條河原で梟首された。

三日平氏の亂はこんな事で鎮定したが、一時は兎も角も近畿の人心を騷がしたものであつた。こんな事のあるにつけても、法皇は愈〻義經を祕藏にして、八月六日には左衛門ノ少尉に任じ、檢非違使の宣旨を下し、九月十八日には從五位下に叙せられ、大夫ノ尉に進み、十日十一日拜賀の禮を行ふ日を以て、院内の昇殿を許された。大江ノ廣元の報告によれば、此の時義經は、「八葉の車に駕り、三人の衛府と二十人の共侍は騎馬で其の後に從ひ、庭上に於て舞踏し、笏劍を撥けて參殿した」。彼れの得意の樣が目に見えるやうではないか。若い彼れはこんな風にして知らず〳〵京都の誘惑に陷つて行つた。そして法皇が如何に彼れを寵愛して、京都を離しともなかつたかといふことは、再三出征の事を奏請しても、容易にお許しがなかつたことや、出發する間際までも使を送つて引留めようとした事實でも推量される。

頼朝の隱忍

背面攻擊の任

そんなこんなで頼朝も強ひて義經を西國へ出發させることも出來ず、遠征の準備の成ると共に、追討使を範頼に振りかへて、先づ九州へ進發させた。人々の才能によつてそれ〴〵に向ける途を知つて居た頼朝は、斯うして義經を用ふべき時機の來るのを待つてゐたのであらう。彼れは自分の奏請によらずして授けられた義經の任官を聞き、又官途の榮進に得意になつてゐる其の樣子を聞いて、胸中には烈しい不快の念を湛へながら、なほ表面には何氣ない樣子を粧つて、京都に關係したことは、依然として義經の權限に任せて、前の通りに信書の往復も續ければ、九月十日には、豫て媒介となつて義經と婚約をさせた河越重頼の女を、義經の許へ送り届けもした。彼れの隱忍は殆んど底が知れなかつた。

頼朝は範頼を九州へ發向させると共に、一方では四國の形勢に着目し、豫て橘次公業を讃岐國へ遣して、國内の武士を遊説させ、其うち源氏に志を寄せる者の氏名を鎌倉へ報告させたが、九月十九日、是等の武士に書を下して、其の忠勤を勵ました。頼朝は先づ範頼の軍を以て山陽、西海二道を經略して、陸上から屋島を包圍する策を取つたが、之と共に一軍を四國へ向はせて、背面から平家の根據地を覆へさうといふ方略を立てた。而して此の方略を定めると共に、九州の軍勢は範頼の管掌に任せ、四國の

運勢は義經の擔任に委することに決したらしい。(一三) 思ふに堅忍持久を必要とする包圍策には、年少氣鋭な義經よりも、寧ろ溫厚な、多少鈍重な範頼の方が適任であつたらう、特に頼朝が深く氣遣つた部内の人心の融和や、敵地の住人の懐柔や、尙ほ又天皇及神器の安全なぞの諸點に就いては、逸り氣の義經よりも寧ろ氣の練れた範頼に依頼する所が多かつたであらう、同時に屋島の背面攻撃に至つては、九郎得意の戰術を用ふべき最好の機會ではないか？　人の才を用ふるに長じた我が頼朝が、この位の事を見落す理由はない。彼れは範頼がやう〳〵九州に入つて、遠征の辛苦に瘠せ細つてゐた時に、一方では美酒佳肴に飽きて、脾肉の嘆に堪へなかつた九郎義經を起して、急に四國の攻撃に向はせたのである。

併し義經如何に勇猛なりと雖も、船なくして海を渡ることは出來ない。當時瀨戸内海の海權は全く平家の手にあつて、其に兵船は近海に出沒して、東軍の膽を冷してゐた。壽永三年六月には、平家の兵が播磨へ上陸して、室ノ泊を燒き、(一四) 又範頼の己に安藝へ入つた十月には、平家の兵船が五六百艘淡路へ着いたといふ風說が京都まで傳はつた位で、平家は一ノ谷を追出された後も、能登守教經の經營に成つた瀨戸内海東部の海權は、屋島に對する東軍の進路を脅かしてゐた。併し教經が瀨戸内海の東部に威力

海權の爭奪

義經決死の出征

を揮つた當時に在つても、紀淡海峽の兩岸には、淡路の安摩氏、紀伊の園部氏といつたやうな兵船を有つた豪族が、源氏の黨與になつて、平氏の水軍と戰つてゐる。烟眼な頼朝がこの間の消息を見のがす筈はない。思ふに範頼軍の進發後、義經に出征の命を下すまでの約半ヶ年間に、東軍は紀伊淡路の豪族の招撫に手を盡したものであらう、元暦元年の十月には梶原景時が淡路へ足を入れて居るし、(一六) 紀伊の方面では、僧文覺の手を借りて湯淺黨を招き、(一七) 又如何なる手段によつたかは明瞭ではないが、兎に角當時海上の一大勢力であつた熊野ノ別當湛增を身方にして、其の兵船を西に向はせることに成功したので、義經は始めて後顧の患を絶つて、四國へ渡ることが出來た。

元暦二年正月、義經は京都を出發するに先ち、法皇の御所に參じて、平家追討のため四國に下りたいといふことを奏請した。此の時院中の評議では、「平氏の餘黨上總介忠清が、京都に潛伏して謀叛を企ててゐるといふ風聞のある際に、義經を京都から去らせるのは不安心である、四國には別の將を遣はし、義經を留めて京都を警衛させるがいゝ」といふことで、容易に法皇のお許しが出なかつたが、義經は押返して、「今若し追討を猶豫して二三ヶ月も經過したら、西海の軍は糧食が盡きて空しく歸京するやうなことになるかも知れません、然うなつたら九州の武士は再び平家に屬して、追討が

愈〻難儀になりませう」と奏上したので、やう〳〵のことで法皇の許しが出た。[一八] そこで義經は、正月十日京都を立つて攝津國に下り、二月中旬まで渡邊、福島の邊に滯在して、渡海の準備をしてゐた。法皇は義經の愈〻四國に進發すると聞いて、近臣大藏卿高階泰經を渡邊へやつて、義經の樣子を窺はせ、京中に警衛の武士がないから、用心のため出發を見合せよといふ仰せを傳へて、尙ほも義經の心を翻へさせようとした。泰經は二月十五日義經の旅館へ着いて、義經に向つて忠告するには、「泰經は兵法は知らないが、常識から考へても、大將軍が先頭に立つて戰はねばならぬといふことはなさうに思はれる。何も自分で行かなくとも、誰か他の者を代りにやつたらいゝではないか」と婉曲に引留めると、義經は「少し考へがあつて、今度は一陣で命を棄てる覺悟です」と決然と答へて、出發を延ばさなかつた。[二〇] けれど愈〻出發の時刻になると、急に風が出て船が出ない。之がために心ならずも出發を見合せてゐたが、十七日の夜半になつて風が變つたので、義經は急に進發の命を下し、五艘の船に麾下の兵百五十騎を分乘して、丑の刻（十八日午前二時）に暴風を衝いて渡邊を發し、平生ならば三日はかゝる所を、僅かに四時間で卯の刻（午前六時）に阿波國に到着した。

義經は二月十八日の早朝阿波國尼子浦（『東鑑』には勝浦又は椿浦）に着き、當國の住人近藤六親家を先導として、屋島に向ひ、途中勝浦（『東鑑』とは桂浦）で、阿波民部大輔成良の弟櫻庭介良遠を襲つて其の城を燒き、其の夜阿波と讃岐の境にある中山を越えて、十九日の辰ノ刻（午前八時）には早くも屋島の內裏の對岸へ達し、牟禮高松の民家を燒拂つたので、宗盛は敵の大軍が押寄せたと思ひ誤り、安德天皇を奉じ、一族を率ゐて海上へ避難した。義經は赤地の錦の直垂に、紅下濃の鎧を着し、大夫黑と名けた祕藏の黑馬に跨り、田代ノ冠者信綱、金子ノ十郎家忠、同餘一近則、伊勢ノ三郎能盛らの從騎を從へて屋島に迫る。[二一] 屋島の城といふは干汐の滿ちた時は島になつて、船でなくては通へないが、干汐の時には、西の山に沿うて渡せば、水は馬の腹迄もない。[二二]」義經主從五騎が汀に馬を乘入れて、海上の敵と戰ふ間に、佐藤三郎兵衛ノ尉繼信、同四郎兵衛尉忠信、後藤兵衛ノ尉實基、同養子新兵衛ノ尉基淸らは、もう屋島の城內に亂入して、內裏を始め、宗盛以下の館に火を掛けたので、城內に踏止まつた兵も、悉く船に乘つた。平家の軍は海上から內裏の炎上を眺めながら、水を挾んで源氏の兵と接戰した。中にも越中ノ二郎兵衛尉盛繼、上總ノ五郎兵衛ノ尉忠光等は、陸に上つて奮戰し、義經の家人佐藤繼信を射て落した。[二三] 平家は折柄無勢のところへ思ひがけない背面攻撃に遭つて、狼狽して船に上つたものゝ、攻撃軍は僅かに百五十騎餘りで、後から續く勢

屋島の背面攻撃

もなかつたので、平家は一艘二艘と船を寄せながら、岩に近づいて戰ふうちに、其の日も暮れて、東軍は牟禮高松に退いて夜營を張つた。平家は屋島の燒跡に據つて、翌二十日も終日戰つた。

兵勢日に加はる

此の間に四國の兵は、追々に馳せ加はつて、源氏の兵勢が盛んになつたので、平家は其の夜のうちに屋島を棄てゝ、讃岐ノ國志度の道場へ據つたが、翌廿一日義經は八十騎の兵を引いて志度の浦へ攻め寄せた。此の日伊豫の河野四郎通信は兵船三十艘を引いて源氏に加はり、又平家が力と賴んだ阿波民部大輔成良の嫡子田内左衞門ノ尉成直は、三千餘騎を率ゐて敵に降つた。それさへあるに、源氏方には渡邊、神崎で勢揃へして順風を待つてゐた船百四十餘艘の隊が、白旗を飜へして東方から迫つたので、平家の船隊は俄かに志度ノ浦を出て、西に向ひ、彦島なる知盛の船隊に合した。廿二日百四十餘艘の大船隊は、梶原景時の指揮の下に、堂々として屋島の磯に着いた。熊野の別當湛增も二百餘艘の兵船を率ゐて來援した。[二四]

東軍の四國平定

平家は屋島の根據地を失つた。伊豫の河野氏は初から源氏の黨與であつたし、土佐の豪族も心を源氏に寄せてゐたし、讃岐にも橘次公業に從つて源氏に歸服した武士が[二五]あつたが、爰に至つて最も平家に忠實であつた阿波の民部大夫成良も、遂に欵を源氏に通じたので、[二七]四國に於ける平家の勢力は全く根柢から覆へされ、瀨戸内海東部の制海權は完全に東軍の手に歸した。

(一)『玉葉』元暦元年十一月二日、三日、四日。
(二)『東鑑』卷三、元暦元年四月廿一日―五月二日。
(三)乃至(六)『東鑑』卷三。
(七)『東鑑』卷三。『山槐記』、『玉葉』。
(八)『東鑑』卷三。『百練抄』第十。『山槐記』。
(九)『山槐記』、
(一〇)『源平盛衰記』。
(一一)(一二)(一三)『東鑑』卷四。
(一四)(一五)『玉葉』。
(一六)『東鑑』卷三。
(一七)崎山文書。
(一八)『吉記』
(一九)『玉葉』。
(二〇)(二一)『東鑑』卷四。
(二二)『平家物語』。

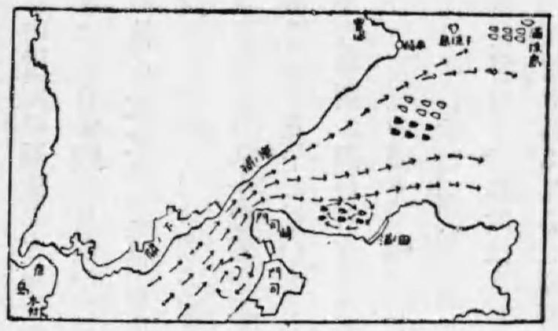
壇ノ浦の海戰

(二三)『東鑑』卷四。
(二四)『東鑑』卷四。『源平盛衰記』。
(二五)(二六)『東鑑』卷三。
(二七)『源平盛衰記』。

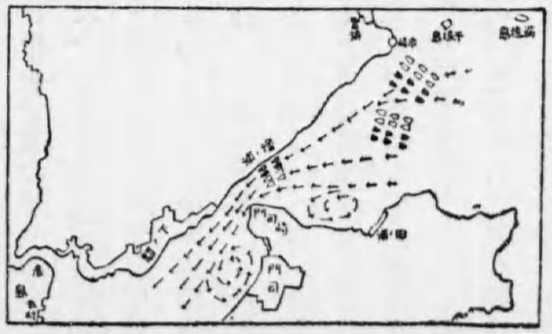
第六節　平家一門の末路

屋島の根據地を奪はれた後の平家は、波のまに〳〵漂つて行つた。知盛は周防の大島を棄てゝ、力を關門海峽に集中した。一門が足を立てる陸地と言つては、もう天にも地にも長門の彦島を殘すばかりになつた。併し東軍の前途には一つの難關が横はつてゐる。陸上の敵に打勝つた彼等は、更に海上の敵と戰はねばならなかつた。東國武士の不得意な船軍の準備に、義經は屋島の占領後一ヶ月の日子を費して居る。三月廿一日海戰の準備が略〻整つたので、義經は彦島に向つて敵の根據地を衝かうとしたが、雨に遭つて出發を見合せてゐると、周防の國の在廳で、舟奉行の船所ノ五郎正利が、數十艘の兵船を引いて東軍に屬した。翌廿二日義經は是等の船を率ゐて西に向ひ、周防國大島津へ着くと、三浦介義澄が出迎へ、一行の嚮導として、長門ノ國壇ノ濱奥津(滿珠島)の邊まで進む。平家はこの報に接して、彦島を出で、赤間關を過ぎて、豐前田浦の濱へ陣を布く。兩軍の距離三十餘町。廿三日は合戰の準備に暮れた。義經は此間にこの附近の潮流などを研究して、作戰計畫を定めたことであらう。明くれば廿四日平家は五百餘艘の兵船を三列に竝べ、山鹿ノ兵藤次秀遠及び松浦黨の兵船を前線に進め、阿波ノ民部成良の兵船を後陣とし、平家一門の軍船を中央にし、潮流に乘つて敵陣に殺到する計略で、時刻の來るのを待つてゐた。平家の船には唐船も幾艘か交つて居た。東軍は八百四十餘艘の兵船を奥津、平津(滿珠、干珠)の沖合に列ねて、敵船の進擊を待つ。正午に近づくと潮は次第に低潮となつて、外海の水は大瀨戸、小瀨戸の兩戸から早鞆の瀨戸に向つて落ちて來た。此時兩軍は互ひに船を進め、三町の距離まで近づいて戰を開く。戰は正午に始まり、最初西軍が潮流を利用して北水道に突出し、長門の岸に沿ひ、急潮に乘つて頻りに東軍を壓迫した。東軍は踏耐へて苦鬪した。時は刻刻に移つて、勝敗はまだ見えない。其のうちに潮が變つて來た。早鞆の瀨戸を東に向つて湍り落ちてゐた潮勢が、次第に弛んで、やがて風のやうに穩かになる。東軍が八幡大菩薩の示現を見たのは此の時であらう。軍神は此の時を以て西軍に背を向けた。東軍が勢ひを盛返して進擊する間に、潮流は次第に西に轉じて、西軍の兵船を早鞆の瀨

戸に押返した。此時まで西軍の後陣に控へて、軍の形勢を窺つてゐた阿波民部成良は、俄かに旗色を變へた。勝敗の機は決した。西軍は漲り落ちる潮に追はれて、海峡の方へ押戻されながら、終に壇の浦まで來た。日没頃には西軍全く敗れ、將士らは或は戰死し、或は沈んで、偉大なる落日の背景の中に其の悲壯な最期の幕を閉ぢた。早鞆ノ瀬戸から流れ落ちる海潮は風を呼び、雲を起して、雷のやうな轟きを立てる時、帆柱を傾け、梶を失つた無數の船は、浪に搖られ、風に從つて、美しい夕映の空の下を木の葉のやうに漂つて行く。



壇浦海戦圖（正午より午後三時頃迄）



壇浦海戦圖（午後三時頃より四時頃迄）

平家七盛の墓

斯うして平家の一門は、華やかな落日の光を浴びて、西海の波に消えて行つた。御年僅かに八歳であつた天皇は、按察の局に抱かれながら、海を踏んで舷を下ると、二位ノ禪尼、（清盛の室）は、神劍を抱へて御跡に從つた。國母建禮門院も藤重ねの十二單の裾を翻へして續いて入水したが、渡部黨の武士源五馬ノ名の熊手にかかつて救はれた。按察ノ局も一旦は海へ沈んだが、浮び出て命を助けられた。一門の中では、前内大臣宗盛、右衛門督清宗父子、平ノ大納言時忠、左中將時實父子其他數人の者が俘虜となつた外は、門脇中納言教盛、新中納言知盛以下一族を擧げて西海の藻屑と消えた。この時、時忠は

三種の神器

最後まで御座船に踏留まつて内侍所（神鏡）を守護して居たが、東軍の武士が御座船へ亂入して、神鏡を藏めた唐櫃の錠前をねぢ破つて、中の箱を開かうとした時、時忠は、「内侍所であるぞ！」と一喝したので、武士らは狼藉をやめて退去した。時忠は内侍所を元の通り唐櫃に藏めて、共に源氏の船に迎へられた。神璽の箱は海上に浮んでゐたのを、常陸國の住人片岡八郎經春が拾ひ上げた。斯うして三種の神器の中二種までは、無事に救ひ上げられたが、只寶劍だけは再び現れなかつた。此の危急の際に二宮（高倉天皇の第二皇子）は無事に義經の手に迎へられたが、賴朝の深く心にかけた天皇と二位尼とは寶劍と共に終に海から上らなかつた。後、文治三年四月廿三日諡號を奉つて安德天皇といひ、建久二年閏十二月には又長門國に勅して、赤間關に阿彌陀堂を立て、安德天皇の冥福を祈らせた。今の赤間ノ宮がこれである。

戰況報告

義經が壇ノ浦の戰を京都へ報告した飛脚は、元暦二年四月三日に京都へ着いたが、翌四日源兵衛尉弘綱が法皇の御所へ參つて、傷死生虜の名簿を奉る。(三) 是より先源平兩軍の決戰が近づいたと聞いた時、朝廷では二十壇の祕法を修して、朝敵の滅亡を斬り、鎌倉でも亦鎌倉中の僧侶を集め、鶴ヶ岡八幡宮の寶前で、大般若經を轉讀して、平家追討の祈請(四)をしたが、二月廿日住吉ノ社の神官津守ノ長盛上京して、院の御所へ出て、去十六日、當社で恒例の御神樂を行つた時、子ノ刻に鳴鏑が第三の神殿から出て、西方を指して飛んで行つた」といふことを奏聞した。(五) こんなことで、京、鎌倉では世人が西海の合戰の報道に神經を惱ましてゐる所へ、京都へは四月三日に前に言つた飛脚が着いたので、法皇は弘綱を御所へ召出して、詳しく合戰の樣子を尋ねられた後、翌五日には大夫ノ尉信盛を勅使として、長門へ派遣して、義經の勳功を賞し、且つ神器を奉じて速かに歸京するやうに命じた。同時に鎌倉へ發した飛脚は、四月十一日に、丁度南ノ御堂の柱立の日に鎌倉へ入つて、義經からの報告書を差出したので、賴朝は藤ノ判官代に命じて、此報告を讀上げさせ、其の卷物を受取つて、手に持つたまゝ、鶴ヶ岡八幡宮の方角に向つて座を占めたが、感極まつて言葉が出なかつた。上棟式が終つて幕府へ還つた後、先刻の使者を招いて、合戰の次第を尋ねた。翌日西國の跡始末に就いて會議を開き、其の結果範賴は暫く九州へ置いて、平家の沒官領其の他の事を處理させ、又義經は生虜の男女を護送して京都へ上らせることになり、卽日飛脚を西國へ立て、此の決議を傳へ(六)させた。

神器の還京と平族の處分

義經は法皇の命に接するや否や、神器、二ノ宮及建禮門院を奉じ、宗盛、時忠以下の俘虜を率ゐて長門を發し、四月廿五日に京都へ入つた。其の前日、權中納言吉田經房、

參議藤原泰通、權ノ右中辨兼忠ら、勅使として神器を烏羽に迎へ、先づ大政官の朝所(あいたんどころ)に奉守し、尋いで廿七日には内侍所に移して、三日の間神樂を奏させた。(七)この日義經は隨兵を率ゐ、鎧を著して先驅をした。二ノ宮はこの夜七條侍從信清のお迎を受けて、七條坊門の亭へ入つた。翌日前内大臣宗盛、平ノ大納言時忠、右衛門督清宗等の俘虜が京都へ入るといふので、見物の男女は四方から集まつて、狹い京都の街を埋めた。法皇も密かに六條ノ坊城に身を立てゝ、宗盛らの行裝を御覽になる。其の日の午後、宗盛、清宗父子は、八葉ノ車に同乘し、時忠も同樣な車に駕り、何れも前後の簾を上げ、左右の物見を揚げて外部から見えるやうにし、土肥二郎實平、伊勢ノ三郎能盛を始め、多數の武士車の前後を圍んで、京都の街を引廻しながら、義經の六條室町の第へ入つた。此の日朝廷では平家の人々の罪狀に關する評議があつた時、明法博士中原章貞は宗盛父子を始め家人等を死刑に處すべしといふ意見書を提出した。其の中に關東からは、宗盛以下平家の俘囚の護送を願つて來たので、義經は法皇の許を受けて、五月七日宗盛父子以下の俘虜を護送して鎌倉に下り、同月十五日相模國酒勾驛に著き、使を立てゝ明日鎌倉に入るといふ先觸れをさせる。頼朝は北條時政を使として酒勾に向はせ、宗盛以下の俘虜を受取らせ、別に小山ノ七郎朝光を使者として、義經の鎌倉に入ることを

宗盛の醜態

一族の斬流

停め、酒勾の附近に滯在して、頼朝の命を待たしめた。これは義經の出征中の行動に關して譴責の意を示したものであつた。(八)

宗盛父子は六月九日まで鎌倉に滯在したが、頼朝は大江廣元の諫めに從つて、終に宗盛と對面しなかつた。只歸京の前々日宗盛を營中に召して、簾越しに其の樣子を窺ひ、比企ノ四郎能員を以て、鄭重な言葉を傳へさせた。この時宗盛は能員に對し居住居を直して挨拶したが、其の言ふ所は分明でなく、只々露命を救ひ、出家の願ひを許されたいと歎願して、鎌倉の家人等に其の醜態を笑はれたといふ。

この時頼朝は遂に義經を鎌倉へ入れず、六月九日再び宗盛等を引いて京都へ送還させた。頼朝は又橘馬ノ允、淺羽ノ庄司、宇佐美ノ平次等の家人に意を含めて、囚人に副へて出發させたが、廿一日近江國篠原宿へ着いて、宗盛は橘馬ノ允公長の手で、又清宗は野路ノ驛で、堀ノ彌太郎の手で斬罪に處せられ、其の首は廿三日京都へ傳へられて獄門に懸けられた。一ノ谷の俘囚前ノ三位中將重衡は、この以前から鎌倉へ護送されて、狩野介宗茂の館に預けられてゐたが、宗盛と同時に、源ノ藏人大夫頼兼に護送されて京都へ上り、東大寺の衆徒の請に任せて廿二日南都へ送られ、三たび東大寺の大垣を引廻した後、南都燒討の際重衡が指揮を取つたといふ法華寺の鳥居前で首をはねられた。

平大納言時忠

平ノ時忠以下平家の家人等は、死一等を減じて、何れも流罪に處せられた。

我等は終に平家一門の末路まで來た。この最後の瞬間に於て、我等の回想に異樣の色彩を添へる一人の人物を見落すことが出來ない。平ノ大納言時忠――平家の全盛時代に、「此一門にあらざらん者は、男も女も法師も尼も皆人非人ぞ」と豪語した彼れ、一門都を落ちて、筑紫の太宰府に留まつた折、衣冠束帶して、緒方三郎惟義の使者を引見し、「我君は天孫四十九世の正統、人皇八十一代の帝、太上天皇の后腹の第一の王子也云々」と威嚴を正して言ひ放つた彼れ、そして平家覆滅の際までも、天皇の側を去らず、内侍所を守護して、東軍の武士を叱咤した彼れこそは、清盛の沒後に於ける平家一門の柱石であつた。彼れは出羽前司知信の孫、兵部權大夫時信の子で、高倉天皇の母儀建春門院と清盛の室二位ノ尼とは其の妹であつた。されば清盛入道の在世中には何事も其の謀議に預つて、官職も正二位大納言まで進み、入道亡き後には、一門の長者として、宗盛を輔佐して、軍事、外交の機密に與つて居た。斯ういふ關係から、平家の西走後も、法皇は彼れによつて天皇と神器を平家の手から奪ひ還さうと苦心して、幾度か内々の仰せを傳へ、平家一門の官職を停止した折にも、時忠父子ばかりは其の處分に洩れてゐる程であつた。彼れは戰場の勇士ではなかつたが、屋島内裏に於ける帷幕の謀臣として、約二年の間、一族海上に浮びながら、大義名分に據つて、全軍の心を結束して行つたのは、彼れの力に負ふ所が多かつたであらう。前に揚げた重衡に對する返書といひ、又あの有名な屋島請文といひ（若し信憑し得るものならば）其の堂々たる文辭、成敗の外に立つて、飽までも正統の天子を擁護しようといふ意氣は恐らくこの人によつて支持されたものであらう。傳說に據ると、時忠は壇ノ浦で捕虜となつて、京都へ護送された後、往復の文書を藏めた皮籠が、義經の手に落ちたのを氣にして、若しあの皮籠の中の書狀が頼朝の目に觸れたら、多くの人の難儀にならうといふので、其の先妻の女を義經に與へて、此の皮籠を封のまゝ取返し、中の文書を悉く燒き棄てた。[九] 其の後五月廿日時忠は能登に、時實は周防に配流の官符を下されたにも拘らず、時忠は内侍所の無事に還つたのを自分の手柄にして、この上にも流罪を免されて、出家したいと言ひ立てて、配處へは行かず、父子共に依然として京都に留まつて居た。これは言ふまでもなく、義經の緣故を恃んだのであつた。[一〇] 九月廿三日時忠は終に配所へ赴いたが、時實は其の後も京都に潛伏して、十一月三日義經が頼朝追討の院宣を給はつて西海に下る時、其の一行に加はつて京都を出たけれども、途中で風に遭つて分散し、後捕はれて鎌倉へ護送され、翌年正月上總國に配流された。

義經と時忠

平家の餘類

文治元年十一月頼朝は北條時政が京都へ上るのにつけて、特に命じて、平家の餘類を捜索させた。その時重盛の子丹後ノ侍從忠房を始め、宗盛の子二人、通盛の子維盛の嫡男六代などは、何れも捕へられた。傳説に據れば、北條時政は賞を懸けて、偏く平家の子孫を尋ね、「幼きは水に入れ、土に埋めて殺し、少し長じた者は首を斬り」、「腹の中をもあけないばかりにして、尋ねあなぐつて悉く亡い者にした」。(『長門本平家物語』)。頼朝は前に自分の助命されて大事を成し遂げたことを考へて、平家の一門に對しては、根を斷ち葉を枯らす策を取つたのである。

平知盛肖像

知盛の末子

斯うして平家の一類は、京都の隅々までも搜して、大抵は殺し盡したけれども、まだ一人、新中納言知盛の末子に大夫知忠といふ者が殘つてゐた。知忠は平家沒落の時僅かに三歳で、都へ遣され、紀伊ノ次郎兵衛爲範に育てられ、伊賀ノ國の山寺に忍んで生長したが、建久七年十六歳の時京都へ出て、法性寺一橋の邊に隱れ、平氏の餘黨を集めて、洛中守護藤原能保を襲擊しようといふ隱謀を企てた。併しまだ事を擧げない先に隱謀が露顯して、六月廿五日能保の兵に圍まれ、知忠と爲範は自殺し、其他の黨與は逃亡した。(一一)

五郎兵衛忠光等

斯ういふ折々の隱謀につけて、いつも世人の噂に上るのは、越中二郎兵衛盛嗣、上總ノ惡七兵衛景清、同子五郎兵衛忠光等の名であつた。忠光は建久三年正月廿一日鎌倉永福寺の土工に身を窶し、片眼へ魚の鱗を入れて相好を易へ、頼朝をつけ覘つたが、捕へられて和田義盛に預けられ、飲食を斷つて死んだ。(一二) 其後建久六年三月頼朝再度の上京の時には、諸臣に命じて京都及近畿の大搜索を行つた結果、四月一日には、結城朝光、三浦義村、梶原景時の手で、前ノ中務丞薩摩宗資父子を京都で捕縛し、六月十四日には、下河邊行平が、桂兵衛貞兼を逮捕しだ。(一三) 傳説によると、宗資は東大寺供養の際、群集の中にまぎれて頼朝をつけ覘つたが、運盡きて發見されたといふ。(一四) 景清が名乘つて出たのも、盛嗣が但馬の國に潛んで居て、終に捕はれたものがこの前後であつたらしい。(一五)

「龍王」勤と「入海病」

平家の一門が西海の波に沈んでから十二年後には、あれほどに全盛を極めた平家の日も、終に名殘の光をも留めずに沒して行つた。其の時東方にはもう新しい日が昇つ

て、天下の人心は新らしい時代に覺めかゝつて居たが、因襲と迷信の霧に包まれた京都の山峽はまだ暗かつた。京都では、元暦二年六月廿日の夜に大地震があつてから、九月廿九日まで、絶えず地鳴りがして、大小の地震が頻々と續いた。時には一日數回に及ぶこともあつた。中にも七月九日の午刻の激震では、内裏の日華門、閑院皇居の西廟、法勝寺の阿彌陀堂の顚倒したのを始めとして、京都附近の大建築で、殆んど損害を受けないものはなかつた。比叡山の根本中堂もゆがみ、法勝寺の九重塔も傾き、所々に大地が裂けて、水の涌き出した所があつた。[一七] 七月十七日には閑院の棟が折れ、釜殿が倒れたので、陛下には二十二日に大炊御門北富小路西なる左大臣經宗の第へ移られた。[一七] 此の地震から、京都では樣々な流言が起り、時節柄一般に平家の祟りだと言囃した。この以前安德天皇が西海へ沈んだといふ報知が傳はつたとき、京都では安德天皇は龍神のうまれがはりだから、海へ歸つたのだといふ說が傳はつた。其の譯は、平相國が嚴島の明神に祈請を籠めて授かつた御子で、嚴島の明神といふのは龍王の女だといふ言傳へだから、つまり龍神が假に王となつて生れたものだといふのである。すると又たこの大地震に驚かされた京都人は、此の地震も矢張り平相國が龍になつて搖かすのに相違ないといふので、「龍王動」と名をつけて恐れ合つた。[一八] 又たこの前後に

第の第の

[illegible]

を蒙つたものである。

米国の砲撃の『戦法』の一部たるものである。国力十倍米国の攻撃に対して、我が国は、多年鍛錬した砲の威力、多年研究した砲の命中率に信頼を置いたのである。支那兵の戦法を採り、毒瓦斯、ロケット弾、ちっぽけ爆弾、火炎の噴出口に一発の火箭を撃ち込む。米国のそれは大口径十数発。こんな、簡単な原理の大発明が作られた。年産の鉄鋼の量の総量が米国年三百五十万トンに対して、我が国は三十万トン。

平氏の追福と改元

新時代の潮流

一種の感冒が流行したのをも、京都人は「入海病」と呼んで、同じく平家の怨靈に歸してゐるのを見ても、平家の滅亡が京都の人までも動搖させた一斑が窺はれる。[一九]

そこで朝廷では西海で滅亡した人々の罪障を消すために、五月廿一日以來不斷の讀經を行はれ、[二〇]又諸國に課して、四萬基の塔を造營させ、更に佛厳上人の夢想により、賴朝に諭して平氏の緣坐によつて流刑に處せられた僧徒を赦免させたが、[二一]八月十四日には、改元して、元暦二年を文治元年と改め、天下に令して大赦を行つた。文治の號は禮記に「湯以レ寛治レ民、文王以レ文治」とある文から取つたのだと言ふ。

斯うして宮廷の君臣が、空しい形式と世俗の迷信に引廻はされて、時代の實相に眼を背けて居る間に、新時代の潮流は、ひた〳〵ともう其足元まで迫つて來た　彼等が目に見える地震に魂を奪はれて居る間に、目に見えぬ地震は其の生活の基礎を搖つてゐた。『愚管抄』の作者をして、寶劍の流失を歎きながも、顧みて時勢の變遷を說かしめてゐるのを見ても、時代の急潮が既に一部識者の胸には、同じ鼓動を打たせてゐた有樣が窺はれるではないか。京都の人心に異常の動搖を與へた種々の天變と地異とは、平家一族の怨靈の所爲ではなくて、古い時代を弊り新しい時代を迎へる革新期の現象であつた。斯ういふ世紀末の苦悶の中に、古い十二世紀の社會は自然に解體して

建禮門院

力に充ちた新しい世界が生れて來た。戰爭に倦み果てた世は文治と改元されたが、武家政治の基礎を確定すべき空前の大變革は、この改元と共に斷行された。それから三十七年、承久の亂に至つて、古い社會の礎は終に根柢から崩れて行つた。拔目のない『源平盛衰記』の記者は、平家の血統を保存した最後の一人ともいふべき建禮門院の目をかりて、この世態の變遷を見詰めさせて居る。建禮門院は壇の浦の戰後、大納言時忠の妻で、安德天皇の乳母であつた帥ノ典ノ侍や、中將重衡の妻大納言ノ典侍どに從はれて都へ入り、初めは東山の麓、吉田の近邊にある律師實憲といふ者の住み古した坊にゐて、五月一日廿九歲で剃髮し、六月廿一日其の近所の野澤の御所といふ花山法皇の山莊へ移つたが、七月九日の地震で、ひどく破損したので、文治元年八月には、大原の奧に當る寂光院へ引込んだ。爰で同じく剃髮した帥ノ典侍、大納言ノ典侍など四五人の尼に侍づかれて、朝には谷の水を掬び、夕には峯の花を摘んで、一族の後生を弔ひつゝ、月日を送つてゐたが、文治二年の春には後白河法皇が忍んでこの庵堂へ御幸になつた。其の法皇も建久三年三月には、六十六歲で崩御になり、正治元年正月には、一門の敵賴朝も、五十四歲で此世を逝り、それから二十二年經つた承久元年正月には將軍實朝が害せられて、源氏の血統が絕え、同三年七月には、後鳥羽法皇を始め三人の上皇は、遠國へ配流された。大原の奧から、斯ういふ世相の變遷に觀念の目を注いで居た此の老尼は、浮世の定めない流轉の姿をしみ〴〵と味つて、承久三年から二年經つた貞應二年の春、六十七歲を以て往生の素懷を遂げた。(一三)

(一)『玉葉』。

(二)壇の浦の戰の時刻に就いては、當時の記錄に二樣の異說がある。卽ち『玉葉』には、「午正より晡時に至る」と記載してあるが、『東鑑』及『源平盛衰記』に據れば、「早朝から始まつて午ノ刻に平氏が全敗した」とになつて居る。黑板博士は大正三年六月史學會の講演で壇の浦の決戰當日に於ける潮流の關係を調べて、此の問題に決定を與へ、『玉葉』の記事を正確と斷定した。其の大意を示すと次の通りである。

「元曆二年三月廿四日、壇の浦の潮流を見るに、午前五時十四分高潮、同十一時十四分低潮、潮流の方向を轉換するは凡そ午前八時半にして、これより內に向つて流る。午後五時十四分高潮、同十一時十四分低潮、潮流の方向を轉換するは凡そ午後三時頃にして、これより外に向つて流る。中央水道にては、急潮のとき一時間八浬、低潮のとき速力最も大也。戰は『吾妻鑑』『源平盛衰記』によれば、朝凡そ六時頃より始まり、八時半頃までは、平氏は潮流に乘じて進み、有利の地位にありたれど、その後潮流の方向變じ、源氏はこれに乘じて進み、つひに正午頃平氏全く敗北したる如くに見ゆ。然れども不可也。當日午前に於ては、潮流は全くその反對なれば也。然るに『玉葉』によれば、戰は午の刻より始り、晡時卽ち午後四時頃に至りて終ると見ゆ、これを以て可とす。蓋午後三時以前は潮東流したれば平氏有利なりしも、三時頃潮凪ぎて

兩軍激戰あり。三時以後潮の西流するに乘じ、平氏は壓迫せられて敗北するに至りし也云々」

尙ほ壇の浦附近の潮流の變化と此の海戰に於ける東西兩軍の策戰計畫に就いては、黑板博士が其の著『義經傳』中に記述した所を左に借用して參考に供する。

「元來潮流の變化するのは、月が其の地の眞南に來る時刻、言ひ換ふれば、月がその地の子午線を經過する時刻によつて左右せらるゝもので、月の經過した時から、凡そ三時間ばかり後に高潮となり、低潮となるのが、一般的の現象である。されど瀨戸內海に於ける潮時と潮流とはこの一般的現象を呈する外洋とは、全然趣を異にするばかりでなく、場所によつて異同がある。殊に關門海峽のあたりは、頗る趣味多き變化を呈し、いはゞその附近の人々が知つて居るのみである。

「中にも注意すべきは、高潮の時刻と潮流の方向の變化が、全く一致せぬことで、潮流は高潮又は低潮の時刻を過ぐること約三時二十分の後に始まり、三時間ばかり繼續する、そしてまたこの早鞆瀨戸に於ては、由良、鳴戸、早吸の各瀨戸とは反對に、漲潮が却つて內海から外洋卽ち日本海に向つて流れ、落潮が外洋から內海に向つて流れて來る。

「次ぎに潮流の速度は、高潮の場合には零であるのが通例であるが、此の海峽では、高潮の時刻と潮流方向の變化が一致せぬため、其の速度の零であるのは、高潮の時刻でなく、それより約三時二十分を經過したる潮流變化の時である。そしてそれより凡そ三時間を經過した時を中心として、最も激烈を告げる。現今早鞆瀨戸の中央、卽ち壇の浦の前面最も狹きところで、最速度が八浬であるが、だん〳〵內海に入るに從つて速度を減じて來る。

「この壇の浦海戰のあつた陰曆三月二十四日、無論今日から七百年前の昔、多少天然の現象にも相異があるであらう、又當時の曆は宣明曆といつて、現今の曆法から見れば不完全の點を免かれぬが、幸にもこの月の十五日に月蝕があつて、滿月の日卽ち俗に大潮といふ日が分つて居る、それから推して、二十四日の潮流や高潮、低潮等を調べると、

高潮　午前五時十分頃
落潮（內海へ東流）午前八時三十分頃より
（此時潮流最も緩なり、速度零）
低潮　午前十一時十分頃
（此時潮流最も急なり、速度八浬）
漲潮（外洋　西流）午後三時頃より
（此時潮流最も緩なり、速度零）
高潮　午後五時十分頃
最急潮流　午後五時十五分頃
落潮（內海へ東流）午後八時三十分頃より
（此時潮流最も緩なり、速度零）
低潮　午後十一時十分頃
（此時潮流最も急なり、速度八浬）

である。さうすると、午前五時十分頃高潮の後約三時二十分なる午前八時半頃には、今まで漲

潮であつた潮流が、方向をかへて落潮となり、内海に向つて流れ始める、其の方向をかふる時潮流の速度は零であるが、だん〳〵速度を加へて、低潮午前十一時十分頃最も激烈を呈し、また次第に緩流となつて、午後三時落潮漲潮に變じ、外洋に向つて西に流れんとするとき、潮流の速度また零となる、そして前と同樣午後五時四十分頃最も激烈に達する。

「さて知盛が田の浦に船列を布いたことは、長門の側では陸上から背面攻撃を受ける恐れあるが故に、最も安全な豐前の方に寄つたのも一の理由であるが、…彼はまた田の浦の湍潮（せしほ）を利用せんとしたやうである。南水道の激流から、その一部は丁度田の浦の前面で囘流して、岸に近いところは、その方向全く反對となつて居る。知盛は全軍を三手に分けて、九州勢を先陣とし、一門の船を中堅とし、四國勢を後陣とし、この湍潮を利用して三方から源氏の軍を取卷き、これを全滅せしめんと計畫した。彼れは根據地たる廣島に引籠つて、徒らに敵の至るを待つものではなかつた。平家は水軍に一日の長を有して居る。知盛は永い間注意してこれを訓練してゐた。そして彼の最も頼みにした九州の軍には、山鹿秀遠、菊地、原田、松浦などの精兵が控へてゐる。彼れは寧ろ進んで源軍を海上に迎へ撃たんと決心し、出來得べくんば一擊の下に義經の水軍を粉碎して、また起つ能はざらしめんと計畫したのである。…彼の策戰計畫たる最初から機敏に、勇悍なる行動を取つて、落潮の漲潮に變ぜぬ間に勝負を決せんとしたのであつた。…これは日露戰役に東鄕大將が根據地たる鎭海灣を出でゝ、ポルチック艦隊を對島水道に逆襲せんとした策戰と類似して居る。しかも敵手たる義經はロジエストエンスキーのやうな庸將ではなかつた。それが後陣たる四國勢の闘志なかりしも、義經の策戰更に巧妙を極めした爲め、遂に失敗に歸したのは、平氏の運命が盡きる所以であつた。

「（一方義經の策戰如何と見ると）長府から程遠からぬ串崎は、丁度田の浦の對岸で、その地の船頭は名を得た屈强のものであつた。後足利尊氏が九州から攻め上るときも、その御座船は實に串崎船である。義經は密かに串崎船十二艘を徵發して自らこれに乘込んだ、彼れは委細にこの附近の潮流について、老船頭の説明を聽き終つたとき、獨り首肯いたであらう。彼の胸中には策既に成つたのである。

「正午十二時は、落潮の最も激しく流るゝ午前十一時十分の後五十分時である、そして午後三時までだん〳〵緩流となり、最も戰ふに都合よき時刻である。潮流の方向は源氏には最初こそ不利なれ、午後三時頃まで支へ得さへすれば、潮流の方向こゝに一變し、流れはます〳〵激しくなつて、平軍を西に壓するには追潮である。義經の策戰の計畫は實にこの追潮を利用せんとするのであつた。

「また義經が自ら麾下の勇士を率ゐて、この串崎船に乘り込んだのは、最も熟練した船頭を利用し、彼等の勝手知つた壇の浦海上、縱横無盡に乘り廻し、軍の懸引はいふに及ばず、機一たび熟せば、自ら挺身敵の本陣に斬り入らんとしたのである。

「知盛の計畫は無論巧妙であつた。しかし彼れは潮流を利用するに於て義經に一籌を輸しまた義經が串崎船を乘り廻して、如何に機敏なる行動を取らんとせしかに氣が附かなかつたのは實に彼の落度であつた。

（三）（四）『東鑑』卷四。

(五)『東鑑』卷四。『玉葉』。
(六)『東鑑』卷四。
(七)『東鑑』卷四。『平家物語』。『玉葉』。『百練抄』第十。
(八)『東鑑』卷四。
(九)『源平盛衰記』。『保曆間記』。
(一〇)『玉葉』。『東鑑』卷四。
(一一)『平家物語』。『明月記』。
(一二)『東鑑』卷十二。
(一三)『東鑑』卷十五。
(一四)『保曆間記』。『平家物語』。
(一五)『平家物語』。
(一六)『玉葉』。『百練抄』第十。『山槐記』。『愚管抄』卷五等。
(一七)『山槐記』。
(一八)『愚管抄』卷五。
(一九)『玉葉』。
(二〇)(二一)『東鑑』卷四。
(二二)『愚管抄』卷五—抑、この寶劍のうせはてぬる事…是はひとへに今は色にあらはれて武士の君の御まもりとなりたる世になれば、それとかへてうせたるにやと覺ゆる也、その故は太刀と云ふ劍は、これ兵器の本也、これは武の方のをほんまもり也、文武の二道にて國主は世を治るに、文は繼幹守文とて、國王のをほん身につきて、東宮には學士、主上には侍讀とて、儒家とてなかれたり、武の方をばこのをほん守りに、宗廟の神ものりて、守りまいらせるゝ也、それに今は武士大將軍世をひしと取て國主武士大將軍が心をたがへては元をはします、まじき時運の色にあらはれて出きぬる世ぞと、大神宮八幡大菩薩もゆるされぬれば今は寶劍もむやくになりぬる也」云々。
(二三)『長門本平家物語』。

第九章　賴朝の覇

第一節　武士階級の統一

西暦紀元四百十年の夏八月、西ゴート族の猛將アラリックが、羅馬の城頭に一たび旗を翻してから、ゲルマンの諸族は、洪水のやうに羅馬帝國の全土に漲つた。間もなく西羅馬帝國は、朽木のやうに蠻族の旗風に吹倒された。地中海の兩岸には、幾つかの王國がゲルマン族の手によつて打建てられた。然かもシャールマン大帝が、全ゲルマン族の勢力を統一して、羅馬帝國に代るべき一大帝國を建設するまでには、四百年を待たなければならなかつた。歐洲の中世史に於けるこの民族大移動の運動を、島國的に、小規模に縮寫したものが、我が中世史に於ける武士勃興の運動である。六孫王經基が東國に下つてから、滿仲、賴光、賴信を經て、東國の武士は次第に源氏の門に集つた。けれどもそれが賴朝の統率の下に、自覺した一大勢力となつて現れるまでには、二百五十年の訓練を必要とした。この間に武士勃興の波は、幾度か帝都を洗つた。既に廢頽した京都の文明は、彼等の武力の前に一たまりもなく瓦解したけれども、彼

シャールマン大帝と賴朝

らの手にはまだ之に代へるべき新しい文明と組織とが準備されてゐなかつた。丁度ゲルマンの諸族が、一たびアルプスを踰えると共に、南方の溫暖と華美とに觸れて、忽ちに北方の蠻氣を銷磨し盡したやうに、我が東國の武士も足を京都に入れるや否や、其の征服した文明の怨靈に因はれて、悲慘な最期を遂げない者はなかつた。我が賴朝の努力が、其の家人たる東國武士の統一と訓練とに傾けられたのは、シャールマンが全ゲルマン民族の統一を理想としたのと、東西揆を一にして居る。

賴朝は治承四年八月、以仁王の令旨を奉じて兵を擧げてから、其の年の十月六日にはもう鎌倉へ入つて、幕府を開き、十一月十七日、佐竹氏を征服して、常陸から凱旋した日を以て、侍所を置き、和田義盛を別當とした。侍所は家人の進退を掌る軍政上の一機關で、平時に在つては、殿中の警衛、罪人の糾斷、宿衛、扈從などの事をも掌つた。其の後元暦元年、一ノ谷の戰が終つて、更に平家の追擊に心を配つてゐる一方では、其の乳母の妹の子として、賴朝が伊豆に流されてゐた間も、始終使を送つて京都の消息を絶やさなかつたと云はれる中宮ノ大夫屬(さくわん)三善康信(入道善信)を始めとして、齋院次官中原親能、親能の義兄中原廣元等を鎌倉へ迎へて、行政上の組織に着手した。八月には公文所(くもんじよ)の工事を起し、十月に其工事の落成すると共に、廣元を別當として親能、主

幕府の創設

軍政機關